

# 清沢満之『純正哲学』意識

はじめに

## ・意識の経緯

今村さんが亡くなられて丸一年を過ぎたあたりから、段々と気になってきたことがあった。書棚に積みっ放しになっている岩波版清沢満之全集を読む、という仕事である。

私の清沢に関する知識は七割方が今村さんを通したもので、後の三割が必要に迫られて原文に当たるという程度のものであった。しかし、今村仁司に依りかかった清沢解釈はもう叶わないことなのだから、本棚に並んでいる清沢全集をこれ以上敬遠するわけにはいかず、通読を開始しなければならない。2009年1月、無限洞5号の編集作業が一段落した後に取り掛かることにした。

とはいっても、どこから手を付けて良いのか見当がつかない。とりあえず清沢の著作全体と生涯を把握するために「目次一覧」と「年齢順一覧」を作成した。この作業で著作の年代順リストが大体頭に入ったので、この順番に沿って読み進めることにした。そして『西洋哲学史試稿』『西洋哲学史講義』に及んだとき、私がこれまでに読んだ清沢の著作の中では初めてとっていいような種類の感銘を受けた。それは一言で言えば「命を削って書いている」という迫力だった。そもそもこの時代の漢学教養をベースにした知識人の文章の密度の濃さは、現代人が書く文章の二、三倍の情報が圧縮されている感がある。清沢の文章はこれに加えて「内部からにじみ出てくる彼の理論的精神」(今村)から生み出される文脈に、読む者の注意を惹きつける強烈な魅力があった。

続けて『純正哲学』を読むに及んで、この文章には清沢の思想の中核が、後の精神主義を形成するに至るまでの思想の「骸骨」が、ほぼ完成された形で表現されている、という印象を持った。

我々が清沢の思想を理解しようとする時、おそらく『純正哲学』の内容を押えているか否かで、精神主義等の後期文章の解釈には相当の差が出てくるだろう、という印象も持った。言うまでもなくこの見解は『清沢満之と哲学』第一部第一章で展開されていることであるが、今回、私自身の体験としても確認し得たということである。つまりは今村さんが清沢研究に集中するようになった具体的な理由の一つを、清沢の原文に接して見つけたと思った。そして、その意味を明瞭にするためには『純正哲学』を私なりに更に咀嚼しなければならない。これが意識をはじめた動機である。

## ・二十歳代の清沢について

意識を進めながら『純正哲学』関連情報をインターネット上で探し、インド学仏教学論文データベース(INBDS)経由で、次の二氏の論文を見つけた。

### 1 峰島 旭雄 氏

「明治期における西洋哲学の受容と展開(1) —西周・西村茂樹・清沢満之の場合—」

(主として西村茂樹の記述) 早稲田商学 201号 1968年6月

「明治期における西洋哲学の受容と展開(2) —西周・西村茂樹・清沢満之の場合(続の1)—」

(主として清沢満之の記述) 早稲田商学 205号 1968年12月

「明治期における西洋哲学の受容と展開 —西周・西村茂樹・清沢満之の場合(続の2)—」

(主として清沢満之の記述) 早稲田商学 211号 1970年1月

「明治期における西洋哲学の受容と展開(4) —西周・西村茂樹・清沢満之の場合(続の3)—」

(主として清沢満之の記述) 早稲田商学 216号 1970年7月

「明治期における西洋哲学の受容と展開(5) —西周・西村茂樹・清沢満之の場合(続の4)—」

(主として西周の記述) 早稲田商学 219号 1970年12月

※早稲田大学のサイトから pdf 文書でダウンロードできる。文書の中身は発表当時の雑誌のページをスキャンした画像であるが、十分読むことができる。3番目のタイトルの番号が欠落しているが原文のままである。また、ご覧の通り連載五篇のうち三篇は清沢に関する記述である。著者が如何に清沢を重視しているかが分る。

## 2 樋口 章信 氏

「R.H.Lotzeと清沢満之 —Metaphysikと『純正哲学』を比較して—」

大谷大学研究年報 第50集 1998年3月15日

※こちらは大谷大学 Web サイトには無く、大谷大学に問合せをして図書館の有料コピーサービスで入手した。

どちらの論文も「系譜学的」に『清沢満之と哲学』と同列にある内容であると思う。(今村さんはおそらくこの二論文は読んでいらっしやらなかったと思うが。)是非一読をお勧めする。

今村さんは常々、清沢を「並の学者とは全然学力が違う」と評しておられたが、同様のことを峰島氏が表現している文章があるので引用する。

わが国ではじめての哲学概論といわれる三宅雄二郎『哲学涓滴』が刊行された明治22年に清沢満之は『純正哲学』を出しているし、すでにその前年に『哲学定義集』を集録しているうえ、大西祝『西洋哲学史』上・下二巻(明治36年)や、波多野精一『西洋哲学史要』(明治34年)にはるかに先き立って、『西洋哲学史講義』(明治23-26年)をものしているのである。しかも、ただ単に、清沢満之が時間的に早く、あるいはほぼ同時に、これをなしたというだけではない。やがて論述するように、それは、内容からいっても、きわめて高度な水準に達しているといえるものなのである。

(明治期における西洋哲学の受容と展開(1) pp.51)

私のような、学問としての哲学の素養を持たない者にとっても、この峰島氏の記述は納得できる。『西洋哲学史試稿』『西洋哲学史講義』に見られる、並居る哲学者の論の欠陥を容赦なく抉り出していく魂胆の座り方はとても二十六、七の青年のものとは思われない。『純正哲学』での論の展開の中では、実質的に縁起や中観・唯識に通じるバックボーンが確立していることを窺わせる。この時代の人々は現代の我々と比べて、何倍もの密度で生きたとは良く言われることだが、それにして清沢は二十代半ばで、既に学者として円熟しているように見える。清沢は一体どのような経過を経てこの境地に達したのだろうか。そのヒントとなるような記述が樋口氏の論文に見える。

1887年(明治20年)に清沢は東京大学哲学科を卒業し、さらに同大学院に進んで宗教哲学を研究する。東西の哲学について語り合う会であった哲学会にも参加している。明治17年に、有志たちが学習院において会議を開き、哲学会創立の件について話し合った。そのとき入会した者、29名に及んだという。その中には、明六社グループの西周(1826-94)、中村正直(1832-91)、西村茂樹(1828-1902)たちがいた。また政治学者の加藤弘之(1836-1916)、文学者の外山正一(1848-1900)、教育家の嘉納治五郎(1860-1938)らがいいたし、哲学者として考えてよい人物としては、井上哲次郎(1855-1944)、井上円了(1858-1919)、三宅雄二郎(1860-1945)、そして徳永(清沢)満之たちがいたのである。仏教学者の原坦山(1819-1892)、島地黙雷(1838-1911)、吉谷覚寿(1843-1914)、南条文雄(1849-1927)、キリスト教学者の小崎弘道などもその場に出席していた。現在のように宗教学、仏教学、神学、

真宗学等に枝分かれする以前の、いわば当時の日本の代表的知識人が顔を連ねていたと言えよう。会長は加藤弘之、副会長は外山正一であった。雑誌の発行についても話し合われ、明治19年12月に清沢は『哲学会雑誌』の書記として実際に編集に携わっている。(R.H.Lotzeと清沢満之 pp.55)

明治初期に現れたこのような稀有の環境の中で、清沢は自身の思想を急速に開発していったものだろう。しかしそれにしても『純正哲学』の文脈の中に見られる仏教的思考には、当時の学問仏教の水準をはるかに越えたところに立っていたのではないだろうか、と感じられるものがある。あくまで「感じ」の話で裏付けなど無いのだが。清沢の仏教的センスは、清沢没後に山口益によって明らかにされた仏教思想を先取りしている感がある。このようなセンスを清沢はどうやって身に着けたのだろうか。

交流していた南条文雄を含めた仏教学者達の影響はある程度あったろうが、当時の仏教学のレベルは清沢のセンスには追いついていない気がする。

東京大学時代の仏教教養の蓄積はおそらく独学だったろう。独学でセンスを磨き上げた？それ以前の仏教勉学の場は東本願寺育英教校で清沢は16～19歳までここで学んでいる。仮にこの学校の仏教教育のレベルが相当高かったとしても時代の限界があると思う。

『純正哲学』の種本となったロツツェの『形而上学』に既に仏教的思想が内在されていた？これも部分的にはありうるだろうが、決定的とは言いがたい。

やはり、清沢自身の才能が開花して事実上無師独悟の状況で身に着けた、ということだろうか。この解釈が私には一番しっくりくる。

以上、問題になる以前の疑問を羅列したが、私にとっては二十歳代の清沢にはこのような不思議さがつきまとう。どなたかこの辺の事情に詳しい方がいらっしゃったらお教え頂きたい。

## ・意識の中身

『純正哲学』の原文は漢文ベースの擬古文体表現で、当時の哲学用語を使用し高度な概念の構築や論証を行っている。哲学館での講義録で、おそらく清沢が原稿を読んで説明する形式で講義した内容を聴講者が筆録したものと思われる。その事情からか、ところどころに誤字・誤表現と見られるものが混じる。古風な表現や難しい漢字によって、私の頭ではすぐに理解はできない文章になっている。自分なりに理解するためには、辞書を引き現代文に翻訳する中で概念や文意をおさえていかなければならない。意識はそのような作業の結果であるので、私の学習ノートのようなものである。できるだけ自分が納得できる文章に変換したが、ところどころ文意が取れないところも残っている。

また、当時及び現代の哲学の専門用語には全く不案内なので、うまく訳しきれておらず、多くは原文の語彙をそのまま使っている。これによって大きな勘違い、間違い部分があるかもしれない。

これらの点で修正や改善の箇所を見つけられた方には、ご指摘を頂ければ幸いです。随時修正更新を加えて完成度を高めていきたいと思っておりますのでご協力をお願いします。

2009年5月11日 星 研良

## 凡例

- 原文で定式化の記号として使われている、甲、乙、丙、イ、ロ、ハ等は A、B、C、a、b、c 等に適宜変更してある。
- 文脈・文意をはっきりさせるために番号付け、段落分け等を随所で行っている。
- 訳者(星)の注記は[]でくくって訳文中に挿入した。その内容は意味の補強、例の表示、訳者の意見等雑多である。訳文との分離も考えたが、いずれ訳者の見方が入った意識なので、この体裁で通すことにした。  
注記中に「今村」とあるのは今村仁司『清沢満之と哲学』からの引用で数字は該当ページである。
- []に数字は原文の段落に対応する。利便のためにそれぞれにタイトルを付けた。

## 更新履歴

- 2009年5月28日 pp.11 の「批評学派」の解説追加。
- 2009年5月28日 pp.31 のコメントの「同一律を指すか？」の記述を「同一律。」に変更。
- 2009年5月13日 公開。

# 純正哲学(哲学論)

文学士 徳永満之 講義

## 序言

### [1] 講義の方法

哲学を講義する場合には三つの方法がある。

- 1 講義者本人の自説を述べる。  
これは自分の説を述べるので正確ではあるが、評価の確立した大家でもないかぎり独断の悪影響を及ぼす可能性がある。
- 2 過去数百年来の哲学史に従って、主要な哲学者の説を述べる。  
これは各哲学者の説を概観し、その長所・短所を手短に知るには都合が良いが、それぞれの説を詳しく知ることは難しい。
- 3 特定の学者の説を詳しく述べる。  
これはその学者の説を詳しく知るには都合が良いが、その説のみに偏ってしまう可能性がある。

しかし、ここでは方法の良し悪しの検討はせず、三つの方法のうちのどれを講義方針とするかを決めることにする。

1は私の取るところではない。

2は既にこの哲学館の科目として別にある。

したがって私は3によって、ドイツのロッツェ(Rudolph Hermann Lotse 1817~1881)の説を根拠として哲学の講義をしようと思う。

ロッツェは最近の学者で、その説の特徴は唯心論、唯物論の何れにも偏らず、両者の中庸を取り、補完関係を築こうとする。そして自然科学の理論的基礎となる原理を究明することが、哲学の要点であるとしている。

したがって科学全盛の今日において研究する意義のある説としなければならないからである。

## 緒論

### [2] 変化・実体の定義

純正哲学は変化のある実体を研究する。

「変化」とは物事が生滅し、起動し、休止し、出現し、消滅することをいう。

「実体」とは宇宙にあるすべてのもの、すなわち万有を指す。

もっと詳しく言えば、実体とは

無ではなく有である物、

起らないのではなく起ること、

存在しないのではなく実存する関係

である。

これらはすべて「実」であって「虚」ではない。

また実体を次のように解釈する者もいる。

- 1 実体は現象である。現象は無限に有って雑多この上ないのだから理想(アイデア)の恒久・明瞭であることに劣る。
- 2 実体は「真の実体」である。その変動は一定の法則にしたがって秩序正しく行われ、またその活動は無限に多様である。したがってアイデアなどという雲を掴むような考えに勝る。

この二つの実体のとらえ方は古くから哲学の大問題で、手短かに論ずることはできない。哲学の根底に達しなければ満足に解釈しうるものではない。

そして、この二説は万有の評価の態度については異なっているが、しかし、変化するものであることは共に認めている。

変化とは万有を貫いている事実である。

転化衰滅・行動受動・運動開発とは変化を形容する言葉である。

そして、これらの言葉で言い表される事象が、古くから純正哲学の研究を促してきた。

### [3] 哲学の起る理由

純正哲学は予想〔想定〕と実験事実との矛盾に直面するところから開始する。

思うに諸々の学問は事実とそれに対する説明が明らかでないものがあることから起る。純正哲学の起源もこれに異なることはない。

我々が日夜に遭遇する実験事実は、すべてが我々の予想(想定)に合致するというものではない。事実が予想と矛盾すれば、どうしても消しがたい疑問が湧き起こる。これを解決しようとして色々な学問が起る。純正哲学もその一つである。

ところで、我々が懐く予想には三つの種類がある。

- (1) 我々の本性として、あるいは生まれつきとして備わる予想は、我々が日常の事実として経験することとは関係がない。我々にはもともと物事の真理を知覚する性質が備わっている。したがってこの生まれつきの性質を開発すれば、万有の原理を知ることが可能である。  
よってこの説を立てる者は予想と現前の事柄との検証を軽んじる傾向がある。
- (2) 情緒的な予想が真にして確実な万有の真理である。  
この説は道理(論理)を捨てて信仰に依るというパターンである。単純に宗教的感情から万有の原理を説明しようとする者は皆この類である。したがってこの説は道理に依ることを放棄しているから、哲学の立場からは是非を論ずる必要はない。
- (3) 実験的予想については、これまでの経験から数多くの法則を発見した。これらの法則こそが万有の真理原則である。  
近世の自然科学上の成果に基いて万有の原理を究明しようとする者は、大体皆この説に立つ。これは少しは正確さの含まれる予想であるが、その基礎となる経験がどのようにして成立するかということを知明していない。これがこの説の欠点である。

以上の三種類の予想は、我々が実際に経験する事実とは一致しない場合がある。これが疑問の起る理由であり、また哲学の起る理由である。

#### [4] 二種の懐疑

疑問の起るについて、予想と事実とが合致しないことから二種類の懐疑が生れる。「不合の懐疑」と「整合の懐疑」である。ここで言う懐疑とは、万有を説明する原理は得られるべくもない、という主張を意味する。

学者が日夜汲々として研究にいそしむのは、万有を説明する原理原則を発見しようという目標があるからである。

しかし、そのような努力に対して、個々の事物の原理・定則は発見できるだろうが、万有の真理・原則に至っては到底人間の探知できるものではない、と言う者がある。これは部分的な原理・原則の発見を認めている。

また、万有の真理・原則はもとより、個々の事物の原理・定則についても発見不可能と主張する者がある。これは、つまりは懐疑を徹底した者である。

この二種の論者が「不合〔不徹底〕」「整合〔徹底〕」〔この順番は以下の文脈に合わせるためにあえて逆転させている。〕の懐疑論者である。

前段〔3〕で予想と事実とが合致しない場合があることを示し、その中の三種の予想で〔2〕の情緒的予想は哲学上是非を論ずる必要のないことを注意した。

そして残る〔1〕、〔3〕の予想からここで言う二種類の「不合の懐疑」と「整合の懐疑」とが生ずるのである。

予想と事実とを合致させることができなければ、どちらかを取り他方を捨てざるをえない。とすれば、我々は実験事実を捨てるわけにはいかないのだから、予想を捨てざるをえない。

しかし、その予想の中でも実験的予想を棄てるわけにはいかない。なぜなら、これらは単なる予想ではなく実験に基づいて立てられるからである。

よって懐疑は次のように二種に形を成す。

1 実験に基づく原理は真理と認める。しかし万有の原理などは実験での証明が不可能なのだから知ることはできない。我々が知りうるのは、個々の事物についての実験的定則に止まる。

これは、ある程度の原理は知り得るが、全体の原理は知り得ないという者だから、部分的な懐疑論者である。また、原理を知ることが可能〔個々の事物について。〕と言い、同時に原理を知ることが不可能〔万有について。〕というのだから、これを「不合の懐疑」と名付ける。

2 生まれつきとして備わる予想については初めから実験を考えていないので、これを捨てても事実を把握するには何等問題はない——そしてこの考え方がそもそも事実によって原理を求めないという態度に通ずる〔つまり原理ははじめに予想を立てないと求めえないから。〕ので、それを徹底させてしまうと、一旦予想を棄ててしまえば、原理を求める必要はなく、また求めることはできない、というところまで行ってしまふ。ここから次のような結論に至る。

我々は決して原理を求めることはできない。我々に言えるのは、過去に或る事実があった、現在には或る事実がある、ということのみである。これらの事実によって原理を求めることは不可能である、と。

この論者は原理を知ることの不可能を徹底的に主張するので「整合の懐疑」論者と名付ける。

#### [5] 蓋然の捉え方(有規聯絡の登場)

「蓋然〔仮説、可能性〕は有規聯絡の外<sup>そと</sup>に求むべからず」という命題は実験学者が十分注意すべき事柄である。

学者が早朝から深夜まで研究に打ち込むのは、万有に一定の規律があつて、物事が聯絡(連繫)していることを感じ取っているからである。もしこのことが無いとすれば、どうして面倒な考究の苦勞をわざわざするだろうか。

また、この聯絡の認知は、研究の初めに仮定を立てる動機付けに有用なだけである、その後の觀察実験で仮定を証明することこそが、正確さを求める学問として重要なのだという見方もある。しかし、そもそも仮定とは、既存の事実に現れる一種の關係を總括した言い方にすぎない。

觀察実験が仮定に合致する、という判断が起きることや、仮定から推測して不変の原則を導き出すということは、全て我々の思想(思いと想像)における出来事である。すなわち万有に一定の規律聯絡があるという思想である。

この考えに次のように反論する者がある。

觀察・実験で有規聯絡の存在を証明をすることはできない。なぜなら、觀察実験が仮説に合致することが増えるにつれて、仮説の確實性〔蓋然の度合い〕が高まっていくからである。(蓋然とは将来も多分そうであろうということで、既存の事象から将来の事象を推測するのだが、必ずそうなるとは言わず、そうならないだろうという疑いも残すのである。)[つまり、仮説の証明には觀察実験の結果があればよく、有規聯絡という思想は不要である。]

この見解に答える。

そもそも蓋然という考えは、有規聯絡があることを先ず認めないかぎり、決して出てくるものではない。なぜなら、既存の事実を根拠として将来もこうなるだろうと推測すること(=蓋然)は、すなわち事物の説明を欲しているのである。

その将来の推測の度合い(蓋然の度)が増進するということは、事物の説明がますます完全に近づくということの言い換えに過ぎないからである。

よって「事物の説明」とは、一見隔離し散逸している事物を、統一した一定の規律において把握するということである。

したがって、万有に一定の規律が無いとすると「事物の説明」そのものが無意味となり、事物の説明が無ければ「蓋然」という考え方もまた無意味となってしまう。

言葉を換えて言えば、蓋然とは既存の事実においてAという現象の後にBという現象が続いて起るのを見て、将来も同様のパターンで起りうるだろうと推測することである。

これについて、もし事物に一定の規律が無いとしたら、Aが起きた後、[Bではなく]C、Dその他の任意の現象が起きて当然ということになる。

そうではなく、Aの後にはBが起るということ蓋然〔ありうること〕とし、Aの後にC、D等が起ることは不蓋然〔ありえないこと〕とするのは、有規聯絡があるということ認めている立場になるのである。

以上から、蓋然〔ありべきこと〕、不蓋然〔ありえざること〕の判断は有規聯絡の枠内で追求すべきもので、その外に求めるべきではない。

## [6] 有規聯絡の位置付け

「万物の要因は不可知(觀察実験によっては知りえない)的ではない」という主張がある。前段の結論にこの主張が合すると、必然的に純正哲学が成立することとなる。

前段で実験によって知識を得るという行為は、有規聯絡が確實にあるということ認めないかぎり成り立たないことを示した。

しかし、実験学者はまた新しい反論を出す。

我々は有規聯絡という一個の仮定を設けなければ、知識を得ることはできないということは認める。しかし、これは単なる一個の仮定に過ぎない。真実に知識を得るための方法は実験のみである。実験以外に方法があるとはとても思えない。哲学者という連中は万物の要因(要因とは、無限の現象の本体、本性というもので実験以外にあるとするものである。)を求めるが、これを得ることは到底できるはずがない。[不可知である。]

だから、要因を得る目的で「哲学」という学問を立てることは無益である。

これに答える。

万物の原理原則を推測し研究していけば、一つの不可知的なるものに行き着かないわけにはいかない。

しかし「要因を知ることは決してできない」という断言に至っては、この主張そのものが矛盾に陥っている。

なぜなら「要因を知ることができない」という言い方は、既にその「要因」のあることを認めているということではないか。既に要因のあることを知る。とすれば、なぜ不可知と言えるのか。

さらにまた、これを「不可知と言う」ことは、要因と我々との間に一定の関係があること、すなわち「知るべからざる理由」のあることを既に認めているではないか。とすれば、どうして不可知と言えようか。

[この展開が見事。不可知論者は「語る(ロゴス)こと」の枠内での論であるが、それに対する清沢の論駁は「語ること」そのことを語ること(ロゴスをロゴスすること)のレベルに飛躍して、相手の立場をバツサリ切り落としてしている。相手からすれば無茶な言いがかりとしか取れないかもしれないが。(このあたりは[今村41]参照)。]

ましてや君が「単一なる仮定」というところの「有規聯絡」は、たしかに単一の言葉で表されているから、その意味も単一であると思っているかもしれないが、決してそうではない。

論理・数理の原則、空間・時間・原因・結果の関係等は、すべて有規聯絡に属する原理・原則と言わなければならない。これらは全て実験知識を形成する場合に不可欠のものである。

しかし、これらは決して観察・実験によって得られるものではなく、それらの要因と言わなければならない。そしてまた、これらの原理・定則はどのようなもので、実験事実とどう関係するのだろうか。さらに実験以外のものにも通じるのではないだろうか。これらの様々な問題を解釈しなければ、諸学問は確固とした基礎が何一つ無いものとなる。

よって次のように言わざるをえない。

万物の要因を悉く知るといえることはできないが、だからといって不可知的と断言してはならない。要因が知り得るものであれば、そのために一学問を設けて、それを研究することは最も重要なことである。

## [7] 実験知識と有規聯絡の関係1

実験知識は純正哲学に基かざるをえない。思うに実験が我々に与える内容というのは、その実験の範囲内で起る事に限られ、その外に及ぶことはできない。

すなわち、過去にある現象があった、目前にはある現象がある、ということだけを教えるだけである。これらはただ現象を列挙・叙述するだけである。

しかし、知識の知識たる所以とは、過去と現在の事象から将来の事象を推測し、既知の事実と現在の事実から、未知の事実を推測することにある。これを未来徹見未知推測[未来を見徹し、未知を推測する]という。

多くの学術があり、実に多岐に亘っているが未来徹見未知推測の外にその働きがあることはない。そしてこの働きは実験が与えることのできないものである。なぜなら、未知・未来は実験の範囲の外にあるからである。

それでは何がこの重要な働きを実現しているのだろうか？

それは先に言及した有規聯絡である。

宇宙の事象に確然不動の規律と聯絡がなければ、過去と現在にどんな不変の事実が存在していたとしても、我々はそのことから推測して将来もまた、その事実が続くだろうと言うことはできない。

またこれが無ければ、既知の事実と現在の事実にどのような一致があろうとも、我々はそのことから推測して未知の事実も同じように一致するだろうということができない。

したがって、実験知識の知識たる所以は万物の変化に確然として不動の規律が備わることによる、と言わざるをえない。

すなわち、実験知識の基礎は有規聯絡にあると言わざるをえない。

よって、有規聯絡は純正哲学の研究領域だから、実験知識は純正哲学に基づくものであると断言せざるをえない。

## [8] 実験知識と有規聯絡の関係2

しかしながら、純正哲学の原理は実験と相寄り相助けて正確な知識を生み出すこともまた知るべきである。

前段では、しばしば実験を排撃したが、この意図は実験のみが知識の本源であるとする誤った見方を正そうとしただけである。

近代は実験の趨勢が非常に盛んになって、ほとんど純正哲学を払掃する状況にあるが、しかし前段の結論で実験は純正哲学に基かなければありえないことを示したので、今度は少し立場を転じて純正哲学の専横は排除しなければならないという点を論ずる。

純正哲学が実験を無視して誤りに陥る例は実に少なからずある。思うに純正哲学は原理原則を究明するもので、特殊個別の法規法則を探求することはできない。

どのようなものが現実存在し、どのようなものが実際に起るかは、実験の他に確認できる方法は無い。

そして、真実に有用な知識とは、このような個々の実験の事実を採集し、これらを万有に普く通づる原理原則に照して、宇宙進化の行程を認知するところにある。

これを詳しく言えば次のようになる。

純正哲学は理法を与えるのみで、その理法に適応する材料は実験から採集せざるをえない。

家を建てるという行為でこれを喩える。

設計図は理法で木石は材料である。

設計図がいかにか精緻であっても、設計図に住むわけにはいかない。

木石がいかにか豊富にあっても、木石に住むわけにはいかない。

そして家の家たる所以は住むことができるということである。

知識もまた家と同じである。

知識の知識たる所以は特殊・個別の法規法則にある。

原理原則がいかにか精緻でも、実験事実がいかにか豊富にあっても、この二者が相互に関係しなければ、特殊個別の規律を生ずることは決して無い。

よって、純正哲学の原理原則は実験事実と相互に関係して、正確有用な知識を生ずると言わなければならない。

## [9] 思想の基礎付けについて

心理学が純正哲学の基礎ではない、ということを理解することは最も重要な点である。

前段で何度も有規聯絡の必要性を述べたが、有規聯絡というものは我々の思想の中で、かくあらねばならない、ということを明らかにしただけで、つまりは思想に必然的に備わるということに注意

ただけであった。

そうして、その有規聯絡の研究を開始するに先立って、思想とはどのようなものであるかを探求しなければならない、という意見が起きる。

思想の必然は有規聯絡のような万有の原理を判断・決定できるのか。あるいは、思想はこの判断・決定をするには力不足ではないのだろうか。またこのような思想を有する我々の精神とは、そもそもどのような作用をし、どのような性質を持つのか。

これらの問題を検討しないで、すぐに万有の原理を究明しようとしても、誤謬に陥る恐れがあるのではないか。そうだとしたら、純正哲学の研究には心理学を基礎とせざるをえない。

これが英独の何人かの学者が立てる説である。(経練学派[=経験主義。全集5 pp.172でのロックの記述で「経練学の基礎をなす」とある。]批評学派[=カントの批判哲学。全集5 pp.210でのカントの記述で「これを批評哲学と称す。」とある。]等がこれに属する。)

しかしこの説が間違いであることは容易に判る。

この説の論者は、思想を用いて万有の原理を探求するに先立って、思想そのものの何たるかを究明しなければならないと言っているが、その究明はどのような作用によって為しうるのか。

判断・推理等によるのではないのか。つまり思想の必然によるのではないのか。

とすれば、思想の何たるかを究明しようとして、かえってその思想の指令に従っているということになる。既に思想の指令に従っているのである。なぜこれに依ってただちに万有の原理の探求を開始しないのか。

以上をまとめるとこうなる。

我々が物事の筋道の真妄を判定する場合は、思想の必然に訴えないわけにはいかない。すなわち、思想はその内部の関係によって物事の筋道の正・不正を確定する能力を持つと言わなければならない。

どうしてこのような能力を持っているのかという疑問は、その能力の価値を少しも変化させはしない。そしてこの能力の起源を究明しようとするれば、また思想の必然に依らざるをえない。

よって純正哲学は心理学を基礎とする必要が無いことは明白である。反対に心理学の研究はかえって純正哲学を基礎とせざるをえないと言える。

何故なら、精神であって一個の実体であるものは、純正哲学の範囲内に入らざるをえないからである。精神であって変化を呈するものは、また純正哲学の範囲内に入らざるをえないからである。

## [10] 規律と意匠

純正哲学は規律[思想の必然によって見出される法則性]を依りどころとし、意匠[万有の存在目的とか造物主の意図といった考え方]を重視しない。

前段で何度も有規聯絡を論じ、特に知識が生ずるしくみは有規聯絡が確実にあることを仮定してはじめてありうることを説明した。

そして有規聯絡という考え方は近代では万有に普遍で時代を通じて共通である、と捉えられているが、理性の未熟だった古代ではこの見解にはまだ至っていなかった。

すなわち、古人も万有の間に一定の聯絡あることを認めたが、その場合に普遍の規律とはみなさず、唯一の造物主による意図・計画による聯絡とみなした。よって個別の事物は皆それぞれの目的を持ち、それらの目的が全て結合したところに、唯一の造物主の目的が完成するに至ると考えた。

よって、この考えを持つ論者は、唯一の最上究竟の観念を以って全学問の起点とし、そこから全ての物事の目的を演繹して、その目的によって個別の物事の現象を説明しようとした。

しかし、彼等の常に誤れる点は最上究竟の觀念の何たるかを説明できないところにあった。最上究竟の觀念が不正だとしたら、そこから演繹するもの全ては、皆ことごとく誤謬を免れることはできない。もし幸運にも良い結果に達したとしても、それは情感的な満足を生み出すところに止まり、確実な議論によってそれを証明することは不可能である。

そして確実な議論での証明ができなければ、それは哲学の対象とすべきものではない。思うにこのような最上究竟の觀念は、例えそれがあるとしても我々が現実に到達できるものではない。

我々の到達可能な領域は現実の万象にある。現実の万象の中に、真にこのような觀念から起り、それに従って世界に行き渡っているものがあるとすれば、現実の万象の探求の中で、その最上究竟のものを必ず覚知しうるだろう。

そしてそれが覚知可能であれば、必ず普遍的に通じる有規聯絡に帰するはずである。なぜなら知識は有規聯絡に基づかざるを得ないからである。

したがって、最上究竟の觀念に到達できると否とに関わらず、純正哲学は普遍的な有規聯絡を現実の万象の中に探求すべきである。

以上が、純正哲学は規律を依りどころとし意匠を重視しないということの意味である。

### [11] 純正哲学の対象範囲

さて緒論を終るに当って、この学問が対象とする範囲を明らかにし、講義を展開する順序を説明する。

純正哲学の対象範囲を明らかにするのは困難なことではない。古来からこの学問に従事し、その範囲を示した者が少なからずいたからである。

また、この作業はそれほど難しくもない。それらの成果を検討すれば、範囲は容易に見出せるからである。それを示す。

先ず

(a) 外界としての万物〔外的自然（今村 40）〕

(b) 内界としての精神〔個人的・集団的人間精神（今村 40）〕

の二つの区分がある。この二界は相互に関与し社会的・歴史的世界を形成してきた。そこで起きる現象は我々の研究を促すと同時に、

(c) 二界を貫通して全てを統制し、二界相互が関与する活動が生起せざるをえない原理・真性

〔真実の存在＝存在についての論証的な語り、存在者について語るどころの「語ること」そのことを語ること（今村 41）〕

これも我々の考究を誘起して止まらないところである。

この三つの領域での疑問が古来から哲学の範囲を区分してきた。ここでもそれを継承し、科名を立て講義の順番を示す。

1 実在論(c)〔存在論。または(存在について語る)論理学。(今村 41)〕

内外貫通する原理を考究する。

2 宇宙論(a)〔自然哲学。縁起論の自然哲学。(今村 41～42)〕

外界現象の原理を考究する。

3 心霊論(b)〔人間学。社会的・歴史的世界を扱う縁起論の人間学。(今村 42～43)〕

内界現象の原理を考究する。

## 本論 第一章 実在論〔存在論 —語ることそのことを語ること—〕

### 第一節 事物の実在

#### [12] 何を以って実在とするか

実在とは真実に存在することを指す語で、「事物の実在」とは、多くの事物が真実に存在する、とはそもそもどういうことであるかを議論研究することをいう。

この問題は、一見単純で特に頭を悩ます必要など無いように見えるが、哲学の理論において捉えようとしたときは、決してそうでないことがわかる。

事物の存在の真であるか否かは、哲学史最古の時代からの問題である。

通常、人は五官で感知できるものが真実に存在するとみなし、感知できないものを真実でない存在とみなす。しかし、五官で感知するものでも実物が存在しないことがある。例えば鏡に映った像、水に映った月などである。これらは〔眼で〕感知できても実体であるとはいえない。よって古来、現象と実物の区別がある。

また実体と認めたものでもそれを分析していくと実体たるべき形が曖昧となり、有るとは言えなくなるものがある。また実体と認めていたものを分割すると別のものになる場合もある。このように結合によって成り立つものは単一独立ではない。これにより単一と複雑との区別が出てくる。

栄枯するもの、盛衰するもの、生滅起伏するものあり。これにより変化と不変との区別が出てくる。

このように観察されてきた歴史の中で、実在物とは我々がそれを認知するか否かに関係なく単一にして不変なるものであるとする思想に至った。

しかしこの三つの性質〔五官の認知に関せず、単一、不変の三つ。〕は「あるべき実在物」の特徴を列挙したものに過ぎず、実在の内容、すなわち実在が何であるのかを明らかにはしていない。それだけでなく、この三つの特徴は次のような〔それぞれ別種な〕ものにもあてはまってしまうのである。

我々の認知に関しないものは様々な「真理」について言える。

単一なるものは五官の個々の感覚について言える。

不変・不動は思想界における常識である。

とすれば、「あるべき実在物」の実在する所以は、この三つの特徴の他に求めなければならない。それが最も肝要なものとなる。

#### [13] 感覚を実在の根拠とできるか

これに次のように答える者がいる。

思想によって実在物が何であるかを探求しても、到底知ることはできないだろう。なぜなら思想と実在物とは性質が異なるからである。本当の実在物とは我々が接触して知りうるものである。すなわち感覚は実在物の真であることを知らせるものである、と。

実にその通りである。我々が物体を調べようとするときは、常に感覚に訴える。たとえ、そのものがあるという論理証明の正確なことを理解しても、また、そのものがあると言っている他人が決して自分を欺かないことを固く信じる場合でも、なお、そのものを直接見聞きするとき、始めて疑心を散ずる、というのは我々の常識である。

そうだとすれば、感覚は我々を欺くことがない、とは言えないが、欺かない場合は実在を知るための唯一の手段となるだろうか。しかし、感覚が果して実物の真性を知らせてくれるかどうかは更に検討しなければならない。

#### [14] 感覚を実在の根拠とする説の限界

感覚は極めて単純なものと言えるが、これを分析すれば能感・所感の二つに分けられる。実際にはこの二者は常に一体不離でそれぞれを識別することはできない。しかし、思想においては二者の識別は可能である。

青、黄、赤、白等の感覚では、これらの感覚を生ずる時、我々の精神作用〔すなわち感受の仕方〕は、どんな場合でも一定の結果を出す。〔つまり、青を見て、ある時は青ある時は黄といった異なる結果を出すことはない。〕これが能感である。

外からの刺激としての青、黄、赤、白の四個はそれぞれ異なる。これが所感である。

この所感、我々を離れて独立自存するものと言える。ということは、実在なるものが外物に属するとすれば、この所感の中に存在せざるをえない。

すなわち、所感の中には青、黄等の場合のようにそれぞれ異なるものと、〔我々を離れて独立自存する〕という不変の性質ともいべきものがなければならぬ。何故なら〔独立自存する〕実在は青、黄等の何れにも属すべきだからである。

換言すれば所感の中に、変異の元素と共通の元素がなければならぬ、ということである。

しかし、能感・所感が相互に合して一感覚を形成するに当って、所感の変異の元素というのは能感を喚起して青、黄等を認めさせるものに過ぎない。

よって、青、黄等の感覚においての共通の元素は能感を喚起するということの外にはあるべくもない。すなわち、能感を喚起する、ということの外に所感に共通する元素は感覚中には存在しえない。

ということになると、感覚によって「あるべき諸物の実在」を知ることができるという説は、無効に帰せざるをえない。〔すなわち、知ろうとするものそのもの（能感）を離れて、独立自存する知られるもの（所感）を認めるということが不可能になるからである。〕もし、真に感覚によって知り得る実在があるとすれば、それは「能感を喚起する事実」にあると断言せざるをえない。

#### [15] 「通常の見解〔語ること〕」の検討

このように事物の実在は感覚によって知りうるとすると、その実在は所感が能感を引き起こすことにあると言わざるをえない。

換言すれば、所感の物体は能感の境遇となり得るという一事に諸物の実在はあるということである。そうだとすれば、能感の無い所に事物の実在は無いということになる。何故なら能感を離れて〔所感の実在なる〕境遇は無いからである。〔事実上唯識の唯心の境地に立っている。〕

しかし、このような捉え方は通常一般見解と大きく趣を異にする。通常の見解でも感覚が実在を知る唯一の方法であるとする。そこから、一感覚の与えるところがその物の真性を尽し、一物の実在とは感覚以上のものではない、という誤謬に陥る場合がある。しかし、諸物の実在は我々の知識の中にあるのではなく独立自存する、ということ、この見解も疑わない。

(a)すなわち、諸物は我々がそれを知ると否とに関わらず、実存するというのである。

これは非常にはっきりした説で疑いをはさむ余地は無いように見える。しかし注意深くこの見解を検討すると、そうとも言えなくなる。

思うに「物が実存在する」ということは、それが我々の心に現れるから言えるのである。「実存在する」ということは我々の心に現れるということに過ぎないとも言える。

それでは(a)の「我々の心に現れることなくして物の実存在する」とはどういう意味を言っているのか？

これに答える。

一人の心に現れなくても、他人の心に現れるということである。例で示す。

ここに一室があって数人が会合し相談しているとする。その中の一人が室内を去っても他人は依然として室内で談論している。その室内を去った者の心には室内の事物は現れないわけであるが、室内にいる他人には依然として事物が現れているということである。

この説明は一理なしとは言わないが、未だ完全ではない。  
我々の心にも他人の心にも現れない場合はどうなるのか？  
宇宙において精神というものが全て滅却すればどうなるのか？  
[独立自存を認めるとこの疑問まで必ず行き着く。]  
といった難問をこの説は免れることができない。

通常の見解はこれに答える。

そのような時に至っても、事物は相互に関係しつつ世界に行き渡り遷りゆくことは、我々がそれらを見聞き知覚した時と同じで、それと異なることはない。

#### [16] 「通常の見解で事物の関係を語ること」の弱点の指摘

これに反論する者がいる。

事物の实在はそれらの相互の関係にあるといっても、「関係」なるものは、我々の思想に依っているので、それを実とも不実とも判断しうる。

ということは、「関係」は単に我々の思想内にだけあるものと言わざるをえない。だから「事物の实在は相互の関係にある」という主張は現実の関係ではないということになる。

#### [17] 弱点を指摘する立場の混乱について

それでは「常に思想中ののみある関係」はどのようにして「現実の関係」に転化するのだろうか？この疑問はどうてい哲学が解釈しうる問題ではない。これを解釈しようとすれば常に自己矛盾に陥る。

思想中の関係が現実の関係に転化するという説明を求める者は、現実がどのようにして虚無から生起するかを尋ねる者である。

すなわち我々に「万物が生起する原因を示せ」と迫っているのである。

しかし、万物の生起については、哲学の範囲外の事である。それを求めるのは、眼無くして物を見ようとするようなもので、決して為し得ない。

哲学は万物が既に実存しているところに起り、実存する万物の説明を与えようとするものにすぎない。[すなわち、「実存」という未知の意味内容を、探求しつつ部分的に明らかにしていく学問である。]

生起と説明とは決して混同してはいけない。

通常の見解において「生起の疑問」を解釈しようとしなないことは、当を得たものと言うべきである。

#### [18] 「通常の見解」とその弱点を指摘する立場双方の限界

しかし、通常の見解が関係の何たるかを明瞭に示し得ているかということになると、哲学はそれは決してできないということを主張する。

これを詳しく説明しよう。

先ず、関係と我々の思想とは相互に順応するものである、ということと言おう。この意味は

- 1 事物の関係は我々の思想の変化に随って変現する。〔事物間に「関係がある」と認めるのはあくまでも我々の思想であるから。〕
- 2 我々の思想は事物の関係に順じて変化する。〔事物間に認められた関係によって我々の思想は決定的な影響を受ける、あるいは事物間に認められた関係の集合によってのみ我々の思想は形成されるから。〕

この二様にあるということである。

ここで二様にあるのではなく、1か2の何れか一方のみが成り立つとするとどうなるかを検討しよう。

1のみが成り立つとした場合。

すなわち、事物の関係は完全に我々の思想の変化に随って変化する、とした場合、事物の存在は我々の精神の外に独立自存するとは言えなくなる。〔事物の関係は我々の思想でどうにでもできるものとなる。〕

2のみが成り立つとした場合。〔これが実は「通常の見解」に当てはまるのだが〕

すなわち、我々の思想は完全に事物の関係に随って変化する、とした場合、事物の存在は我々の精神の外にその基礎を有すると言わなければならない。

すなわち関係は実物と実物との間に実存し、我々の思想はただこれを発見しうるのみである。

そうだとすれば、関係を離れて事物が存在することなく、事物を離れて関係の独立自存することがない。それだけでなく、一物の存在は他物の存在を必要とし、一物の行動は他物の行動と離すことはできない。

更にこの考えを徹底すると一物の存在は万物の存在であり、一物の行動は万物の行動であると言わなければならない。

#### [19] 「独立自存する純正存在」の浮上

事物の存在は、このように無数の関係が互いに聯合・組織して成立するもので、決して分離すべきものではない。しかし、この組織を分析する場合は、次のように考えざるをえない。

事物は個々独立して自存し、諸関係の中心点として存在する。それらの事物が先ず在って、その後それらの事物の間に現実の関係が成立する、と。

このような、関係を離れても在りうる独立自存の存在は「純正〔純粹？〕存在」と言われるもので、哲学・思想界の一大問題である。これを「純正」と名付ける所以は、関係を雑えた経練的存在と区別するためである。

〔「あるべき存在」を求めた結果「独立自存する純正存在」に到るのは、ある面必然と言えらる。これは「語ること」そのことの限界あるいは欠陥に根ざしていると言えらる。〕

#### [20] 純正存在の陥穽

純正存在は古来から哲学上の重要問題となり、常に学者の考究を促したものである。その学者の論拠をここで批評することが必要である。そうすれば、我々の探求に有用な結果を得らるらるうから。

事物の存在はそれらの相互の関係にある、ということになれば、この関係があるものを存在とし、無存在あるいは虚無と判別可能である。

ここで、事物の存在の思想から関係の思想を除くと、この判別が不可能になる。

つまり、何れの場所にも無く、如何なる行動も起こさず、何れの時にも無く、如何なる影響も受け

ることなく、静でなく、動でなく、一言で言えば毫も関係を持たないものは、正に無物・無在と同一である。実在と言うべき根拠が無い。〔これが純正実在ということになってしまう。〕

これに反論する者がいる。

純正実在は、はじめに事物があって、その後に関係を除いたもので「無関係」をその属性とする。無物・無在は「無関係」という属性を持たないものであるから、純正実在はそれらとは大きく異なると。

しかし、このような言い方は、我々が関係が満ちわたっている世界に住んでいるからこそできるだけのこと、その事情を離れて、言葉の定義のみで純正実在を求めれば、無物・無在との区別は不可能となる。

〔この部分、清沢の言い回しは微妙である。その理由を考える。〕

今、私は机の上の紙に万年筆でこの文章を書いている。このとき、「机がある」「紙がある」「万年筆がある」「私がある」ということは如何なることか。列挙したものの中には二種の因果「関係」論(自然法則的因果と人間学的因果)が含まれていると言えるが、ここではその別を特に考慮せず、「机がある」という例で「机の純正実在」を求めてみる。

純正実在は他物との関係と特殊性の剥奪によって顕れるべきものであるから、そのように考えてみる。

### 1 他物との関係の削除

- (1)「私」を削除。
- (2)「紙」を削除。
- (3)「万年筆」を削除。
- A.以上で「机」単体が残る。

### 2 「机」の特殊性の削除

- (1)材料及びその出自(櫟材を使っている。この櫟の由来は云々)の削除。
- (2)加工手段(ある家具業者に特注した云々)の削除。
- (3)所有者(私)の購入動機の削除。
- B.以上で「机」の特殊性が削除されて「机の一般性あるいは普遍性」が残る。既に眼に見え触れられる机ではなく「机の概念(アイデアに近い)」である。我々の心の中にのみあると言える。

### 3 時間・空間の特殊性の削除

- 「ある」ということは、特定の時間(あるとき)、特定の空間(あるところ)に「ある」ということだから、その特定の時間・空間を削除する。
- C.そうすると、どんな時にも無く、どんな場所にも無く、ただ概念としてのみの「机」が「ある」ことになる。これが純正実在と云うるか。

そして、この「机の純正実在」にそれまで削除してきた特殊性、関係性を付加していけば、「今、現にある机」が出来上がるというわけである。

しかし、そもそもこの論法は正しいと言えるのか。(我々は日常この操作を行っているが。)「机の純正実在」の導出はあくまでこの「私」が行ったものである。すなわち1で削除されてしまったものが作り出したのである。つまり、「無から有を作った」と言ってもよい。矛盾であり

その正否を判定できない。その意味で根拠とするわけにはいかず、妄想との区別もつかない。

清沢が「幾分ノ意義ヲ有スルカ如シ」と少し持って回った言い方をするのは、この判定不能の限界を意識しているからであろう。そしてその限界に注意し、純正実在を求める手続を厳格に適用していけば、それは無物・無在と判別できないところに必ず行き着いてしまう。しかしまた人間はこの概念を持たなければ「机」について考えることも意思疎通することもできない。そして、この矛盾の解消を次段以降で行っている。]

## [21] 純正実在を分相応の位置に収める

更に別の説を立てる者がいる。

純正実在は「実在」の範疇の概念であるから、それとは異質の無物・無在と一緒に扱うべきではない。純正実在と共に扱うべきは経鍊〔経験〕実在である。この二つは共に実在であるが、関係を保存するものを経鍊的とし関係を除いたものを純正とするにすぎない。

つまり、実在と無在との判別は既に終わらせ、その確定した実在の範疇の中で、純正と経鍊との論理上の判別を設け、思想の順序を示したものにすぎない。この意図を考えないで、無物・無在などの不当な概念を出して純正実在を責めるのは筋が違う、と。

この意見は誠に純正実在の意味の正解を指摘したものと言えるか。

前段で排撃した目的は、純正実在が独立自存するかのような主張を反駁することにあつた。これが純正実在は思想上の便宜的な判別のために設けたもので、現実のものと混同するものではないということであれば排撃する必要はなく、かえって賛同するものである。

今、この賛同の意味を例を挙げて説明する。

物体が空間中で運動する場合を考える。このとき物体は必ず一定の速力〔以下、原文では「速度」と言っているものを「速力」と訳す。〕・方向を有する。

我々はこの運動を理解しようとする場合、内容によって運動の中心点に着目したり、方向に着目したり、速力に着目したりする。そしてそれらの着目点について別々に思考することは、正しく抽象化していることで、少しも間違いではない。またこれらの抽象化された概念を元に、更に一層の抽象化を行うことも間違いではない。

しかし、これらの抽象によって得られた概念がそのまま実体に応用されるべきものではない。

方向も無く速力も無い運動は実在ではない。

速力、運動を離れた方向は実在ではない。

運動、方向を離れた速力は実在ではない。

そして、通常の説話で運動、方向、速力等を個別に挙げるのは、他を略してその点に注意を集中するためである。

実の運動には常に一定の方向と速力が伴い、

実の速力には常に一定の方向と運動が伴い、

実の方向には常に一定の速力と運動が伴う。

純正実在もまたこれらと同様の抽象概念にして、現実としては個別特殊の実在にあるのみで、これらと離れているものではない。

## [22] 独立自存の論破

純正実在は思想上の抽象で、現実に存在するものとは諸般の関係の中に於いてある、ということの大略証明した。

ここで「純正実在の独立自存が初めにある」という考えに未だに執着している者がいるかもしれないので、その不毛を証明しよう。

まず、「純正実在の独立自存」を仮定する。

そして、この純正実在が如何にして諸般の関係と結合して経鍊実在を生ずるに至るか、を考える。

経鍊実在は、個別特殊の関係を有するものである。

ある経鍊実在 A は  $\alpha$  という関係を有し、別の経鍊実在 B は  $\beta$  という関係を有す、と表せる。これは換言すれば、

経鍊実在 A は純正実在と  $\alpha$  の関係で結合し、

経鍊実在 B は純正実在と  $\beta$  の関係で結合する、と言える。

とすれば、純正実在は、ある時は  $\alpha$  の関係と結合し、ある時は  $\beta$  の関係と結合するものである。

そして、 $\alpha$ 、 $\beta$  等の個別の関係を結合するには、必ずそれぞれの特殊な理由がなければならない。しかし、純正実在は定義により、これらの特別な理由を有するものではない。特別な理由を有するものは既に経鍊実在であるからである。

以上をまとめると次のようになる。

1 純正実在が独立自存であるとする、それは恒久に独立自存するのみで、経鍊実在になることは決して無い。

2 経鍊実在として有るものは、他の経鍊実在からしか生起しない。

そうなると、「独立自存する純正実在」というものは、宇宙万化の説明に全く役に立たないものと言わざるをえない。

万化の説明に役に立たないものは哲学が必要とするものではない。

以上から「事物の実在」の意味が明らかになった。

・事物の実在とはそれぞれの個別の関係において成り立つものである。

我々はこの実在を思考する場合、論理上の分解を行わなければならないので〔そうしないと思考できない〕、実在を諸般の関係と純正実在に分けるのである。

そして、この操作は思考の便宜のためでありそれ以上の意味は無い、と断言する。

## 第二節 事物の性質

### [23] 事物と関係の究明順序

前節で、事物の实在とは諸般の関係というものを確定するところにある、ということを見事に示した。ここで我々は更に進んで

- 1 関係とはどのようなものであるか。
- 2 この関係の属すべき事物とは何であるか。

〔事物とは何であるかをここで問題にすると、第一節の反復に陥りかねないのだが、一、二節での事物の扱いは次のように視点が異なるというべきだろう。〕

第一節：純正实在の誤謬を抉り出したものといえる。

第二節：あくまで関係と事物の相関の視点から事物を改めて考える。〕

を究明しなければならない。

この二つの問題はとても分離できるものではないのだが、とりあえず順番としては2を初めに検討し次に1に当らうと思う。

ところで2についても

2-1 全ての事物について、その何であるかを究明する立場。

2-2 個々の事物について、その何であるかを究明する立場。

があるが、实在論は2-1を立場とする。そしてそれを問題にしていくと必然的に2-2に話題が及ぶことになる。

### [24] 「事物＝本体＋性質」というとらえ方について

2-1の研究を開始するに際しては、やはり感覚を依り所とせざるをえない。先に言及したように、我々は事物を知ろうとして、その行為を起こすとき、その手段は先ず感覚にしか依れないからである。

ところで「通常の見解」では事物と感覚は次のように捉えられる。

・我々は感覚によって諸々の事物のあることを知り、事物に諸般の性質があることを知る。

これに対する別の捉え方として

・事物の事物たる所以は知覚しうる性質のみにある。

というものがあるが、これは通常の見解の捉え方ではない。通常の見解はここまでは考えていない。

「甘い」「赤い」「重い」は、通常の見解では事物の性質で事物そのものではない、ということになる。

「甘い」「赤い」「重い」を除いて他に事物の本体などは無い、という考え方は通常の見解より高尚な思想が発見したものである。

〔この一文があるため、後の議論がどちらを向くのか曖昧な面がある。〕

したがって「事物は性質を有する」という言い方は、通常の見解でのものであり、その意味は「事物にはそれぞれに本体というべきものがあって、諸般の性質はその本体に付属するものである」ということである。

この見解は、性質と見られるものが状況によって変化することから正当なものに見なされるようになった。

例えば、或るものの性質としての色が青であるとき、この青が変化して赤になり、青黒くなり、更に種々の色になったりするものがあるからである。このとき、これらの色は変化する性質で、それらの変化を通して一定であるものを事物の本体とする、という考え方である。

本体は諸変化の中で不変のもので、かつ諸変化を結合してそれらの中心となるべきものである、

という。しかし、このような本体に関する分析は、本体の外容を示しただけで、まだ内容を示すに到っていない。

しかし、実在論が求める所となれば、それは事物の本体の内容の解明であり、その本体が変化する性質をどのようにして生じさせるかの説明でなければならない。

[通常の見解を認めた上で、それを実在論(存在論)に適用する場合の方針ということになるのか。]

## [25] 本体は性質と類似であること(ヘルバルト説)

感覚は我々が直接に実在の正確であることを知る唯一の方法である。感覚が我々に与えるものは事物の性質の知識に止まって、決して本体の知識ではないが、それによって我々は事物に本体があることを推測しうる。そして、推測するところの本体とは何かを考えると、感覚と類似の作用によって知り得るとし、本体は感覚において生ずるものと類似であるとする。こう考えるのは止むを得ざることである。

これがヘルバルト(Johan Fredrich Herbart 1776-1841)の説である。

思うに万物の本体は単一不動にして恒久不変であるとは、古来から学者が常に主張してきたことであるが、その主張に於いて本体の外容を記すに止まらず、内容にまで踏み込んで説明したことは無かった。内容については、その主張を受け取る者の想像に任せてしまっていたのである。

しかしヘルバルトはその内容を断定して充全単一の性質である、と言った。我々の感覚に依っては本体の内容を知るのは不可能だが、我々より一層優れた生霊[精神?]には直接に覚知できる、と主張したことは、哲学に益するところ少なからざるものがある。

しかしヘルバルトは、この充全単一の性質を人類の知識の外のものとした故に、我々は我々より優等な一種の生霊を想像し、その生霊が我々の感覚に類似し、かつ感覚を遥かに超える能力を有すると仮定し、その能力によって我々が色・形等の性質を知るように、充全単一の性質を直覚しうるだろうと推測した。そして当然ながら推測に止まらざるを得なかった。

以上を換言すれば、事物の本体・本性は形、色等と同類であろうと推測したところまでは行ったが、それが限界であったということである。

## [26] 本体についての通常の見解の固執

しかし、この説を次のように批難する者がある。

たとえ、単一であろうがなかろうが、可知だろうが不可知だろうが、性質と言う以上は必ずそれが従属する主体が無ければならない。

「甘い」「温い」「円い」「白い」は独立自存するものでは無いのだから。

[反論ではあるが、論破したはずの独立自存がまた出てくるのは議論の蒸し返しではないかという疑いが浮かぶ。しかし、前節での独立自存の論破は、経練実在と純正実在についてのものではなかった。ここではそれと別範疇の本体と性質についての問題であるから、改めて議論しているというべきか。]

甘いは蜜に、温いのは泉に、円いのは月に、白いは雪に属す。蜜、泉、月、雪という主体無くして、甘、温、円、白の性質があることは無い。とすれば、充全単一の性質もその属すべき主体が無ければならない。

これに答える。

この批難は一理あるように見えるが、ヘルバルトの説を論破するには至らない。

思うにヘルバルトが説を立てた動機は、事物の本体・本性というものの内容を説明しようとしたと

ころにある。若し、この説明が正解であるとするなら、もはや事物の体性を尽したことになる。

ところが、この説に対して「性質と言っているのだから、主体がなければならない」という批難を加えれば、我々はまたしてもその主体の内容の何であるかを究明しなければならなくなる。これでは事物の本体の上になお別の本体を求めることになってしまう。これに対して次のように言おう。

性質という言葉は通常の見解では、独立自存できないものに用いるが、ここでのヘルバルトの「充全単一の性質」は、既に独立自存すべき領域内に踏み込んで説いている。その特別な場合を指して「性質」という語を転用したにすぎない。

もし、この使用法を外れて「充全単一の性質」を通常の見解での言辞の用法でとらえ、遙遠な到達出来得ないものとして扱い〔生命の神秘とかいった言い草などか〕、主体がこれを採取するとき真の実物を生ずるに到る、などと考えることになる。

こうなると我々はその遙遠な性質がどのようにして主体に従属するようになるかを究明しなければならなくなる。しかし、これを究明することは万物創生の事業を説明しようとするもので、哲学が為しうるものではない。

以上、要するに「充全単一の性質が事物の本体・本性である」ということは、既に完成して現にある実物について説を立てるもので、万物創生の事業を説明しようとするものではない、ということである。

### [27] 「単一なる性質」の問題(ヘルバルト説の欠陥)

しかし、我々はヘルバルトの説を完全と認めるわけにはいかない。何故か？ それは他でもない「充全単一」という概念に問題があるからである。

我々の哲学の目的は、宇宙の万化を説明しようというものである。我々が事物の本体・本性を求めるのも、万有に変化があり、変化に規律があるからである。

つまり、万化に亘って不動なるものを事物の本体・本性とし、個々の事変に転遷し無住なるものを事物の形様とする。よって、事物の本体を説明しうる者は、事物が形様を具有する理由を解説しなければならない。しかしこれは「単一なる性質」が出来ることではない。これを証明しよう。

先ず「複雑な事物」の変化を観察しよう。この変化については次の三つのパターンを考えるべきである。

- 1 a, b, c の元素の結合(a+b+c)は変化しない。これに  
d の元素が加わり(a+b+c+d)となる時 A となり  
e の元素が加わり(a+b+c+e)となる時 B となる。
- 2 a, b, c の元素の結合のパターンによって異なる場合  
(a+b+c)のとき C となり  
(c+a+b)のとき D となる。
- 3 a, b, c の元素それぞれの増減によって E ともなり F ともなる。

これらの場合で a, b, c の元素は常に本体となる。そして1, 2, 3のそれぞれの場合によって、複雑物に種々の形様が生ずることは容易に判る。

すなわち、複雑物の場合は、それらの変異の形様と諸形様を貫通する本体とを解説することは決して困難なことではない。

ところが、単一なる性質に到達してしまうと、我々はもはやこのような分解の方法を用いて変化を

説明することは不可能となる。

仮に単一なるものA´がB´に変化するとしよう。

それはA´が分解不可能[すなわち解説不可能]のままB´に変わるとしか言いようの無い事態である。すなわちA´、B´の間には全く共通の元素が無いのだから、古いA´が消滅して新しいB´が生起するとしか言いようが無い。

しかし、古いものが消滅して新しいものが生起するということは、それぞれ全く独立した働きで、互いに無関係である。何故なら古いA´が消滅した後に起る新しいものはB´である必然は無く、C´でもD´でもE´でも間違いであるとは言えないからである。

とすれば、新旧の二者は一本体の変化ではなく、二本体の出没がたまたま続いたものと言わざるをえなくなる。

すなわち、単一なる性質というものは万物の変化を説明するに用を為さず、かえって万物の変化を否定するものと言わざるをえない。

## [28] 「単一なる性質」の擁護

しかし、この結論に反論する者がいる。

前段で言うところは、単一なる性質が変化するということは、その変化の様々な形様それぞれを独立の本体と見做さざるをえない、ということであった。従って、様々な形様に共通する元素が欠乏しているということで、真正の変化でないことを示している。

しかし、これは未だ皮相の見解であることを免れない。

「単一なる性質A´が分解不可能のままB´に変わる」と言うのは誤りである。

感覚の実例で示そう。

或るものが純粋な赤色から別の純粋な黄色に変化する場合、我々はただ全く異なる二色を感じずるのみである。しかし、これを詳細に検討すれば、この二色の間に共通する元素があることを知る。「色」という事実がそれである。

思うに「色」という元素は赤と黄を離れて別にあるのではない。また赤より黄に移るものでもない。しかし、赤と黄との感覚中に感得しなければ「色」という抽象的思想は決して生じない。

単一なる性質の変化中に旧物が滅して新物が生じるとき、その滅・生の中に新旧二者に共通の本体が必ずあることは疑うべからざることである。我々がこれを思想すること不可能なのは、なお赤・黄の感覚の外に単に「色」の感覚を得ることが不可能なようなものである。

[この反論はヘルバルト説の残滓というべきか。]

## [29] 注意事項:変化には一定の規律がある

この説が間違いであることは容易に指摘できる。しかし、それをする前に注意しておくことがある。

この論者の挙げた例によれば、赤・黄の感覚の中に色という共通の一事がある。しかしこの共通の事情は、その範囲に区切りが無いわけではない。

換言すると、我々は赤・黄等の感覚中には共通する「色」という事情を得るが、赤と黄の感覚の間にはもはやこのような共通の事情を得ることができない。とすれば「色」という共通の事情は一定の区域内に往来するものと言わざるをえない。このことは感覚ばかりでなく、事物万般の変化に亘って言えることである。

すなわち、事物が変化する場合は必ず一定の範囲内で変化するわけで、際限無く、区切り無く変化することは無い。「事物の変化に一定の規律がある」ということはこの範囲と限界があることを指摘するものである。

これが、変化を論ずる場合の要点である。ここでは色の例に即してこの要点を述べた。

### [30] 「単一なる性質」の擁護の論破

さて、事物の変化と感覚の変化ははたして同類のものか？「色」が赤・黄に共通するということ为例証として、単一性質が変化に共通する元素であるという主張は、何が間違っているのか。

他でもない、赤・黄等の変化は精神作用の移動であって、その例で説明しようとした変化は実物中の変化である。

赤は常に赤、黄は常に黄であるが我々の精神は初めに赤に向い、次に黄に向った。これが論者の提出した変化である。

しかし、我々が説明を求めたものは〔精神作用の変化ではなく〕実物の A が B に移り、B より C に移るとした場合のことであり、A があるときは B、C はなく、B があるときは A、C あることなく、注目する時点では A、B、C、D 等のうちのただ一つが存在するような変化であった。この違いは同時貫通、異時貫通という言葉で表せる。

色の赤、黄等に通ずることは同一時にある。

本体の A、B 等に通ずることは時が前後に異ならなければありえないことを言う。

したがって、赤・黄等の感覚に貫通する「色」という元素がある、ということをもつて、実物の変化中の本体を例証しようとすることは明らかに的が外れているということである。

### [31] 本体とは規律のある変化である

単一なる性質の変化ということの説明は不可能であることを、おおむね明らかにした。

然れば「事物の本体」とは、どのように考えたら良いのだろうか。この解釈は、もはや読者の予想しうる所だろう。しかし、解釈に移る前に、一個の重要な問題を究明しておこう。

ヘルバルトは事物の本体を探求し、単一なる性質とし、単一なる性質にはそれぞれ自己保存の作用があつて、少しも変転することが無いとした。

換言すれば、事物の本体である元素は変化することは無く、ただ諸元素の結合のパターンによって万種の変化を現出するに到るといふ。

これが正にヘルバルトが科学界に声価を博した理由である。この説は理化学——すなわち現象世界のみを対象とし、その根底を探らない学問——にあつては、不都合は無いと言える。

しかし現象なるものはそもそもどのようにして生起するのか、を探求する哲学にあつては、大いに不都合である。ヘルバルト自身も自ら展開した心理学では別の説を示した。そしてその心理学の説くところは、正に先に我々が求めた所と一致して、自身の前説を排撃するに到った。

思うに、現象世界の変化極まりないことは、動かすべからざる事実である。そしてこのような変化については、事物の本体が変化しようがしまいが、既に現象があるのだから、その説明をしなければならない。

説明しようとするればその時、我々は精神（靈魂と言っても良い）の本体は、正に現象が由って生ずべき主体であることを知る。己の精神ではない他の事物の本体の自己保存の作用を知ることは、我々には不可能である。しかし、精神の自己保存作用は我々自らが実験するところで、少しも疑うべきものではない。

そして、その自己保存作用の最も単純なものが、個別の感覚である。その感覚は我々自身が熟知するように、種類は非常に多く、外来の万差の刺激に応じて一々その様を異にするといつてよい。エーテルの振動〔この時代であるからこのまま引く。〕という刺激は色感覚を生じ、空気の振動という刺激は音感覚を生じ、その他香気、温度、柔軟の感覚等全て精神の自己保存の作用に他ならない。

そしてこれらの異なつた自己保存作用は、精神の本体が不変だとしたら、生起しうるようなもので

はない。外来の刺激の性質と形状とに応じて、精神の性質と形状も異なる。かつそれは外来の衝動に対しての精神の反動といえるもののみから成っている。

したがって、精神の本体とは、一個の可變的實在と言うべきもので、異なる刺激に対して異なる性質を有すると言わざるをえない。これを形式化して説明すると次のようになる。

a の刺激には A の自己保存作用がある。b の刺激には B の自己保存作用がある。

とすれば、A、B 同時存在の時にあつては、精神の本体は A、B 何れとも異なる感動と性質を有する、と言わざるをえない。

そうであれば、万物の本体というものは我々が直<sup>じか</sup>に知覚することは不可能であるが、これまでの検討に基いて直覚しえたことから推測して次のように断言する。

万物の本体は精神と同じく変化するもので、ヘルバルトの説のような不変不動の元素ではない、と。

そうだとすると、万有の変化の中で常一不変なるものは何一つ無いのか？

そうではない。万物の本体は変化するが、その属性は一定で変異あることは無い。

すなわち、万物の本体から顕れるそれぞれの自己保存作用は、一定不動で変転は無い。これを形式化すると次のようになる。

a の刺激に対応する自己保存作用は常に必ず A で、B、C になることは決して無い。

b の刺激に対応する自己保存作用は常に必ず B で、A、C になることは決して無い。

故に万物は、あるいは此の属性を取り、あるいは彼の属性を取ってその本体は変化が絶えないものであるが、一定の刺激に対応して常に必ず一定の自己保存作用があり、その属性は決して変転することが無い、というものである。

### 第三節 実有及び実体

#### [32] 事物の本体はその変化の定規・定則にあり

変化の説明を求めて事物の本体を尋ね、単一不変の性質にそれがあるという説を取り上げて、これを考察したが誤りであることが明らかとなった。

よって我々は他の方向に転じて、事物の本体が何であるかを求めなければならなくなった。

通常的事物について何であるかを問えば、二種の応答がありうる。

- 1 人工の製作物 必ずその目的を持つから、目的がその事物の意味であるとすれば足りる。また目的を達するためにその事物が持つ様々な形様は省略可能である。
- 2 天然の事物 その目的を知ることは困難なものが多い。この場合、その事物が自ら或いは周囲の状況に応じて引き起こす現象の種類と順序を列挙して、事物の意味となす。

要するにこの二種の場合、その進達の性質と形状——天然の物は目的性が弱い強い、人工の物はその天然物を素材としての上に目的がある——によって、天然物の本体を顕す。〔この部分原文の文意がはっきりしないが、類推する。〕

これに反する説明法として次のようなものもある。

事物を構成する諸元素列挙して、その本体とする。そして諸元素の結合から起る事物の動作等は問題にしない。

しかし、この方法は複雑な事物を解約して単一な元素を求める場合は有効だが、もし単一なる事物、すなわち諸元素のひとつを説明しようとする場合は全く用をなさなくなる。

例えば「水銀とは何か」と問うたとき、我々はこれを解剖して他の元素に帰せしめることは不可能である。そうして、どう答えるかという、次のように水銀の動作についての説明となってしまふ。

通常温度では流動体であり、極低温では固体となり、高温では蒸気となるもの、と。

さてそうすると、事物の本体とは一種の言説不可能な一体で、ある事情ではAとなり、〔そこから〕他の事情ではBとなり、さらに〔そこから〕他の事情ではCとなるものであると言わざるをえない。

そしてこのような説明を下すときにこの三種の事情〔文脈の取り方で、この段落前半の事物の説明の仕方を指すとするか、A、B、Cの例示を指すとするか、どちらにも取りうるがここでは後者と解釈する。〕が逆に起る場合、CよりBとなりBよりAとなる。決してD、E、Fと展転して拡大変化していくことは無い、ということを用意している。

ということは、我々が事実の本体・本性として追求しているところのものは、その変化の定規・定則あることを指す、と言わなければならない。

そしてその変化は、自発的だろうと他の誘引で引き起こされるものだろうと、常に一定の範囲内にあるもので、決して漫然と無秩序に起るものではない。

#### [33] 事物の本体は論理的な概念にある

事物の本体はその変化の定規・定則にあり、と言うことであれば、我々はこれが知覚しうる物体ではなく論理的な概念にある、と言わざるをえない。

そうだとすれば、事物の何であるかを説明しようとするときは、単に現前の諸性質を審査するばかりでなく、現前の諸性質はどのような既往の性質から起り、また将来どのような性質を発<sup>おこ</sup>すかを考査する必要がある。

そして、このことについて、論理が止むを得ず前面に出てきたことではあるが、実際の場合にあつ

ては、事物の現前の性質だけでも考査し尽すことは、我々に為しうることではない。況やその前後の関係を尽すなど到底不可能である。

我々は目下の研究の行程において、常にこの立場を基本としつつ、さらに進んで事物の真の底を探り、その無限の相続の間において、百般の事情と千差の他物との終極の目的とに関係して、一事物の変化の形状と発生とを解明すべきことを知る。

#### [34] 純粹単一な実体への願望

事物の本体の完全な概念を得ることは実に困難である。しかし、もし一旦これを得ればその物の変化する百般の形状は全て本体の性質より生ずることを知るに到る。

しかしこれに尚、次のように異を唱える者がある。

たとえそのような完全な概念を得るに到っても、それは事物の本体を完全に想像し得たに過ぎない。未だその物の実体には達してはいない。

すなわち、我々は思想内において事物の本体はこれこれである、と知り尽し得たとしても、この思想を実物界中に位置付けることはできない。とすれば、このような観念は依拠すべき実体・実質ではない。よって我々は次のように結論する。

純粹単一な一種の実体がある。此処<sup>こゝ</sup>の物に限らず、彼処<sup>かしこ</sup>の物に関わらず、宇宙内の万物をして、全て同じく実有ならしめる本真の一体が必ず無ければならぬ、と。

[ここではじめて「実有」という語が説明なしで出てきている。おそらくこの講義では「実体」の定義がその概念を探りながら二転三転する哲学の歴史をトレースしている面があるため、そのような概念操作に辟易した者の期待を「実有」で表しているのだろう。]

#### [35] 純粹単一な実体の論破

このような単純実体の説は哲学史をひもとく者の常に遭遇するところで、同類の説は非常に多い。しかし今はそれらの一々を論評する暇は無い。ここでは、それらの全てが取るに足りないものであることを証明しよう。

思うにこの説は、日常の実験の事物の中に現れるものを取って、形而上・純正哲学上の問題に応用したものと云える。その的外れなことは論を待たない。

言うまでも無いことだが、我々が日常に具体的に接触する色々な「もの」は、我々の技術と製作意図に応じて、さまざまな姿・形を持つ、また天地の中で育つさまざまなものを見る。

このとき我々はしばしば、未だ形を成さない物質から定形の品物を生ずる、という風に思考するが、これはひとつの謬見というべきである。

この場合、その最初の原料といえる物質は比較的には未定形と言えなが、純粹な未定形のものではない。木材と机の例で考えてみよう。木材は机と比較すると定形を有する割合は少ないといえる。しかし、木材が全く未定形なのではない。

ここから分かるように、新しい物として形を得る物において、材料となるものは、その確定した性質として定形を有し、そのことによって周囲の事情に応じて働きうるのである。

あの古来からしばしば引用される蠟<sup>ろう</sup>の例のように[この詳細が不明。]その印象を持ちうるのは、その体が一種の固有の性質があるからである。

とすれば、事物の実体を自ら一定の性質無くして単に他の性質を受持すべき元体ととらえ、それに達しようと試みる者は、大いに惑える者と言わざるをえない。

なぜなら、実体が無性質なものとしてみよう。そのものはAという事情に影響される理由無く、またBという事情には影響を受けてCという事情には影響を受けないといった場合の理由も見出すことはできないことになる。

すなわち、無性質の実体は一定の状態  $\alpha$  を得るといことが不可能である。また  $\alpha$  の状態のみ

を得て、他の状態  $\beta$  を得ないという理由の説明も不可能である。

そうして、宇宙内の万有に一定の規律法則がある理由は、実体が彼の形状受けても此の形状を受けないというところにあるからである。〔原文最後の文意が曖昧なためこのように訳した。〕

### [36] 実体と性質の分離の無理なること

以上から事物の実体とは、その物別に一体ありとは言えなくなる。〔何故なら机の実体として机個別のものがあるとするれば、机が木材から作られたと言えなくなるからである。すなわち、木材には木材の実体があり、机はその木材の実体を引き継がなければならなくなるから、机固有の実体はありえないことになる。〕一体ありと言えなければ、「実体」なるものは我々の思想内にあるものと、実有界にあるものとを判別する徴<sup>しるし</sup>であり、諸般の性質というのは、我々が単に思想するというところに止まらず実<sup>じつ</sup>に存在するものである、という外にない。〔何故なら「性質」は「実体」を形容するものであるから、その「実体」が無く、しかし「性質」が認められるということになれば性質が実<sup>じつ</sup>に存在すると言わざるを得なくなるから。〕

しかし、このように認め判断することは我々の思想のみがよくなしうること、それ自体を一個の物体であるとするのは明らかに誤っている。

いわんや、諸般の性質については我々の思想から出たものだから、独立に存在しうものではないと見なし、思想上の認定を経て真に個別の実物なるを得る、と主張するに於いてをや。

そして、実体の説を立てる者は以上述べた問題点を考慮もせず、諸物というものを、実有ならしめる原理と、実体そのものという二つに鑑別しようとしているのである。

よって事物が形を変化させるのを見て、始まりの内容から変化後の内容に移ったという認識だけでなく、変移の前、変移の後の二つの形に亘って存続し、二形を外形と為し、二形が前後に相続する理由は、その性質より起こるべきであるという——実体がある、とするのである。

しかしこのような思考における実体は、全く純一未形の実体と言うべきものではなく、反対にそれと矛盾するものと言わざるを得ないのである。

〔この判断の根拠がはっきりとは述べられていないが、具体的な個物についてその物別の純粹単一の実体という言い方は矛盾した概念の混乱である、ということを念頭においているのだろう。〕

### [37] 「規律」の意味合いに注意のこと

以上から、我々は純粹実体の説はひとつの謬見であると言わざるを得ない。ここで、我々が以前に発した問題を考えてみよう。

- ・我々は「事物」なるものがある、と仮定してその事物である理由を研究しようとした。
- ・そして事物の事物である理由は、それが変化することであるとした。
- ・したがって我々の究明すべき問題は「事物の変化する根本はどのようなところにあるか」という問と同等となった。この問に一個の実体を立てることによって解答を出すことはできない。

要するに我々は、事物が変化することにより、それが実有であることを知る者なのである。よって「実有」とは事物を形容する言葉・思想であるだけで、それに体があるというものではないのである。我々がまさに研究すべきは、実有の形状—すなわち、事物の変化の規律を求めるところにある。

〔ここで問いを立てる〕

事物の実有なる形状——すなわち変化の規律を以って、事物が事物である理由だと言うのであれば、そもそもどうして我々はこのような規律を認め、それを実有であるとするに至ったのか。

およそ規律というものは一定の事情より、一定の結果を生ずるものを言うのではないか。しかし今

問題にしているような規律は、常に全般の事実について言っているわけで、それが行われる個々の場合・数多の事情の一々の価値は、今問題となっている規律の中にはない。たとえあったとしてもそれは「そうであるだろう」という考えのみであり、その事実が存在するのではない。

とすれば、どのように考えるとしても我々はこれを「実有の事物である」と認めることはできない。

[答える]

この疑義の内容は、我々が通常、思考するところの規律の性質である。しかし今問題にしている「事物そのものである規律」は、そのような意味のものではない。

この規律は「数多の場合を含蓄し、それらに通じる規則」というものではなく、「数多の個々の場合での規律に対応するあるもの」を指すのである。

[この捉え方は「縁起は法である」という言い方・立場とほとんど同等と思われる。]

すなわち、我々の要点は個々の規律に通じる規律ではなく、個々の規律に関するものにある。

これをもう少し詳しく説明する。

### [38] 変化を引き起こす根源

事物の実体というものが真にあるとすれば、あのロウのように一種の定性を具えなければならない。もし、何一つ定性ということが無く、ただ諸々の個物の性質を受納するだけだとすれば、それがなぜAの性質を受納しBの性質を排除するかの理由を説明できない。したがって宇宙内部の変化に整然とした秩序が存在することを説明できない。故にこのような実体は全く価値が無いものと言わざるをえない。とすれば、実体なるものは全く無いのか？

答える。

単独・孤立・未形・無住の実体は無い。しかし、宇宙のそもそものはじめから、確定しているものとして、個別の形・性質と一体となって離れない「実体」はある。

すなわちこれは我々が事物と認め、実であると受け入れたときに知られるものである。これは一物の変異する場合に、変化前の形と性質とを棄てて、変化後の形と性質とを取るとき、その変化の基盤となるもので、実に変化を引き起こす根源となるものである。

### [39] 実体を例証しようとする場合の概念の混乱

この立場から見るとき、単独孤立の実体という思想は、哲学界の中で古来の一大謬説であると見なさざるをえない。さらにこの謬説の誤りをはっきりさせるために一例を引く。

ある色素がある。これは無色(あるいは白)の元素と結合するときは一定の色を出す。器に入った水に若干量の紅粉を投ずると水が赤くなるような場合である。これが実体が諸性に付着して、これらを実有ならしめる例となしうか？

答える。否である。色素が水を染めるということは、外観に過ぎない。その内状を検査すれば、水分子は決して変色しておらず、また色素は元々の体を変化させて水分子に付着したものでない。水分子は依然として水分子でその色を有し、色素は依然として色素であり、その元々の体を失ってはいない。

しかし、この例で説明しようとする実体の説は、諸性と実体が相依って唯一体を成し、諸性はこれによってはじめて実有となるもので、例との意味合いが全く異なる。

換言すれば色素と水分子は二者並立共存の物体で、実体と諸性があたかも主伴の関係がある、というべきものとは異なる。

### [40] 理法を独立実存するものとしてはならない

事物の実体というものを一種の独立したものとする考えは、以上の数段の内容で、論破するに至った。転じて事物の真の状況を考察すると、事物が実有である所以は実体と称する一物があるため

ではない、ということを知る。

実有とは事物存在を我々が認知したときに、その形状を述べる言葉に過ぎない。すなわち事物が変化し満ちている世界において整然とした規律がある。それは首尾一貫して統紀を乱さざるもので、これを実有と名付ける。強いてこれを実体と名付けるとすれば「実体とは事物変化の理法である」と言わざるをえない。

しかし、一般に理法と称するものは、数多の事例についてそれらに一貫する規則を指す、というのが通常の意味である。そして「事物の実体は理法である」と言ってしまうと、またこの「理法」について通常の意味と同内容を想像してしまう。

しかし、理法というものは、必ず諸現象に一貫する規則を表さなければならないというものでもない。一つの個別例について理法と言っても間違いではない。「人は死ぬものである」という理法は人類全般に通じることであるが、また個別例で「私は死ぬものである」と言っても、人は死ぬものであるという理法の要点をいささかも損ずるものではない。

この例に限らず、通常説かれる一般に通じる理法は、先に個々の事例があつて後に生ずるものであり、個々の事例の前にあるものではない。また理法とは個々の事例において「真に」存するのみであり、その外に存するものではない。よって、今ここで事物の実体を理法と言うのは、個々特殊の理法を指すと考えてほしい。

換言すれば、真に存在するものは個々特殊の理法であり、一般に通じる理法は結局のところ我々の思想上のもの、すなわち実存しないものである。

ところが古来の大家にあつてもしばしばこの点を誤り、一般に通じる理法を独立実存するものと見なしたのみならず、個々特殊の事物は一般に通じる理法の摸像に過ぎないと言う者があつた。理想論[観念論? ]、実体論[唯物論?]の分かれ目はこの点にある。

読者はこの節の内容を追跡考究すれば、理想は実体を離れてはありえず、ひとえに実体の中にゆきわたり活動するものであることを知るであろう。

思うに我々は、実体が何であるかを推測・研究しようとするれば、事物の存在と運動を調べて、その適当で錯乱の混じらないところに、理法が行われていることを発見しないわけにはいかないのである。

## 第四節 変転二化

### [41] 万物動転の解明

凡百の事物の中で、統紀あって乱れざる理法が行きわたるものが、すなわち事物の実体であることが前節の結論であった。そして、理法が行きわたるとは、万物が動転する中において規律があることを言うのである。

とすれば、我々がここで議論すべきことは、この動転が何であるかを追求することである。変化・転化の二化はこの動転に名付けられた言葉である。通常、変化とは一物とその形相を変えて現れるものを言い、転化とは一物が消滅して他物となって現出することを言う。

### [42] 実体の継続と断絶

既に述べたように、変化とは一物とその形相を改変して現れるものを言う。そして通常の見解は一物の上に形相と体性を判別して、形相のみが変じて体性は変ぜずと思考する。しかし我々は前に変化を論じて、通常の見解が誤謬であることを指摘した。したがって事物の変化の中にあつては、実体は不断に継続するとは説き得ないことを知った。これについて更に一例を挙げる。

卵が変化して雛鳥となる例である。

卵が卵として実である間は、雛鳥は実存しない。既に雛鳥が実現したときは卵はもはや実在しない。つまり新体が実になるときは旧体は実であることを排除されて、両者は相容れないものである。

換言すれば、一実体が消滅して他の実体が出現するものである。この動きは純然たる転化と言わざるをえない。

因みに注意すると、転化は実事・実物界の特性であつて、思想界の特性ではない、ということが要点である。

思想界にあつては、一つの思念より他の思念を生ずるということを説いても、その両思念が共に成り立ち並存することが可能である。例えば「人類は社会を作る動物である」という思念から「故に人類は政治法律を必要とする」との思念を生ずる場合である。「社会を作る動物である」思念と「政治法律を必要とする」との二思念は共立・並存する。

しかし実物界の中では卵から雛鳥を生ずる場合は、卵と雛鳥が両立しないことは前述の通りである。

### [43] 転化とは実在と無在との一致である

さて、この転化とはその実ほどのようなものであろうか。その段階を分解しても、更に他の転化に帰せざるを得ない。強いてこれを解釈すれば「転化とは実在と無在との一致である」と言い得るが、そうすると、今度は「一致」とは何かを説明しなければならない。この場合の一致とは、二つの事が合わさるという意味ではなく、一事物から他事物へ転移するという意味である、と言わざるをえない。

つまり、転化の要点とは、解釈中にまた解釈を要求するということを包含しているところにあるのである。

思うに転化の何たるかを構想することは我々のないうることではない。我々は転化の実際を観察して、その深相を理解すべきのみ、である。

### [44] 均同の理法の適用の仕方を誤るべからず

しかし、この立場に次のように反論する者がいる。

事物が実存在するというのは、均同の理法(均同の理法とは論理学上の一大理法で、各事物はそれぞれの自性を維持して相違無いことを述べる)[同一律。(現代的に言えばアイデンティティーの保持ということになろう。R.H.Lotzeと清沢満之 pp.75)]に依るのである。いやしくも実存する事

物は少しも自性を改変することはない。したがって万物に転化があるとする考えは、誤謬である。

一応これにも弁駁しなければならぬ。

そもそも均同の理法は事物の変・不変に関するものではない。事物の不変であるときはもちろん、事物が変化するときにあっても、均同の理法は少しも破綻することはない。卵と雛鳥の例で言えば、卵は卵である間——すなわち卵の実存する間——は自性を保持して相違無い。雛鳥は雛鳥である間、すなわち実存する間は自性を保持して相違無い。

#### [45] 事物の変転は無秩序ではないこと

そうであるならば、事物の変転はその外形の変移のみでなくその体性にも徹頭するもので、不動凝然たる同一本体というものがあるが、それが変移するものではない、と言わなければならない。

そしてここに我々の注意すべき陥穽がある。

事物の変化において不動の骨髄が無いということになれば、その動転は無秩序に起伏して大混乱になってしまうのではないか、という疑念である。

しかし決してそういうことにはならない。以前にしばしば述べたように、宇宙内の全ての変化には整然たる秩序があり、画然たる区分領域がある。そしてこれが転化の詳しい説明を必要とする所以でもある。

#### [46] アリストテレスの「動転」解釈

アリストテレスは万物の動転を解釈して顕在(現存)〔現実態 *energeia*〕と隠在(伏存)〔潜勢態 *dynamis*〕の二者で表した。

すなわち、ある物が顕れるということは他物を生起すべき性能を具えているということであり、すなわちここに他物が隠在しているということになる。

例えば、Aの顕在はBの隠在にして、Cの顕在はDの隠在である。故にAはBに転ずるが、Dに転ずることはできない。CはDに転ずるがBに転ずることはできない。

これを逆に考えれば、Bの顕在はかつてAが顕在したことを証明し、Dの顕在はかつてCが顕在したことを証明する、ということになる。

これは転化に限界があるということの説明になっており、また、一物が存在するということは、その物に然るべき自由がある〔つまりBがあるということはAに束縛された結果だが、C、Dとは無関係である。すなわちBはC、Dからは自由である。〕ことの証明になっており、また同時に他物が現出するべき理由を表している。

これがアリストテレスが顕隠二在を説く理由である。しかしこの説は未だ完全ではない。思うに我々は次の二種の事柄を究明しなければ、この説を活用することができない。

1 各々の顕在にはどのような隠在が具わるのか。

2 諸般の隠在を顕在にするきっかけはどのようなものか。

この二件のうち1は二千百年後の今日でも釈然とした明解は得られていない。

2についてはアリストテレス自身が既に例を出している。

すなわち、木・石材が顕在しているとき、家屋は隠在である。人体が顕在しているとき、靈魂は隠在である。木石が具する隠在を顕在に転ずるきっかけは人による工作である。人体が具する隠在を顕在にするきっかけは人体そのものである。

ということは、隠在が顕在に転移することは、外部から来る刺激によることと、内部から起る啓発との二様あると知るべきである。

第一様は後段に回し、はじめに第二様を考究する。

#### [47] 隠在の顕在への転移(内起・啓発)

内起・啓発の好例は我々の思想にある。すなわち思想に理由が具われれば結果の行為に転ずる[どういう状況を指しているのかあいまい。「転行」が結果の行為なのか、思想の推移なのか不明のためこのように訳した。]しかし思想においても、理由はすぐに結果を生ずるには至らない。もし理由が直に結果を生ずるならば、真理は探究しなくとも自ずから明瞭だろう。

ということはすなわち、事物動転というものを思想論理の必然性だけで、推測断定すべきではない、ということになる。まさに「事物はなぜ特定の必然性に順応するか」の考察が必要になる。

思うに我々の思想上の必然性とは、事物の実体・実性から生じたもので、思想は事物によって起るのである。事物が思想によって起るのではない。結局、事物の転化とは事物の体性から起るものと認めざるをえない。そうであるなら、我々はこれについて明解を得ることができなくとも、事物の体性はその後体(=結果)を引き出す、と認めざるをえない。このように論を運べば、万有変化の説明も得られるに至る。

#### [48] 内起・啓発の動転は変化とも転化とも違う

事物の動転の中で内起・啓発に属するものは以上の如くであるとすれば、これは「変化」とも「転化」とも名付けることができない。

何故なら、変化は体性は継続するが、その実、前物が消却しなければ、後物は実在することを得ないというものだからである。

転化は前物が滅して後物が新しく出現することだが、その実、前物が全て滅して、後物が全く新しく出現するのではない。「前物の前物たる意味は後物を生ずるにある」ということを以って、二者の間に一条の継続を有するからである。

#### [49] 潜在の顕在への転移(外来の刺激)

内起・啓発の動転は以上のように説明した[といえるのか、「変化とも転化とも違う」という定義の仕方であらう]が、実存の諸物中に純然たる啓発はほとんど無い。たいていは外来の刺激によって動転するものである。以下、これを要点として事物相互が統制・影響する様子を観察する。

ある物Aが他物Bの刺激によって変化するとき、AはBがあるがために一定の変化を起す。C、D等がある場合はまた別な変化を呈する。

とすれば、AはBがある時は、ある状態を取り、またBが無い時や他の物がある時は別の状態を取ると言わざるを得ない。

換言すれば、BのためにAが変化するときAはBの存在を覚知しうると言える。

更に換言すれば、一物が他物の刺激によって動転するときは、一物は他物あることを認知するということになる。

とすれば、この認知はどうして可能か？ 次の様に言う他は無い。

「一物に自動的啓発の性があるからである。」

そうすると、一物が外来の刺激によって変化するとき、それは内起・啓発の時と同様の動転を行っていると思われるべきである。

#### [50] 転変化そのものが宇宙万化の説明である

以上、論じてきたところをまとめる。

事物の変化は、同一体性なるものがあって事物の諸相を貫通して継続するところにある、ということではできない。すなわち、一事物の前後の相異なる状態は、同一物の形相であると言ってはならない。

我々はむしろ、転化そのものが宇宙万化の説明に近いのである、と受け取り、その転化は無秩

序に起滅するのではなく、一定の限度内で整然とした秩序を追って動転することを忘れるべきでない。

また転化の二種については、  
内起啓発については、前体の顕在は後体の隠在を具すと言えるが、隠在がどのようにして顕在に至るかは、これは隠在の隠在たる性質に由ると言う外に知ることは不可能である。  
また外来の刺激による転化については、一物 A が他物 B の存在を覚知すると言えるが、どのようにして覚知するか、ということについては、ただ、そうでないことはありえないからである、と言うしかない。

## 第五節 物理的動作の性質

### [51] 原因と結果の省察

物体の動作は一般に原因によって結果を生ずる、ということにある。そして、いわゆる「原因」は常に数多の元素から成る。

ところが人の常識的な見方は、一結果の性質が決定されるのは原因の一元素が決定する、と独断し、他の諸元素は単なる受動的状態にあって、決定要因の一元素の衝動を受け取るに止まる、と見る。

例えば、水を熱して水蒸気とする時、蒸気になる原因は熱だけであるとし、水は熱を吸収するだけで、少しも自<sup>みず</sup>からは働かない、という考え方がこれである。

しかし、精密に事実を観察すれば「一元素のみが作用を起し、他元素は単に受動するだけ」と言ったとしても、自らの働きが無いものが「受動する」ということはできないのである。

思うに受動ということは、そうなるのに適した一定の性質があって始めて起きることである。前の例で言えば、水に一定の性質がある故に熱と共働して蒸気を生ずるのである。水の代わりに岩石を置き、これを熱しても決して蒸気は出ない。換言すれば、水は熱と共に蒸気発生の原因・事情である。

また他の例を挙げる。

中毒によって人が死んだ場合、死亡の原因は服毒である、と言ったとする。しかし、精密に論ずれば身体の状態と服毒とが相俟って死亡を招いたのである。死亡の原因・事情はこの二つを合わせてはじめて備わる。

要するに、一つの結果が生じるということには、必ず数多の原因・事情が相待ち、その後始めて結果が出るものと言わざるをえない。これが、理化学で多元素の相互作用を重視する理由である。ヘルバルトも形而上哲学の原理について、一動作が生ずるとき、それが必ず数多の原因に由っているということを説いている。正確な説と言うべきである。

しかし、以上の記述で動作の説明を尽したとは言えない。更に一步を進めて考察しよう。

弾薬の爆発〔原文では「暴発」となっているが、この言葉には人為的過失の意味が含まれている。しかし、例としての意味はあくまで物理的な動作の説明であり、人為的なものは含まれていないので、「爆発」とした。〕という現象を例に取る。

先ず、弾薬と熱体という二個の事物がある。

この二物が相互に接近することを「事情」という。

弾薬の性質である、圧縮されている膨張性と受熱を爆発の「理由」という。

よって、二個の事物(原因)と近接の関係(事情)と圧縮された膨張性と薬質の受熱(理由)との三者が具備して、始めて爆発という一結果を生じる。

換言すれば、一結果が生じるには先ず複数の原因が必ずある。その原因が一定の関係(事情)を得れば、それが理由となって結果を生じる。

そして、一結果の原因である複数のものの中には、結果に大きく影響を及ぼすものがある。或いは小さな影響しか及ぼさないものがある。或いは主原因が整う前にあるもの、主原因が整った後にあるものがある。(爆発の例で言えば、発火のきっかけとなる激因は複数の原因の中で最後に出てくるものである。)

このような具体例は一々の特殊個別の因果について考察すれば、非常に有益な成果を得られるだろうが、純正哲学の立場からすればみな同規・同類のものであるから、これ以上詳細を議論する必要は無い。

### [52] 事情:事物間の一定の関係

原因というものが複数あることを知ったが、複数の原因があるからといって自然に結果が生ずるものではない。必ず事情を待って結果に至るのである。事情とは一定の関係のことである。

すなわち複数の原因が相互に一定の関係を得るを以って結果は生ずることを得る。ヘルバルトはこれを「俱在」(複数の物が同一時間内に並んで存在する。)と言った。

しかし精密に言えば俱在は事物が空間中で合一することを指さなければならないはずである。すなわち接合である。

しかし、ヘルバルトの説は、ただ事物相互動作の外状を指摘したのみで、未だ内実を説明したものではない。何故なら我々は、複数の事物が同一の場所に集まっても、それらが互いに独立して少しも交互動作をしない場合もある、と考えることができるからである。

事物相互動作の実際は、事物の外状よりも重要で、哲学が最も考察すべきところである。事物相互作用の外状は仮に俱在にあるとしても、我々は俱在がどのようにして各事物の独立を破って相互作用に至らしめるかを探求すべきである。

### [53] 「動作は影響の転移である」説の検討

動作の要義を説明しようとした説は古来、非常に多い。ひとつの説は「動作は影響の転移にある」と言って、ある能動的物体から影響を発して、他の受動的物体に及ぼすところにあると言う。これは、かなり一般的に通じる説である。しかし、この説が完全でないことは容易に分る。

先ずここで言う「影響」を考えてみよう。

仮にこの「影響」を一つの実物 C としてみよう。この実物 C が一物体 A から発生し、分離し、他の物体 B に到達し付着するという理由を問わなければならない。これらの理由はとりまなおさず物物的な動作について、我々が現に説明を求めているところのものである。しかしそうすると、一動作〔影響〕を説明しようとして既に二動作〔A からの発生・分離、B への到達・付着〕を仮定してしまっていることになる。

更に実例を検討する。〔以下原文の意味を取って改作する。水分による性質の変化に合わせると高野豆腐くらいしか実例が思い浮かばなかった。〕

湿った高野豆腐 A と乾いた高野豆腐 B がある。A と B が接していると A から B に水量 C が転移して B を湿らせる。ここで水量 C の転移は A、B に変化をもたらしたか、そうでないか？無変化と言ってしまえばここで議論していること自体が無用である。よって変化をもたらした。

そうすると A は水量 C が去ったためにどれだけの変化を受け、B は水量 C が加わったためにどれだけの変化が生じたか。湿った高野豆腐は膨張し弾力性に富み、乾いた高野豆腐は縮小し脆いものになることから考えよ。

これは水分子が B の分子間に浸入し A の分子間から退去することによって起ることである。そして A では水分子が去るわけだが、なぜ A の分子を近接(縮小)させ変性(脆弱性)させるのか。B では水分子が到達するわけだが、なぜ B の分子を隔離(膨張)させ変性(弾力性)させるのか。

これは水分子が A にも一種の影響を与え、B にも別の一種の影響を与えることによる、と言わざるをえない。

そうすると、一物体 A の他物体 B に及ぼす影響 C (水分子)を説明しようとして、かえって二種の影響〔A への影響と B への影響〕を必要としてしまう、ということになる。もしこの二種の影響を解明しようとするれば、さらに多数の影響を見出すことになろう。これでは全く説明とならないのである。

我々は転移する影響を一実物(=水)と仮定した。しかしこれを実物ではない一種の霊体と仮定しても、上記と同様の説明の困難を招くことは推して知るべし。

### [54] 「影響」を別の語に置き換えても無理があること

あるいは次のように言う者があるだろう。

「影響」は実物でも霊体でもない。一個の勢力、動作、相状である、と。

このように言えば、その転移の後に「影響」が到達した物体を変化させるかの問題を避けることができるだろう。〔つまり「影響」が実体ではなく、変化した物そのものの形容あるいは作用となるから。〕しかし「勢力」は物体に属する勢力であるし、「動作」は物体の動作であるし、「相状」は物体の相状である。すなわち、物体を離れて勢力、動作、相状があるわけではない。勢力、動作、相状は常に必ず物体に付属する。それなのに一物体を離れ去って他物体に到着すると言う。これではとても納得できる説ではない。これに加えて勢力、相状等の転移の説には難点が甚だ多い。例えば次の通り。

CがAから分離しうるとしても、それがどのようにしてBに向かうのか。これはCが離れ去るときにAがCに及ぼす影響であるとすれば、我々はA、B間の影響の転移を説明しようとしてA、C間の影響の転移を仮設してしまっていることになる。

またCはAを離れた後はB、D、E等の何れにも向かいうるだろう。然るにあるときはBに向い別の時にはDに向かうのは何故か。この間に答えようとするれば、我々は次のように言わざるをえない。Aの影響CをBに及ぼそうとする時には、既にBがAに影響しているものがある。故にCはD、E等に向わないでBに向うのである、と。

したがって、一動作を説明しようとして、その動作の前に動作を必要とする論法になってしまう。かつまたCがAを離れた後、Bに着するのはどうしてか。なぜ無限に運行し去らないのか。Bがその影響をCに及ぼして、その無限に去ろうとする運行を阻止していることによる、と言わざるをえない。阻止しているとすると、これをBの勢力、相状と言わなければならないになってしまう。〔つまり「勢力」の説明に「勢力」を出さざるをえない。〕更にその説明が必要となってしまう。

#### [55] 因果均同の説

影響転移の説の難点はこのようなものである。しかし古来、この説から起る論旨は数多の謬説を生じさせた。彼の因果均同の説と言われるものは、その最も有名なものである。これは次のような説である。

〔以下前段の記号の意味付けをそのまま引き継ぐ。〕

CがAを離れてBに付着するとき、AがCを保有したと同様にBはCを受け入れざるをえない。ということはA、Bともに均同の性質がなければならない、というものである。

しかし我々は先に論じたように、一つの結果を生ずるには、多数の原因がその特性に応じて相当の影響を及ぼすものであることを知っている。同一の打撃を受けても、変形するもの、分裂するもの、熱を発生させるもの、爆発するもの等、さまざまである。これでどうして因果は常に均同であると言えるだろうか。

要するに事物が動作する場合、各事物(自動あるいは受動)の性質とそれら相互の関係が相依って「理由」を形作っていくと言わざるをえない。しかし、理由が形成されれば結果は明瞭である、とは言うことができない。これは我々の思想が希望するところではあるが、実際の結果については事実で判断するしかない。何故なら、宇宙の万化は普遍的な有規聯絡に属するか、造物主の意匠(意匠)に属するかを決定できないからである。

したがって我々は分解的に事物の変化を説明し尽すことはできない。〔つまり説明は仮定を立てて行わなければならないが、その仮定を立てる方向(普遍法則か意匠か)を決定できない。ということか。因みに現代科学では、表に出ては来ないが暗黙のうちに意匠を認める姿勢があると思われる。〕そしてまた我々は、事物の変化が起るのを総合的に観察せざるをえない立場に置かれているからである。〔つまり変化を変化と認めるということは、総合的な判断能力であるということか。〕

ただ我々は探求の方針(=化設)として万有の変化に有規聯絡があることを表明した。その方針

にしたがって理性的に研究を進めるのが、我々に可能な唯一の道である。すなわち、事物の動作の説明に当っては、各事物の性質とそれらの関係は論式の前提であり、動作の結果は論式の断定とならなければならない。

しかし、論式というものには常に大小の前提があり、大前提は普遍の規則を表す。そして一つの大前提の基礎は他の大前提に依り、その大前提はなおその上の大前提を要す。最も根本といえる大前提に至れば、それは論式の外に出て、そこに根本を求めることになる。〔それは論式での判定は不能の領域である。〕

よって論式を適用する場合、実際の観察と事実の確認は不可欠の要件である。〔これが論式の上誤を判断する唯一の手段であるから。〕これが理科学が実証を重んずる所以である。

以上の理由により、単に論理的必然を拡張して事物の動作の説明に因果の均同を説くようなことは、当を得たものではない。

考えてみよ。AとAを合すれば、論理上は二つのAを生ずるだけである。そしてその二つのAが相互に動作するか否かは、それだけでは分からない。相互動作は無いと推測するのが妥当だろうが〔この論旨はよく分からない。〕しかし因果均同説は相互動作があるという反対の見解を出してしまう。

要するに二つの事物に同性があるということは、その相互動作があるということを知る事が可能なのだが〔そしてこれが均同説の出る所以。〕、二つの事物に同性があるから相互動作があるとは断定できないのである。

事物というものが、AがBに動作するとき同時にBはAに動作しているものである以上は、二者共に本体(サブスタンス)となるべき点においては均同である。因果均同の説とはこのような解釈に帰せざるをえない。〔すなわち均同の意味が、動作の因果(主従)関係を含むのではなく、二つの事柄が本体になりうるという関係性を表す。〕

とすれば、均同説発生の動機となったような、単一概念に還元して説明を完成させようという傾向には注意を要する。〔原文脈からここまで書くのは無理があるが、あえてこう解釈しなければ繋がりが悪い。〕

現在の科学で、宇宙間の諸現象を帰一して空間中の運動であると見るが如きは、その一つである。光・熱・電気等、その観察される相は異なるが、皆、運動に外ならないと見なすは、動作の因果を均同であるとする説に基くものである。しかし最近の科学界の見解は変わりつつあるため、この説はそのまま認めうるものではなくなっている。どう訂正すべきか。この間に答えることは本論の役目ではない。しかし万性が羅列し異質なる物が躍動している宇宙を説明するために、孤寥寂然とした一運動に帰着させようということは、我々のすべきことではなかろう。

また、因果均同説から起った重大な謬説に「同類は互いに認知する」というものがある。特に身心の関係を議論するとき、この説が顔を出す。この説の詳細もここで論じるわけにはいかない。しかし極端に走った誤りの一例を挙げると、我々の眼の器官は太陽と同じ性質を持つから、太陽光線を知覚しうるのである、というものである。これは誤想の甚しいものと言わなければならない。

## [56] 機会論

我々は事物動作の説明を求め来て、ようやく正しい道に進み入ることになった。更に進もう。影響転移説の誤謬は指摘した。この通説と異なって動作の説明を企てたのが、機会論〔偶因論 Occasionism (R.H.Lotzeと清沢満之 79)〕である。この説は次のような内容である。

A、B二体間の関係は両者の変化の機会である。この機会を得てAがA'と変化しBがB'と変化するに当ってAとBは各々独立に変転して、相互間の動作は少しも無い。

この説は理科学において、万化の前後順序を観察してその次第を記述しようとする者には、役に立つ理論であるが、哲学上は価値の無いものである。

なぜなら、AがA'と変化しBがB'と変化することは、各々独立に開発するものだから、機会Cは無用のものとなる。もし機会に用<sup>はたらき</sup>があるとすれば、CはAに動作し、またBに動作するものであるとせざるをえない。となると、機会の用を説くために動作を仮定することになる。これではそもそも動作の説明のために論を立てたことに矛盾する。

これに対して、我々が説明するべきは機会に限ってであり、機会の用<sup>はたらき</sup>があるのは規律があることによる、と言う者がいる。

しかし規律は決して現実のものではない。現実のものとは事物動作が現実であることによるのである。規律から現実を生成しようとするのは本末転倒と言うべきである。規律というものは現実の動作を待って確認されるものなのだから。

## [57] ライプニッツの予定調和説

機会論に類似のものにライプニッツの予定調和説がある。これは次の内容である。宇宙の万物は無数の原子より成る。原子は各々独立に存在し離れて相互に動作する。ただし予定調和によって各々自然に開発する。それは何故かという、宇宙の始まりの前に造物主が様々な宇宙の構想を練り、その最善のものを選択して現実たらしめたからである。

この説によれば、宇宙の万化は宇宙の始まりより宇宙の終りに至るまで、一つとして予定されていないものは無い。一滴の雨も一塵が舞うことも皆悉く予定されていて、予定外の現象は無い。これによって「風が船舶を進める」と言わずして「船舶の進行が風を生ずるのである」という言い方もできてしまう。

しかし事実がもしこのようなものであるなら、宇宙は意義無き、価値無き事変の継起に他ならない。意義無き価値無き事変の継起は、それが想像に属そうが、現実に属そうが、損も益も無いものである。よってこれを現実たらしめた造物主の愚かさはまさに笑うべきものがある。どうしてこれが造物主の真面目でありえようか。ましてやライプニッツは宇宙の進化を説き、天楽教[ユートピア構想か。]を主張しているのである。そのようなことは、この説からは導き出せないだろう。

実に予定調和説は定道論に異ならないのである。そして定道論は科学がしばしばその見解に傾くものであるが、科学者は実験・観察を重んじるため、そこから偏向を修正し宇宙間の事実について現実の価値を採取する者である。

しかし、定道論を避けて現実を価値あるものと見なすことは、結局のところ理論的必然に依らずして、むしろ実際的感情から起きることである。

よって我々はライプニッツの説について、それが価値あるものならば、理論的証明の論拠を追求すべきである。

ライプニッツ説での原子は個々独立して自然に開発するものである。とすると、我々が相互動作と認知するものは、どのように解釈するべきか。ライプニッツは二個の時計の喩で説明する。

二個の時計は、それぞれの機構を動かせば独立して運転するが、両者は同じように時刻を知らせる。二個が同様に働くのは、技師が稼働の準備をして開始させたばかりでなく、各時計の機関があることによる、と。しかし、これが時計と原子の異なるところ[したがって喩とならないところ。]である。なぜなら、各時計の機関は別々であるが、それぞれの機関は共に同一の物質から成り、同一の原理で運転するものであるから。すなわち二個の時計は相互動作はしないが、それぞれの機関の諸部分は同期して(すなわち相互に)動作するからである。

しかし、ライプニッツは次のように言うのである。このような動作も実は予定によって自然に起きるものである、と。そうだとすると、ライプニッツの喩は全く自説の解説となっていないと言わざるをえない。

しかし更に進んで検討すべきものがライプニッツ説にはある。万化の有規聯絡についてである。ライプニッツ説では現実の宇宙を最善最美のものとする故に、有規聯絡は善美の一性質とすべきものとなる。しかしこれだけでは、有規が無規に勝る理由を知ることはできない。かつ、ライプニッツは万様の変化について、すべて予定されており、また同一の変化は二度と起らない、とした。故に普遍の理法はライプニッツ説とは相容れないように見受けられる。

はたしてライプニッツ説に有規聯絡を組み込み得れば、宇宙の完全なる理由の説明となりうるのか、それができなければ、予定調和の説を棄てて、事物の現実の動作を取らざるをえない。

#### [58] 有規聯絡の説明

ライプニッツ説は有規聯絡をどのように扱うかを明言していない、と言わざるをえない。ここで我々はかつて論じた通常の見解における論法で有規聯絡を説明してみよう。

AがA'に転化する場合、同時にBがB'に転化する必要があるとする。そのときこの「必要」(他の諸物全体の現状に帰着する[ここでの「必要」の意味が曖昧であるがAがA'へBがB'への転化が可能性の話としてではなく、宇宙事象一切から見た必然の話として扱っているのか。そうでないと「他の諸物全体の現状に帰着する」という言葉は出てこない。よってここではその意味に取る。])と「AがA'に転ずる」の二件は、Bに動作を及ぼす、と言うべきものとなる。

そしてBがB'に転じてC'、D'、E'等に転じないのはA、B、C、D等の諸物体が相依って一聯の関係を有するによるからである、と言わなければならない。そうであれば、A'が生ずるときには必ずB'が生じ、他の事情は生じないという結果を見る。

これが、宇宙に漸次の転化があり、動的に変化する因果があり、したがって有規聯絡があるという意味である。

## 第六節 万物一体

### [59] 万物は一実体の諸部分である

前節の結論から、我々は事物の動作を説明するのに、万象が独立して自己開発する徹底した定道論か、影響転移で事物に自発的作用があるとする説のどちらかを採用しなければならないことが分った。

そして我々は先に言ったように、感情的には定道論を採ることはできない。よってこれから影響転移説について更に詳細な推論を行って、説明を満足させようと思う。

我々は前数節の論で、事物が多数であることを常に暗黙の了解事項としておいた。したがって数多の離散して独立に存在する物体が、どうして相互の関係を有するに至るかを明らかにしようと、多くの難問に遭遇した。

今や、この暗黙の了解事項を撤去して、万物一体の説を採り、これについて考察すべき段階に来了。

思うに百般の事物に相互作用があるとすれば、万物は一実体の部分でなければならない。とすれば、我々の説は多元論を捨てて一元論に帰せざるをえない。とすれば影響転移は変じて一体啓発とならなければならない。〔啓発については第四節での議論を参照。〕

そもそも影響転移説の難点は、事物の変化においてAがなぜBに影響を及ぼすのかというところにある。ここで、万物は一実体の諸部分であると仮定すれば、一物の変動は他物に影響しないということはありえないので、それが何故なのかを問わなければならない。例で考えてみよう。

ここに一個の膨らませた風船があるとす。

その一部を押せば他部が必ず隆起する。これは風船内の空気の一部に独立の性質があつて、ひとりでに凹み、他部にまた独立の性質があつてひとりでに隆起するというものではない。

風船内の空気は皆相依って一団を成す。もし一団を成さず、隔たった場所に散在するようなものであれば、一方の変化のために他方の変化を生ずるようなことは決して無い。

万物一体の場合常にそれ自体を保持するから、一物の変動は必ず他物に影響を及ぼさざるをえない。これらを更に詳しく検討する。

風船中の空気の一部が圧搾を受けたために他に生ずる隆起は、一箇所であつたり、数箇所であつたり、また圧搾部分を除く全体であつたりする。万物一体おける変化の様子も、このことから類推せよ。これを図式で表す。

#### 1 天=A + B + 余

「天」は万物一体、A、Bは二個の物体、「余」は万物からA、Bを除いたものを表す。

+は諸物間に存在する関係、=は同一を表す。

よってこの式は、A、B等の万物はその相状は個別に独立しているように見えるが、実は万物と一体であるということを表す。

#### 2 天=A' + B' + 余

Aが変化してA'となるときBが変化してB'とならなければ、万物一体を保持できない。故に天の内容はこのように変わる。

#### 3 天=A + B + 遺 + 残

A、Bではない物が増えれば、必ず他物の変化がある。すなわち2で「余」とした部分が、増えた部分「遺」とその他の「残」に分れる。

#### 4 天=A + B' + 補

Aは不変でBだけがB'に変化すれば「余」の中の一物に必ず変化がある。したがって「余」は変化して「補」となる。

例では二物相互の動作によって変化を説明したが、二物に限らず三物、四物乃至無数の諸物間の動作によって変化があるとすれば、上記のような形式化表現は無数にありうる。

以上から、万物の変化は一体の諸部分が相互関係を有する中に起る、ということになる。そして一物の変動は常に他物の変動と相応して、一物と他物は相互動作する観を呈する。しかし、万差の諸物は常に相依って一体を保存し、一体の原性に順じて彼此の変化を生ずるに至る。

#### [60] 万物一体:有限と無限の合一

我々は万物一体の説を述べた。

しかし、万なるものがどうして一であるのか、一なるものがどうして万であるのか。この間については古来から議論が甚だしくあった。また一なるものはどうしても一である、万なるものはどうしても万である。もし万と一とが均しいと言ってしまうと、論理の規則は乱れ破壊されるだろうという反論が当然起る。そしてこの反論は至極当然と言えよう。

既に哲学の歴史の中で、これらの問題を解決するために「背反の論法」を宣揚する者があった。しかしこの点に関して、我々の思想では明解にできない部分がある。

それは、以前に転化の解を求めたとき、実在と無在との結合である、と言ったものと同様の論法である。実在なるものは無在に非ず、無在なるものは実在に非ず、どれだけ考えても「同一の物事に実在と無在を兼具する」とは、我々の思考にとっては堪えられないことである。しかし、実在と無在との合一がなければ、転化はありえなかった。

これを解決するために時間の思想を導入して、前の瞬間には実在で後の瞬間には無在となり、前の瞬間に無在のものが後の瞬間には実在になる、これが転化であると言う者があるが、この説も難点を克服したとは言えない。

我々は一物について実在がどのようにして無在になり、また無在がどのようにして実在となるかを尋ねているのである。時の前後は我々にとっては取るに足りない話である。実在と無在の転換の瞬間においての明解を我々は求めているのだ。[アビダルマの時間論などはこの文で一蹴か。]

この難点は解釈し得なかった。そして我々は矛盾を承知の上で、「実在と無在との合一」と表して思考しえぬものを置くことにした。

そして、今また同様の状況である。万と一とは到底合一しない。強いて解釈すれば、一とは無限の上における言い方であり、万は有限の上における言い方である。

有限と無限を合し「万物一体」と命名する、ということである。

#### [61] 関係:事物の相互動作

隔離し独立である諸物を論じて一体であると決定したのであるが、さらにもう一つ考察・決定しなければならぬ問題がある。

事物の関係とは何であるか、ということである。

我々はこれまで「事物の実在は相互の関係にある」と言ってきたが、その関係がどのようなものであるかを未だ考察していない。

事物というものを各々独立の別体であるとすれば「関係」とは事物と事物との中間に存在して両者の連絡をするものとなる。そうであれば「関係」は実体が在ることになるのか。もし実体があると

すれば、事物の実体と同時に存在するのか。そうではなく、はじめに事物があつて、その後「関係」が出現してくるのか。また既に「関係」が存在するとき「関係」そのものと事物とはどのような「関係」を持つのか。これらの諸問題の研究を避けることはできない。

しかし今、万物を一体に帰し、一体の諸部分をもって万物とした。ここに於いて「関係」に実体があれば、必ず事物と同時に存在すべきことを知る。なぜなら、一体があるのに、その後生ずるとすれば一体の内に入る理屈はなく、また一体の外にあるものは一体を破るからである。

そして事物と同時に存在し、一体の外に無しということになれば、関係は事物と事物との間にあるということではできなくなる。よって、各事物の内部にある、と言わざるをえなくなる。

各事物の内部にあつて、かつ事物と事物との関係である、とはそもそも何を言っているのか。それは、事物の相互動作である。

すなわち、事物の実在は万物一体の事物と事物が相互動作するところにある、と我々は断定するものである。

## 終結

### [62] 「動作」は表現不能である

我々は事物の实在を尋ねて、それが事物相互の関係にあることを明らかにした。更に進んで、関係は事物相互の動作の外には求め得ないことを明らかにした。かつ事物相互の動作は万物が一体であることから起るものであり、動作が表現不能なことは万物一体の根本の性質に由来するものであることを解説した。[「異様」の解釈をどうするかで、この部分の意味が全く変わるが「一体ノ原性ヨリ起ルモノ」とあるので「一体ノ原性」を有限と無限の合一であると解し「異様」は言説表現不能の意味とした。]

### [63] 「思想の必然」を制御すること

次のように問を發す人がいるかもしれない。

事物の諸般の動作は万物一体の根本の性質より起るとすれば、既に根本の性質がある以上は、動作の前後が繋がり、因果が行じられるのは当然のことであろう。しかし、根本の性質はそもそもどうして有るのか、動作の起るべきそもそもの始りは、どう了解すべきか。

この問題は既にアリストテレス以来の疑問にして、哲学が大きな労力を浪費してきたところである。この問題に対するとき、我々はしばしば実物世界の外に出て、事理を観察しようという欲求に囚われ、誤謬の罫に陥る。

運動の起源を求めて無動界に入ろうと欲望し、無動界なるものがあると軽々しく考え、そこから運動というものを開発し基礎付けようという考えなどはこの例である。

これは我々の日常の思考で、結果を観察してその因を求めるという方法を拡張するものに過ぎない。しかし、この論法を適用してよいのは実物世界に限られるわけで、無実の世界にまで適用しようというのは、この論法の限界をよく弁えていない者のすることである。

我々は実物世界の因果を順次に追求して、そのそもそもの始めに達することもあるかもしれない。しかしこれを成し得たとしても、我々がここで問題にしていることへの解釈には少しも役に立たない。何故なら、たとえそもそもの始まりという解答を見出したとしても、それは実物世界のことで、無実世界のことでないからである。既に実物世界であるからこそ、運動があるのである。決して無動の領域ではない。

宇宙は实在世界である。そして我々はこの世界の中にいるのである。この世界の中であって動作し思考している。しかし思考に虚実あるが故に、ついには虚の中に実を開発しようという行動を起こしてしまう。このようなことは為すべきだろうか。我々はこれについて数多の問題を提起することができる。

- 1 世界はなぜ存在するのか、存在しなくても良いのではないのか。
- 2 世界の現状はなぜこのようなものなのか、別のあり方はないのか。
- 3 世界にはなぜ運動変化があるのか、どうして寂靜不変ではないのか。
- 4 運動変化の法則はなぜこのようなものなのか、別の法則はないのか。

これらの疑問は哲学者が関与するところではない。哲学は実有の世界について実際の事実を観察して、その説明を与えるものである。哲学者は世界と事実とを創造すべき者ではない。これを研究する者である。故に哲学は純正实在を創造することは不可能である。経験以外の知識は哲学が認めるものではない。

实在世界の外に出て、仮想世界の事を論じようとするが如きは全く根拠の無いものである。あの「思想の必然」と称するものの如きには、最も注意してかからなければならない。思想の必然は現実世界の根本的性質から生ずるもの、根本的性質に具備するもので、現実世界の事物については間違いなくその必然がある。しかし、この思想の必然において現実でない世界に断定を下

そうとする者は、道理を弁えざる者と言わなければならない。理想の展開を以って現実世界の万物を創造するという如きは、でたらめの甚だしいものである。

#### [64] 万物一体の理解は両方向的同時進行である

思想の必然の法則を以って実在世界を形成しようとすることの誤りは前段に述べた。しかし我々は我が身をも省みなければならない。先に結論した万物一体の理を考察すると次の二式を得る。

$$1 \quad \text{天} = A + B + C$$

「天」を万物の規範とし、天あるが故に A、B、C が現出することを得るの意味である。一体が凝然としてその自性を保持して、不変であるが故に万物はその中で無数の転化・変化を生ずることを得るということを表す。

[これは、現に転化・変化が起きている現実から見て、あるものに転変化が起きるとき、万物一体の不変性を保持するためには、他のものがそれに応じて転変化せざるをえない。それによって万象の変化がありながら、万物一体の不変性が成り立つという意味であろう。]

$$2 \quad A + B + C = \text{天}$$

「天」を A、B、C の現状によって生成される結果と見るもので、天は万物を除いて独自に存在し独自に活動するものではなく、A、B、C の現実物を検証して始めて存在するものと認めうることを表す。

この二種の見解は相依って万物一体説を表すもので、分離するべきではないのだが、仮に別々に名付けると1は理想論、2は実体論と言えらるう。

理想論は一種の理想(=規範)に順じて万物が変化現象するというものである。しかし理想は虚影・抽象的なものを指すのでなく、必ず現実・具体的なものでなければならない。

換言すれば、理想なるものは現実の世界万物の規範なのだから、その規範に無実の世界も順じなければならない、という論法は通用しないということである。

理想は現実の事物の外にあるものではない。即ち実体を離れない理想である。しかし、理想の理想たる所以は、万物の開發が完全にこれに順じて起り、これに順じて現ずるところにある。即ち万物開發の方向と順次は、完全に理想自体の性能から出てくるもので、その他のものに左右されるものではない。

これによって、理想が顕現する前の状態は、理想顕現の後の状態を生ずる理由を具え、各々の状態において、理想が実現して万物を統制することになる。

この進行において、A が A' に変化するに当って B が B' に変化しなければならない事情の時は A が A' に変化した後は必ず B が B' に変化するのを見る。この理は前の節で説明したように、万物一体の事物の相互作用によるもので、宇宙の中に器械的系統の必然の法則として顕れる。

これが、前の瞬間における実物実事が一定不変の理法に順じて、後の瞬間での実物実事を生じ、各瞬間の実物実事に理想の全体が顕現すると言いうることの基礎である。

#### [65] 理想と実体のどちらも捨ててはならないこと

理想は各瞬間の状態において円<sup>まどか</sup>に顕現する。そして理想の機能はこれに尽きるものではない。時間において、過去の状態を経過したことも、未来の状態を生起することも、また理想の機能である。これを観察・把握するためには無限の時において、無限の実在界に居住しなければならない。単に我々の思想を以って、無限の時と無限の実在界を尽そうなどと考えるのは、甚だしい誤りである。これが実体論が明らかに教えるところである。

思うに実体論は、それぞれの時における存在の状態について、それが一定の理法に順じて過去の諸力の動作した結果で、動かすべからざるものと見なす。

ただし、通常の実体論は、一元論を取らないで、多元論を取る。しかし、多元論が誤りであることは前に詳しく論じたので、参照すること。

さて、一元論を取るとする。そうすると事物の変化は、万物が相依する一体の性質から生ずると言わざるをえなくなる。そうなると、理想論も実体論も大きな隔りはなくなることを注意してほしい。

両者の違いは、理想論はその原理をもって活動的理想と為し、実体論は客観の実物界の中にその原理を求め、実体にそなわる法則であると為す、この違いがあるのみである。

この違いがあるが、実体論者も[理想論者と同じく]その経験の確定したものにあっては未来を推測するに足ると為す。ただ、その経験の本体は実体を措いて他には無いということを明言する。しかし、実体論者も事実の各々の継起の状態のみを以って、実体界を完全に表すものとは見なしおらず、各々の状態を以って一定の目的に達する手段であり、一種の意義を表す装置であると見なす。

とすれば、これは精神性(靈性)の存在を拒否するものではない、ということになる。

### [66] 事物とは精神的実体である

我々はこれまで事物の何であるかを尋ねて、種々の考察と論説を検討してきた。しかし未だに目指す結論を得ていない印象がある。これまで論じてきた内容をまとめて、この疑問に答えて欲しい。

答える。

事物とはその体は不変不動のものではなく、常に展転して移り行くもので、かつ一本体の相状であるとは先に述べた。

そしてこの転変流化の間において、事物が各々それ自体を保持することもまた説明した。

更に進んで、我々は万物が一体であることを論証した。

そして、いわゆる「自体を保持する」ということは、知覚において感覺することの外にあることではない。「ある体を保持する」ということを成り立たせるためには、それ自らを現前させなければならないからである。これは精神性(靈性)の機能である。

故に事物は精神的実体でなければ、決して事物であることができない。精神的実体であるが故に、能くそれ自体を保持し、能く相状の本体であることを得るのである。

そしてこのことは、万物を包含する一体と、事象として顕現する実体と、どちらにもあてはまることを知るべきである。

# 原文

- ・訳者(星)の注記は()で括り挿入してある。  
注記の内容は、漢字のよみの付加、誤字・脱字と思われるものの訂正等である。
- ・原本の段落分けに沿って[]に数字で番号付け分割してある。さらに段落内の文章は文意に沿って適当に改行、段付け等を行っている。

## 純正哲学(哲学論)

文学士 徳永満之 講義

### 序言

#### [1]

哲学ヲ講授スルニ三法アリ

- 一ハ 自己一家ノ説ヲ演ブル者ニシテ最モ正確ナリト離トモ蓋世ノ大家ニアラサルヨリハ或ハ後世ヲ誤ルコト少カラサルヘシ
- 二ハ 歴史的ノ方法ニシテ古来数百年間ノ哲学発達ノ順序ヲ逐フテ諸家ノ説ヲ講述スルモノナリ 此法ハ広ク諸家ノ説ヲ通観シテ其長短ヲ知ルニ利アリト雖トモ亦周密ナルコト甚タ難シ
- 三ハ 或一家ノ説ヲ取りテ細ニ其所論ヲ弁明スル者ニシテ精シク一家ノ論理ヲ知ルノ益アルモ亦狹隘ニ失スル恐アリ

然レトモ方法ノ得失ハ爰ニ論弁スルヲ要セス 只第一法ハ余ノ敢テスル所ニアラス 第二法ハ本館既其講義アリ

故ニ余ハ第三ノ法ニヨリ独逸ロツツェ氏ノ説ヲ根拠トシテ少シク講説スル処アラントス

蓋シ氏ハ最近世ノ大家ニシテ其説ヲ立ツルヤ唯心ニ偏セス唯物ニ局セス 常ニ二者ノ中庸ヲ取り其調停ヲ期シ特ニ理科学ノ幽奥ヲ探リ其原理ヲ究明スルヲ以テ哲学ノ要点トナセルカ故ニ科学全盛ノ今日ニアリテ最モ講究スヘキ説ト云ハサルヲ得ス

### 緒論

#### [2]

純正哲学ハ変化アル実体ヲ研究ス

変化トハ事々物々ノ生滅起伏隠顕出没スルヲ云ヒ

実体トハ宇宙ノ間ニ顕現羅列スル万有ヲ云フ

細言スレハ無ニアラスシテ有ナル物、起ラサルニアラスシテ起ル事、存在セサルニアラスシテ実存スル關係、此三者ハ皆ナ実ニシテ虚ニアラス

或ハ之ヲ称シテ現象ト云ヒ其状態ノ千種万類ナルヲ見テ却テ理想ノ恒久明瞭ナルニ劣レリト為セルモノアリ

或ハ之ヲ以テ真個ノ実体ナリト為シ其變動ノ確然一定セルト其活動ノ万様ナルヲ以テ更ニ理想ノ幽玄如影ナルニ勝レリト為セル者アリ

此二者ハ古来哲学上ノ一大疑問ニシテ一朝ノ談ニアラス 深ク哲学ノ源底ニ達セスンハ解釈シ得ヘカラス 而シテ二説ノ万有ヲ評価スル此ノ如ク相違ヘリト雖モ共ニ其変化アルコトヲ摘示スル

者ナリ

蓋シ變化ハ万有ヲ通貫スル事實ニシテ或ハ轉化衰滅ト云ヒ或ハ行動受動ト云ヒ或ハ運動開發ト云フ者ハ其形様タルニ過キス 而シテ古來純正哲学ノ研究ヲ促シタル者實ニ此等ノ形様ニ外ナラス

[3]

純正哲学ハ預想ト実験事實トノ撞着ヨリ起ル者ナリ 蓋シ諸学ノ起元ハ事理明瞭ナラサル者アルニ由ル 純正哲学ノ起元豈ニ之ニ異ランヤ 吾々カ日夜ニ遭遇スル所ノ実験事實ハ決シテ一々吾人ノ預期スル処ニ合スル者ニアラス

事實預想ト矛盾スレハ吾人ノ胸中疑團ノ氷結スル無カラント欲スト難トモ得ヘカラス 之ヲ解釈セント欲スル者ハ是レ諸科ノ学間ナリ 又純正哲学ナリ 而シテ吾人カ懷抱スル所ノ預想ニ三種ノ別アリ

(一)本然或ハ天賦ノ預想ハ吾人日常実験ノ事實ハ其如何ナルヤニ関セス 吾人ハ天然ニ事物ノ真理ヲ知覚スルノ性ヲ有ス 故ニ若シ此天性即チ心内ニ含蔵スル思想ヲ開發スレハ以テ万有ノ原理ヲ推知シ得ヘシトス 故ニ此說ヲ持スル者ハ其說ク処果シテ現前ノ事實ニ適合スルヤ否ヤヲ顧ミザル傾向アリ

(二)情感的ノ預想ハ吾人ノ感シテ以テ真正確實ナリト知ル処ノ者即チ万有ノ真理ナリトナス 故ニ此說ハ道理ヲ捨テテ信仰ニヨルヲ常トス 單ニ宗教上ノ感情ヨリ万有ノ原理ヲ演述シ來ル者皆之ニ属ス 而シテ此說既ニ道理ニ依ラサルカ故ニ哲学上ニ於テハ其是非ヲ論スルヲ要セス

(三)実験ノ預想ハ既往ノ經驗ニヨリ幾多ノ定則ヲ発見シ此定則コソ万有ノ真理原則ナレト思惟スル者ニシテ近世理科学上ノ成績ニ基キ万象ノ原理ヲ究明セントスル者概ネ皆ナ爰ニ属ス 之レ稍(やや)正確ノ預想ナリト雖トモ其根底ナル經驗ハ如何シテ成立シ得ルヤヲ講究セサレハ其短所ト云ハサルヲ得ス

以上三種ノ預想ハ吾人カ実験スル処ノ事實ト契合セサルコトアリ 是レ疑問ノ起ル所以ニシテ亦哲学ノ起ル所以ナリ

[4]

預想ト事實ト契合セサルニ依リテ二種ノ懷疑ヲ生スルニ至ル 二種トハ整合不合ノ懷疑是ナリ 抑懷疑トハ万有ノ原理ノ得テ知ル可カラサルコトヲ主張スル者ナリ

学者ノ日夜汲々トシテ研究ニ従事スルハ万有ノ原理原則ヲ発見セントスルニアリ 然リ而シテ個々ノ事物ノ原理定則ハ之ヲ発見スルコトヲ得ヘシ 万有ノ真理原則ニ至リテハ到底吾人ノ探知シ能ハサル所ナリト云フ者アリ 是レ幾分ノ懷疑ヲ有スル者ト云フヘシ 個々ノ事物ノ原理定則ト雖トモ亦知り得ヘカラスト云フニ至リテハ純乎タル懷疑者ト云ハサル可カラス

此二種ノ懷疑者ハ則チ今云フ処ノ整合不合ノ懷疑者ニシテ預想ト事實ノ契合セサルニヨリテ起レル者ナリ

前段ニ於テ預想ノ事實ト契合セサル者アルコトヲ論シ中ニ就テ情感的ノ預想ハ哲学上其是非ヲ論スルヲ要セサルコトヲ証シタリ

第一第三ノ預想ヨリシテ二種ノ懷疑ヲ生スルニ至ル 預想ト事實ト契合スル能ハスンバ其一ヲ捨テテ其他ヲ存セサルヲ得ス 而シテ吾人ハ実験事實ヲ捨ツル能ハサルカ故ニ二者其一ヲ捨ツルニ当リテハ預想ヲ棄テサルヲ得ス 然レトモ実験ノ預想ハ之ヲ棄ツル能ハス 何ントナレハ是等ハ既往ノ実験ニ基ク者ナレハナリ

故ニ曰ク 只実験ニ基ケル原理ノミ真理ト云フヘク万有ノ原理ノ如キハ実験ノ証スル能ハサル所ナルカ故ニ吾人ハ之ヲ知ル能ハス 吾人ノ知り得ルハ個々ノ事物ニ就テノ実験的定則ニ止マルト是レ幾分ノ原理ヲ知り得ヘキモ全体ノ原理ヲ知り得ヘカラスト云フ者ニシテ幾分ノ懷疑者ナリ 又

或ハ原理ヲ知り得ヘシト云ヒ或ハ之ヲ知り得ヘカラスト云フカ故ニ不合ト名クヘシ

天賦ノ預想ニ至リテハ初ヨリ実験ヲ顧ミサルカ故ニ之ヲ捨ツルモ事實ヲ維持スルニ妨ケナシ而シテ此説既ニ事實ニヨリテ原理ヲ求メサルカ故ニ一旦預想ヲ棄ツレハ最早原理ノ尋ヌヘキナク又之ヲ尋ヌル能ハス 故ニ曰ク吾人ハ決シテ原理ヲ求ムル能ハス 只過去ニハ某ノ事實アリタリ現在ニハ某ノ事實アリト曰フニ止マル 此等ノ事實ニ依リテ原理ヲ求ムルコトハ為シ得ヘカラスト此ノ如キ論者ハ徹頭徹尾原理ノ知り得ヘカラストヲ主張スルカ故ニ純乎タル整合懷疑者ト名クヘシ

[5]

蓋然ハ有規聯絡ノ外ニ求ム可カラストハ実験学者ノ注意ヲ要スル事件ナリ 夫レ学者ノ夙夜(しゅくや)ニ研究スル所アルハ万有ニ一定ノ規律アリテ之ヲ聯絡スルコトヲ認知スルニ由ル 若シ之ナクハ何ソ煩ハシク考究ノ勞ヲ取ルヲ須キヤ 或ハ之ヲ認知スルハ只初ニ之ヲ假定スルノミ 觀察実験ノ之ヲ証スルヲ待チテ而シテ後其正確ナルコトヲ定ムルニ至ルト云フト雖トモ所謂假定ナルモノハ既往ノ事實ニアリシ一種ノ關係ヲ總括シタル者ニ過キス 今觀察実験ノ之ニ契合スルアルモ之ヨリ推測シテ不変ノ原則ナリトセシムルモノハ是レ全ク吾人ノ思想ニアリ 即チ万有ニ一定ノ規律聯絡アリトスル思想ナリ

或ハ之ヲ駁シテ曰ク 觀察実験ハ有規聯絡ヲ証定スル能ハス 觀察実験ノ契合益増加スルニ從ヒ先ニ假定セル所ノ者愈其蓋然ノ度ヲ増進スルニ至ル (蓋然トハ将来モ蓋シ亦然ルヘシト云フコトニテ既往ノ事変ヨリ将来ノ事変ヲ推測スルニ必ス然ルト云ハスシテ疑ヒヲ存スルヲ云フ)

然レトモ所謂蓋然ハ是レ既ニ有規聯絡アルコトヲ認定スルニアラスンハ決シテ生スル者ニアラス何ントナレハ既往ノ事實ヨリシテ将来モ蓋シ然ラント推歩スルハ是レ事物ノ説明ヲ与ヘント欲スル者ニシテ其蓋然ノ度ノ増進スレハ事物ノ説明益完備ニ至レト為ス者ニ過キス

而シテ事物ノ説明トハ隔離散逸セル事物ヲ統一シテ一定ノ規律ニ歸セシムルニアリ 故ニ万有ニ一定ノ規律ナシスレハ事物ノ説明ト稱スヘキ者ナク事物ノ説明ナクハ蓋然ト稱スルコトモ滅セサルヲ得ス

換言スレハ蓋然トハ既往ニ於テ甲ナル現象ノ後ニハ乙ナル現象繼起セルヲ見テ将来ニ於テモ亦然ラント推歩スル者ナレトモ若シ事物ニ一定ノ規律ナクハ甲ノ後ニ丙、丁、其他如何ナル現象ノ起ルモ当然ナルヘク然ルヲ甲ノ後ニ乙ノ起ルヘキヲ以テ蓋然ト為シ丙、丁、ノ起ルヲ以テ不蓋然ト為スハ是レ則チ有規聯絡ノ正確ナルコトヲ認定スル者ナリ

然ラハ則チ蓋然不蓋然ハ全ク有規聯絡内ニ尋ヌヘクシテ其外ニ求ムヘキ者ニアラサルナリ

[6]

万物ノ要因ハ不可知的ニアラスト云フハ前段ノ所論ニ一步ヲ進メテ純正哲学ノ成立セサル可カラサルコトヲ証スル者ナリ

前段ニ於テ実験ニヨリ知識ヲ得ルハ有規聯絡ノ正確ナルコトヲ認定スルニアラスンハ能ハサルコトヲ論定シタリ

然ルニ実験学者ハ尚ホ進ンテ曰ク 吾人ハ有規聯絡ト云ヘル一個ノ假定ヲ為サスンハ知識ノ得難キヲ知ル 然レトモ是唯甚(「いづれ」の意でタダと訓ずるか)タ単一ナル假定ニ過キス 真ニ知識ヲ生スル所ノ者ハ唯実験ノ一法アルノミ 実験以外ニアルコトハ到底吾人ノ知り得ル所ニアラス

彼ノ哲学者ノ如キハ万物ノ要因 (要因トハ万象ノ本体或ハ本性等總テ実験以外ニアル者ヲ云フ) ヲ求メント欲スト雖トモ到底之ヲ得ル能ハス 之カ為ニ一学ヲ立ツル無益ト云ハサル可ラスト

実ニ万物ノ原理原則ヲ推究シテ一定ノ不可知的ナカラシムルコト能ハサルヘシ 然レトモ要因ハ全ク知り得ヘカラスト云フニ至リテハ其言フ処既ニ矛盾ヲ免レス

何ントナレハ之ヲ知り得ヘカラスト云フハ既ニ其物アルコトヲ認知スル者ナレハナリ 既ニ其物アルヲ知ル 何ゾ不可知ト云フヲ得ンヤ 而シテ又之ヲ不可知ト云フハ要因ト吾人トノ間ニ一定ノ

關係アルコト即チ知ル可カラサル理由アルコトヲ認定スル者ナリ 復焉(いづく)ンゾ不可知ト云フヲ得ンヤ

況ンヤ所謂單一ナル仮定即チ有規聯絡ハ其言ノ單一ナルカ如ク其意モ亦單一ナルカ如シト雖トモ決シテ然ルニアラサルオヤ

論理数理ノ原則、空間時間原因結果ノ關係等ハ皆有規聯絡ニ屬スル原理原則ト云ハサル可カラス 皆実験知識ヲ形成スルニ於テ欠ク可カラサル者ナリ

然レトモ此等ハ決シテ觀察実験ノ附与シ得ル者ニアラス 亦要因ト云ハサル可カラス

然ラハ則チ此等ノ原理定則ハ如何ナル者ニシテ其実験事實ニ於テハ如何ナル關係ナルヤ 若シ又実験以外ノ者ニモ通スルニアラサルヤ

此等ノ諸問題ヲ解釈セスンハ諸学ハ一モ確固タル根底ナキ者タルニ至ルヘシ 此ニ由テ之ヲ觀レハ万物ノ要因ハ悉ク知り得ヘキニアラザルモ亦不可知的ト云フ可ラス 要因ニシテ知り得ヘクハ之カ為ニ一科ヲ設ケテ之ヲ研究スルハ至要中ノ至要ト云ハサル可ラス

## [7]

実験智識ハ純正哲学ニ基カサル可カラス 蓋シ実験ノ吾人ニ授クル所ハ其範圍内ニ起レル事件ニ限り其以外ニ及ブ能ハス 即チ過去ニハ某々ノ頭象アリタリ 目前ニハ某々ノ頭象アリト云フコトヲ教フルノミ 是レ只頭象ヲ列挙叙述スルコトヲ得セシムルニ止マル者ナリ

然レトモ知識ノ知識タル所以ハ既往ト現在トノ事変ヨリシテ将来ノ事変ヲ推知シ既知ト現知トノ事實ヨリシテ未知ノ事實ヲ測定セシムルニアリ 之ヲ未来徹見未知推測ト云フ

凡百ノ學術誠ニ多岐ナリト雖トモ到底未来徹見未知推測ノ外アルコトナシ 是レ実験ノ賦与シ能ハサル所ナリ 何トナレハ未知未来ハ実験ノ範圍外ニアレハナリ

然ラハ則チ何者カ能ク此至要ノ業ヲ為シ得可カラシムル

曰ク 曩(さき)ニ所謂有規聯絡是ナリ 宇宙ノ事変ニ確然不動ノ規律聯絡アルニアラスンハ既往ト現在ニ如何ナル不変ノ事實ノ存スルモ吾人ハ之ヲ推シテ将来モ亦然ラント論及スル能ハサルナリ 之アルニアラスンハ既知ト現知ノ事實ニ如何ナル契合アルモ吾人ハ之ヲ推シテ未知ノ事實モ亦之ニ類同スヘシト測定スル能ハサルナリ

然ラハ則チ実験知識ノ知識タル所以ハ万化ニ確然不動ノ規律ノ存スルニ由ル者ト云ハサル可カラス 即チ実験知識ノ基趾ハ有規聯絡ニアリト云ハサル可カラス

而シテ有規聯絡ハ純正哲学ノ研究スル所ナルカ故ニ実験知識ハ純正哲学ニ基ク者ナリト断言セサルヲ得ス

## [8]

然リト雖トモ純正哲学ノ原理ハ実験ト相依リ相助ケテ正確ノ知識ヲ生スルコト亦知ラサル可カラス 前段屢(屢 しばしば) 実験ヲ排撃シタリト雖トモ是レ実験ノミヲ以テ知識ノ本源ナリト為セル謬見ヲ正サントスルニ過キス 實ニ近世実験ノ勢力頗ル盛ニシテ殆ント純正哲学ヲ払掃シ去ラントスルノ形状ナキニシモアラスト雖トモ既ニ前段ノ所論ニ於テ其純正哲学ニ基カサル可カラサルコトヲ論定シタルヲ以テ今少シク抛ヲ転シテ純正哲学ノ專横ヲ排セサル可カラサルヲ見ル

純正哲学ノ実験ヲ待タザリシヲ以テ失誤ニ陥レルコト實ニ鮮少ニアラサルナリ 蓋シ純正哲学ハ所謂原理原則ヲ究明スル者ニシテ特殊ノ法規定律ヲ探求スルカ如キハ其能シ得ル所ニアラス

何物カ実存シ何物カ実起セルヤニ至リテハ実験ヲ措キテ他ニ求ムヘキ道アルコトナシ 然リ而シテ真實有用ノ知識ハ此ノ如キ個々 実験ノ事實ヲ採リ之ヲ万有普通ノ原理原則ニ照シ以テ宇宙進化ノ行程ヲ認知スルニアリ

之ヲ細言スレハ純正哲学ハ理法ヲ与フルノミニシテ此ニ適応スル材料ハ之ヲ実験ニ採ラサルヲ得ス 殿宇ノ造営ヲ以テ之ニ喩ヘンカ 匠凶ハ理法ニシテ木石ハ材料ナリ 匠凶如何ニ精微ナルモ以テ住スヘキニ至ラス 木石如何ニ備具スルモ以テ居スヘキニ至ラス 然シテ殿宇ノ殿宇タル

所以ハ以テ住居ニ適スルニアリ

知識モ亦之ニ異ナラス 知識ノ知識タル所以ハ特殊ノ法規定律ニアリ 原理原則如何ニ精微ニ亘ルモ実験事實如何ニ備具スルモ二者相依ラスンハ決シテ特殊ノ規律ヲ生スルニ至ラサルナリ 此ニ由テ之ヲ觀レハ純正哲学ノ原理原則ハ実験事實ト相待チテ正確有用ノ知識ヲ生スル者ナリト云ハサル可カラス

[9]

心理学ノ純正哲学ノ基趾ニアラサルコトヲ了知スルハ最モ緊要ノ事件ナリ 前段ニ於テ屢有規聯絡ノ必要ナルコトヲ唱導シタリト雖トモ所謂有規聯絡ナル者ハ吾人ノ思想ニ於テ斯クナクンバアル可カラサルコトヲ認定スルニ過キスシテ所謂思想ノ必然ニアル者ナルニ

果シテ然ラハ此ノ如キ有規聯絡等ヲ研究スルニ先チ思想ハ如何ナル者ナルヤヲ探究セサル可カラス 思想ノ必然ハ果シテ有規聯絡ノ如キ万有ノ原理ヲ判決スルニ足ルヤ 或ハ思想ハ全ク此ノ如キ判決ヲ為スニ足ラサルニアラスヤ 又此ノ如キ思想ヲ有スル吾人ノ精神ハ抑如何ノ作用ヲ為シ如何ノ性質ヲ有スル者ナルヤ

此等ノ事件ヲ檢定セスシテ直ニ万有ノ原理ヲ討尋セント欲スト雖トモ豈夫レ誤謬ニ陥ラサランヤ

然ラハ則チ純正哲学ヲ研究スルハ心理学ヲ以テ基趾ト為ササル可カラス

是レ則チ英独数家ノ說ヲ立ツル所ナリ (経練学派批評学派等之ニ属ス)

然レトモ此說ノ誤レルコト容易ニ知り得ヘシ 論者ハ思想ヲ用テ万有ノ原理ヲ探求スルニ先チ思想其物ノ何タルヲ討尋セサル可カラスト云フト雖トモ其之ヲ討尋スルハ果シテ如何ナル作用ニヨリテ之ヲ為シ得ルヤ 蓋シ亦判断推理等ニヨルニアラスヤ 思想ノ必然ニヨルニアラスヤ 果シテ然ラハ思想ノ何タルヲ討尋セント欲シテ却テソノ指令ニ従フ者ト云フヘシ 既ニ思想ノ指令ニ従フ何故ニ之ニヨリテ直ニ万有ノ原理ヲ探求ス可カラサル

之ヲ要スルニ吾人カ事理ノ真妄ヲ判決スルハ到底思想ノ必然ニ訴ヘサル能ハス 即チ思想ハ其内部ノ關係ニヨリテ事理ノ正不正ヲ確定スルノ能力ヲ有スル者トセサルヲ得ス

如何ニシテ此ノ如キ能力ノ存スルヤハ毫モ其能力ノ価格ヲ変化スル者ニアラス 而シテ此ノ如キ能力ノ起元ヲ究明セントスルモ亦思想ノ必然ニヨラサル可ラス 然ラハ則チ純正哲学ハ心理学ニ基クヲ要セサル瞭然タリト云フ可シ

否心理学ノ研究ハ却テ純正哲学ニ基カサルヲ得ス 何ントナレハ精神ニシテ一箇ノ实体ナランカ 純正哲学ノ範圍内ニ入ラサルヲ得ス 精神ニシテ変化ヲ呈スル者ナランカ 亦純正哲学ノ範圍内ニ入ラサルヲ得サレハナリ

[10]

純正哲学ハ規律ヲ本トシ意匠ヲ重ンゼズ 前段屢有規聯絡ノ事ヲ論ジ特ニ知識ノ生スル所以ハ有規聯絡ノ確實ナルコトヲ假定スル者ナルコトヲ解説セリ 然リ而シテ有規聯絡ノ思想ハ近代ニアリテハ万有遍通千古不変ノ關係ナリト為スト雖トモ人智ノ未ダ進達セサル時ニアリテハ未タ此ノ如キ見解ニ到ラサリシナリ 乃チ古人モ万有ノ間ニ一定ノ聯絡アルコトヲ認定セリト雖トモ其之ヲ認定セルヤ遍通ノ規律トナサスシテ一個ノ意匠或ハ経画ニヨレル聯絡ナリトナシ随テ各殊ノ事物ハ皆各殊ノ目的ヲ有シ諸般ノ目的相依リテ以テ一個ノ意匠或ハ経画ヲ完成スルニ至ルト為セリ

故ニ此流ノ論者ハ一個ノ最上究竟ノ觀念ヲ以テ万学ノ起点トナシ此ヨリ諸般ノ目的ヲ演繹シ来リ其目的ニ順シテ以テ各般ノ現象ヲ説明セントセリ

而シテ彼等ノ常ニ誤レル所ハ最上究竟ノ觀念ノ何タルヲ説明シ能ハザリシニアリ 最上究竟ノ觀念ニシテ不正ナランカ之ヨリ演繹シ来レル各般ノ諸說ハ皆尽ク誤謬ヲ免ルルコト能ハス ヨシ幸ヒニシテ良好ノ結果ニ達シ得タリトスルモ只情感的ニ満足ヲ生スルニシテ確論以テ之ヲ証明スル能ハス

既ニ確論ノ以テ之ヲ証スルコト能ハスンバ哲学中ニ容ルヘキ者ニアラサルナリ 蓋シ此ノ如キ最

上究竟ノ觀念ハ設ヘ之アルモ吾人ノ現ニ達シ得ル所ニアラス 吾人ノ達シ得ル所ハ現実ノ万象ニアリ 現実ノ万象ニシテ真ニ此ノ如キ觀念ニヨリテ起リ之ニ順シテ流行スル者ナランカ

現実ノ万象ヲ探求セハ之ヲ覚知シ得ルニ至ル可シ 夫レ此ノ如クシテ覚知シ得ヘキ者ナランカ 必ス遍通ノ有規聯絡ニ歸セサルヲ得ス 何トナレハ知識ハ有規聯絡ニ基カサルヲ得サレハナリ

然ラハ則チ此ノ如キ觀念ニ到達シ得ヘキト否トニ關セス純正哲学ハ遍通ノ有規聯絡ヲ現実ノ万象中ニ討尋スヘキノミ 是レ則チ純正哲学ハ規律ヲ本トシ意匠ヲ重(おもん)セサル所以ナリ

[11]

今ヤ緒論ノ終ラントスルニ当リテ此学ノ範圍ヲ区分シ一篇所論ノ順序ヲ説明スヘシ 純正哲学ノ範圍ヲ区分スルハ決シテ困難ノ事ニアラス 古来既ニ此業ニ従事シ其問題ヲ指定シタル者鮮少ニアラサレハナリ

蓋シ此事タル初メヨリ困難ノ業ニアラサリシナリ 何トナレハ各個人ノ実験スル所ヲ反顧スレハ以テ容易ニ疑問ノアル所ヲ発見シ得ヘケレハナリ

今其实験ノ賦与スル所ヲ檢スルニ外界ノ万物ト内界ノ精神トノ二顕象アリテ互ニ相流行活動シ以テ一大系統ヲ形成スルヲ見ル 而シテ内外二界ノ顕象ハ各々吾人ノ研究ヲ促スト同時ニ二界ヲ貫通シテ均シク之ヲ統制シ以テ二界相互ノ行動ヲ為シ得ヘカラシムル原理真性モ亦吾人ノ考究ヲ誘起シテ止マサルナリ

此三個ノ疑問ハ古来哲学ノ範圍ヲ区分セシメタル者ニシテ今亦之ニ繼從シテ本論ヲ区分スルニ至ル 其順次左ノ如シ

実在論	内外貫通ノ原理ヲ考究ス
宇宙論	外界顕象ノ原理ヲ考究ス
心霊論	内界顕象ノ原理ヲ考究ス

# 本論 第一章 實在論

## 第一節 事物ノ實在

[12]

實在トハ眞實ニ存在スルコトヲ指ス語ニシテ事物ノ實在トハ凡百ノ事物ノ眞實ニ存在スルトハ抑如何ナルコトナルヤヲ論究セントスルヲ云フ

此問題タル實ニ單一ノ者ニシテ特ニ考究ヲ要スヘキニアラサルカ如シト雖トモ哲理上ヨリ觀察スレハ亦決シテ然ラサルヲ見ル 蓋シ事物ノ存在ノ眞ナルヤ否ヤハ哲学思想界中最古以來ノ問題ナリ 通常人ハ五官ニ映スル者ヲ以テ眞實ニ存在スル者トナシ之ニ映セサル者ヲ以テ非眞ノ存在ト為スヘシ

然レトモ五官ニ映スル者必スシモ其實物ノ存セサルコトアリ 鏡中ノ像水中ノ月以テ証スヘシ 此等ハ吾人ニ顯ハルルノミニシテ實體アルニアラス 之ニ由テ古來顯象ト實體トノ判別アリ 又其實體アリト稱スル者モ之ヲ解ケハ散シテ元形ヲ存セサル者アリ 之ヲ分テハ離レテ他形ニ歸スル者アリ 然レハ結合ニヨリテ成レル者ハ單一獨立ノ者ニアラサルナリ 是ニヨリテ單一ト複雑トノ弁別アリ 榮枯スル者アリ 盛衰スル者アリ 生滅起伏スル者アリ 之ニヨリテ變化ト不變トノ分別アリ

此ノ如ク觀察シ来リテ茲ニ實在物トハ吾人ノ之ヲ認知スルト否トニ關セスシテ單一不變ナル者ナリト云フニ至リタリ 然レトモ此三個ノ性質ハ實在物ノ表徴ヲ列挙セル者ニ過キスシテ未ダ實在ノ内容即チ實在ノ何タルヤヲ弁明セサルナリ 加之此三個ノ表徴ハ他ニ之ヲ附シ得ヘキ者アリ 吾人ノ認知スルト否トニ關セサルハ各般ノ真理モ亦此性質ヲ有シ單一ナルノ表徴ハ個々ノ感覺モ亦之ヲ有シ不變不動ハ思想界ノ常想ナリ

然ラハ則チ實在物ノ實在スル所以ハ尚ホ他ニ尋ヌル性質ナクンバアル可カラズ 而シテ其性質最モ肝要ノ者ナルナリ

[13]

之ニ答フル者アリ 曰ク 思想ヲ以テ實在物ノ何タルヲ探求セント欲スルモ到底之ヲ知ル能ハサルヘシ 何ントナレハ思想其物ハ實在物ト全ク其性質ヲ異ニスレハナリ 然レトモ眞個ノ實在物ハ吾人之ニ接シテ之ヲ知り得ヘシ 即チ感覺ハ實在物ノ眞性ヲ知ラシムル者ナリト

實ニ然リ 吾人ハ外物ノ實在ヲ檢定セントスル時ハ常ニ感覺ニ訴ウル者ナリ 論理証明ノ正確ナルヲ熟知シ又他人ノ決シテ吾ヲ欺カサルコトヲ固信スル時ニアリテモ尚ホ其物ヲ實見シ其事ヲ實聞スルニ至リテ始メテ全ク疑心ヲ散スルニ至ルハ吾人ノ自覺スル所ナリ 果シテ然ラハ感覺亦或ハ吾人ヲ欺クコトナキニシモアラズト雖トモ其吾人ヲ欺カサル場合ニ於テハ實在ヲ知ルノ唯一法ト云フヘキカ 然レトモ感覺果シテ實體ノ眞性ヲ知ラシメ得ルヤ否ヤハ尚ホ少シク考究セサルヘカラス

[14]

夫レ感覺ハ極メテ單一ナル者ナリト雖トモ思想ヲ以テ之ヲ分解スレハ能感、所感ノ二部ニ分ツコトヲ得ヘシ 實際ノ場合ニ於テハ二者常ニ合一不離ニシテ之ヲ甄別(けんべつ)スル能ハス 然レトモ之ヲ想見スルコトハ吾人ノ為シ得ル所ナリ

青、黄、赤、白、ノ感覺ニ就テ云ハハ青黄等ノ感覺ヲ生スル時ニ吾人ノ精神作用ノ之ニ加ハハルハ何レノ場合ニ於テモ相異ナルコトナシ 是レ能感ナリ

外来ノ刺衝ハ四個ノ場合ニ於テ各相異ナレリ 是レ所感ナリ 此所感ハ則チ吾人ヲ離レテ獨立自存スル者ナリ 然ラハ則チ所謂實在ナル者外物ニ屬ストセハ此所感中ニ存在セサルヲ得ス

乃チ所感中ニハ青、黄、等ノ場合ニ於テ一々變異セル者ト此ノ如ク變異セサル者ト無カル可カ

ラス 何ントナレハ実在ハ青、黄、等ノ何レニモ属スヘケレハナリ

換言スレハ所感中ニ於テ変異ノ元素ト共通ノ元素ノ二者ナカル可ラス

然レトモ能感所感相合シテ一感覺ヲ為セルニ当テ所感変異ノ元素ハ能感ヲ喚起シテ青、黄、等ト認メシムルニ過キス 故ニ青、黄、等ノ感覺ニ於テ共通ノ元素ハ能感ヲ喚起スルノ外他アル能ハス スナハチ能感ヲ喚起スルノ外ニ所感共通ノ元素ハ感覺中ニ存スル能ハサルナリ

果シテ然ラハ感覺ニ由テ諸物ノ実在ヲ知ルニ足ルト為セル説ハ無効ニ帰セサルヲ得ス 若シ真ニ感覺ニ由テ知り得ヘキ実在アリトセハ其ハ全ク能感ヲ喚起スルノ事実ニアリト断言セサルヲ得サルナリ

#### [15]

夫レ斯ノ如ク事物ノ実在ハ感覺ニヨリテ知り得可シトセンカ 其實在ハ所感ノ能感ヲ惹起スルニアリト云ハサル可カラス

換言スレハ所感ノ物体能感ノ境遇トナリ得ルノ一事ニ諸物ノ実在ハ存スト云ハサル可カラス 果シテ然ラハ能感ノ存セサル所ニ事物ノ実在ハ之ナシトセザルヲ得ス 何ントナレハ能感ヲ離レテ境遇ハナキヲ以テナリ

然レトモ此ノ如キハ通常ノ見解ト大ヒニ其趣ヲ異ニスル者ナリ 通常ノ見解ニ於テモ亦感覺ヲ以テ実在ヲ知ルノ唯一法ト為シ随テ一感覺ノ附与スル所ハ其物ノ真性ヲ尽シー物ノ実在中感覺以上ノ者之ナシトスルノ誤謬ニ陥ルコトアリト雖モ諸物ノ実在ハ吾人ノ知識内ニアルニアラスシテ独立自存スル者ナルコトハ決シテ此見解ノ疑ハサル所タリ

乃(すなわ)チ諸物ハ吾人ノ之ヲ知ルト知ラサルトニ関セスシテ実存スル者ナリト云フニアリ 是レ極メテ瞭然タル説ニシテ更ニ疑ヲ容ルヘキニアラサルカ如シ 然リト雖トモ細ニ之ヲ察スレハ亦疑ヒナキヲ得サルカ如シ

蓋シ物ノ実ニ存在セシハ其吾人ノ心ニ現ハレシニヨリテ之アリ 其實ニ存在スルハ其吾人ノ心ニ現ハルルニヨリテ之アルニ過キズ 吾人ノ心ニ現ハルルコトナクシテ物ノ実ニ存在スト抑如何ナルコトヲ云フヤ

曰ハク 他ナシ 一人ノ心ニ現ハレサルモ他人ノ心ニ現ハルルニアリ 之ヲ例スルニ爰ニ一室アリテ数人相会合シ相談論センニ其一人室内ヲ去ルモ他人ハ依然トシテ室内ニ談論スヘシ 而シテ一人ノ心ニ現ハレ居ラサル室内ノ事物ハ皆依然トシテ他人ノ心ニ現シ居ルヘシト

是レ一理ナキニアラスト雖モ未ダ全ク非難ヲ脱スル能ハス 吾人ノ心ニモ現ハレス他人ノ心ニモ現ハレサルニ至レハ如何、宇宙ノ間ニ精神ト云フ者全ク滅却シ去リタレハ如何、トハ決シテ此説ノ免レ能ハサル難問ナリ

通常ノ見解ハ応ニ云フヘシ 此ノ如キ時ニ至リテモ事物ハ相互ニ関係ヲ有シ相互ニ流行遷化スルコト吾人ガ嘗(かつ)テ之ヲ見聞知覚シタリシ時ノ如ク決シテ異変アラザルヘシト

#### [16]

之ヲ難スル者アリ 曰ハク 事物ノ実在ハ其相互ノ関係ニアリト云フト雖トモ所謂関係ナル者ハ吾人ノ思想ニヨリテ我ハ実トモ不実トモ考定スルコトヲ得ヘシ 然ラハ関係ハ単ニ吾人ノ思想内ニアル者ナリト云ハサルヲ得ス 而シテ事物ノ実在ハ其相互ノ関係ニアリト云フハ現実ノ関係タラザル可カラス

#### [17]

然ラハ単ニ思想中ニノミ存スル関係ハ如何ニシテ現実ノ関係ト転化シ得ルヤト 此疑問タル到底哲学ノ解釈シ得ヘキ者ニアラス 之ヲ解釈セント欲セハ常ニ自家撞着ヲ免レス 思想中ノ関係ノ現実ノ関係ニ転化スルコトヲ求ムルハ現実ナル者ノ如何ニシテ虚無ヨリ生起スルヤヲ尋ヌル者ナリ

即チ吾人ヲ責ムルニ万物生起ノ疑問ヲ以テスル者ナリ 然レトモ万物生起ハ哲学以外ノ事ニシ

テ之ヲ為サントスルハ眼機ナクシテ物形ヲ見ント欲スルト一般決シテ為シ得ヘカラス 哲学ハ万物既ニ実存セル所ニ起リ実存セル万物ノ説明ヲ与ヘント欲スル者ニ過サルナリ

生起ト説明トハ決シテ混同スヘカラス 通常ノ見解ニ於テ生起ノ疑問ヲ解釈セント為ササルモ其当ヲ得タル者ト云フヘキナリ

[18]

然レトモ通常ノ見解ハ果シテ關係ノ何物タルヤ瞭然タラシメタルヤ否ヤニ至リテハ哲学ハ常ニ其之ヲ為ス能ハサリシコトヲ主張セリ

之ヲ檢セントスルニ先ツ關係ト吾人ノ思想ハ相順応スル者ト為スヘシ 關係ト思想ト相順応スルハ

或ハ事物ノ關係、吾人ノ思想ノ變化ニ随フテ變現スルカ

或ハ吾人ノ思想、事物ノ關係ニ順シテ變化スルカノ

二様ニアリト云ハサルヲ得ス

若シ事物ノ關係ハ全ク吾人ノ思想ノ變化ニ随フテ變現スル者ナランカ 事物ノ實在ハ吾人ノ精神以外ニ獨立自存スル者ト云フ可カラス

若シ關係ハ吾人ノ思想ニ随フテ變現スルニアラス吾人ノ思想却テ事物ノ關係ニ隨フテ變化スル者ナランカ 事物ノ實在ハ吾人ノ精神以外ニ其根底ヲ有スト云ハザルヲ得ズ

乃チ關係ハ実物ト実物トノ間ニ実存シ吾人ノ思想ハ只之ヲ發見シ得ルノミト為ササルヲ得ス 果シテ然ラハ關係ヲ離レテ事物ノ實在スヘキナク 事物ヲ離レテ關係ノ獨存スヘキナキノミナラス一物ノ實在ハ他物ノ實在ヲ要シ一物ノ行動ハ他物ノ行動ト離ル可カラス

更ニ一歩ヲ進メテ之ヲ論スレハ一物ノ實在ハ万物ノ實在ニシテ一物ノ行動ハ万物ノ行動タラサルヲ得ス

[19]

事物ノ實在ハ斯ノ如ク無数ノ關係互ニ相聯組織合シテ成立シ決シテ相分離スヘカラサル者ナリト雖トモ此組織中ニ於テ思想上ノ判別順次ヲ立ツレハ個々獨立シテ自存シ以テ諸關係ノ中心タルヘキ諸点先ツアリテ而シテ後諸点ノ間ニ現實ノ關係成立スト思考セサル可カラス

此ノ如ク關係ヲ離レタル實在ハ所謂純正實在ニシテ哲学思想界中ノ一大問題タリ 其純正ト名クル所以ハ關係ヲ離ヘタル經練的實在ニ別タンカ為ナリ

[20]

純正實在ハ古來哲学上ノ重要ナル問題トナリ常ニ學者ノ考究ヲ促シタル者ナルヲ以テ其論拠ヲ批評スルコト亦必要ト云ハサル可カラス 蓋シ吾人ノ説ヲナスヤ其之ヲナスニヨリテ有用結果ヲ見ルニアリ

事物ノ實在ヲ尋ネテ其相互ノ關係ニアリト云ハハ此ノ如キ關係アルヲ以テ實在ト為シ以テ無在或ハ虛無ト判別スルコトヲ得

今事物ノ實在ノ思想中ヨリ關係ノ思想ヲ除却シ去レハ此ノ判別ヲ為ス能ハサルニ至ル 何レノ場所ニモアラス 如何ナル行動ヲモ為サス 何レノ時ニモ存スルニアラス 如何ナル影響ヲモ受クルコトナク静ト云フ可ラス動ト云フ可ラス 約言スレハ毫モ關係ヲ有セサル者ハ是レ正ニ無物無在ト同一ニシテ更ニ之ト區別シテ實在ト稱スヘキ所以ナシ

或ハ之ニ答ヘテ純正實在ハ先ツ事物アリテ後ニ其關係ヲ除却シタルモノニシテ無關係ヲ以テ特殊ノ属性トナス 無物無在ノ無關係ト云フ属性ヲモ有セザルモノトハ大ニ徑庭アリト

然レトモ此判別タル吾人カ常ニ關係普滿ノ世界ニ住スルニ由リテ幾分ノ意義ヲ有スルカ如シト雖トモ若シ此事情ヲ離レテ単ニ純正實在ノ何タルヲ求メハ決シテ無物無在ト甄別スル能ハサルナリ

[21]

尚ホ説ヲナスモノアリ 曰ハク 純正實在ハ實在中ニ於テ立テタルモノニシテ無物無在ト相對ス可ラス 純正實在ノ對スル所ハ經練實在ニアリ 共ニ實在ナリト雖トモ其關係ヲ存スル者ヲ經練的ト為シ之ヲ除キタルモノヲ純正トナスニ過キス 實在ト無在トノ判別ヲ經過シ去リ既ニ確定セル實在界中ニ於テ論理上ノ判別ヲ設ケ思想ノ順次ヲ示シタル者ニ過キス 之ヲ考ヘスシテ不當ノ相對ヲ設ケテ之ヲ責ムルハ豈ニ誤リナラスヤト

是レ誠ニ純正實在ノ正解ヲ得タル者カ 前段ニ於テ排撃スル所ハ純正實在ヲ以テ獨立自存スル者ノ如ク云ヘル謬見ヲ斥スルニアリ若シ初ヨリ思想上ノ判別トシ毫モ之ヲ現實ノモノト混同スルニ至ラサリセハ決シテ排スヘキニアラサルナリ

請フ 例ヲ挙げテ吾人ノ思考スル所ヲ解説セン

物体ノ空間中ニ於テ運動スルヤ必ス一定ノ速度ヲ有シ一定ノ方向ヲ有スルナリ 吾人ハ此ノ如キ諸般ノ場合ニ就テ或ハ運動ノ一点ニノミ心ヲ注キ或ハ其方向ニノミ或ハ其速度ニノミ注意シテ各々別々ニ之ヲ思考スルハ是レ只正當ノ抽象ヲ行ヘルノミニシテ毫モ不正ナルコトナシ 尚此ノ如ク既ニ抽象セル諸般ノ概念ヲ取りテ一層高等ノ抽象ヲ行フモ亦決シテ其當ヲ失シタルモノニアラス

然レトモ此等ノ抽象ニヨリテ得タル概念ハ決シテ其儘之ヲ實體ニ應用スヘキモノニアラス 方向モナキ速力モナキ運動ハ決シテ實在ニアラス 速力、運動ヲ離レタル方向或ハ運動方向ヲ離レタル速度ハ決シテ實在ニアラス 而シテ通常ノ説話ニ於イテ運動、方向、速度等ヲ個々別々ニ為ス所以ハ只他ノ諸点アリト雖トモ其之アルコトヲ略シテ或ハ運動ノ一点或ハ方向ノ一点或ハ速度ノ一点ニ注意スルモノニ過キサルナリ 實ノ運動ハ常ニ一定ノ方向ト一定ノ速度ヲ有シ實ノ速度ハ常ニ一定ノ方向ヲ有シテ、一定ノ運動ヲナセルモノニ存スルノミ 實ノ方向ハ一定ノ速度ヲ有ズル運動ニ存スルノミ 純正實在モ亦同様ノ抽象概念ニシテ其現實ナルハ個々殊別ノ實在ニ存スルノミニシテ此等ト相離レテ存スルモノニアラサルナリ

[22]

純正實在ハ思想上ノ抽象ニシテ其現實ニ存在スルハ諸般ノ關係ヲ待ツコト略略之ヲ論定シタリ 今一步ヲ讓リテ仮リニ之ヲ以テ獨立自存シ得ベキモノトナシ其如何ニシテ諸般ノ關係ト結合シ先ニ所謂經練實在ヲ生スルニ至ルヤヲ考定センニ 蓋シ經練實在ハ各々殊別ノ關係ヲ有スルモノニシテ彼ノ經練實在ハ甲ノ關係ヲ有シ此ノ經練實在ハ乙ノ關係ヲ有スト顯ハシ得ヘシ

換言スレハ彼ノ經練實在ハ純正實在ト甲關係ト結合セルモノニシテ此ノ經練實在ハ純正實在ノ乙關係トノ結合セルモノナリト云フヲ得ヘシ

然レハ純正實在ハ或時ハ甲ノ關係ト結合シ或時ハ乙ノ關係ト結合セル者ナリ 而シテ此ノ如キ殊別ノ結合ヲナスニハ必ス各々其理由ヲ有セサル可ラス

然レトモ純正實在ハ初メヨリ此ノ如キ理由ヲ有スルモノニアラス 之ヲ有スルモノハ既ニ經練實在ナリ

之ヲ要スルニ純正實在ニシテ獨立自存センカ 恒久獨立自存スルノミニシテ決シテ經練實在ト化スルコト能ハス

經練實在ニシテ生起シ得ル者ナランカ 他ノ經練實在ヨリ生起セサル可ラス

果シテ然ラハ純正實在ハ毫モ宇宙万化ノ説明ニ益スル所ナキモノト云ハサル可ラス 万化ノ説明ニ益スル所ナキ者ハ哲学ノ要トスル所ニアラサルナリ

此ニ由テ之ヲ觀レハ事物ノ實在ハ其万差ノ關係ニアルモノニシテ吾人ハ只之ヲ思考スルニ當リテ論理上ノ分解ヲ以テ諸般ノ關係ト純正實在トヲ判別シ得ルニ止マル者ナリト斷言セサルヲ得サルナリ

## 第二節 事物ノ性質

[23]

前節ニ於テ事物ノ實在ハ諸般ノ關係ヲ確定スルニアルコトヲ論定セシカ吾人ハ更ニ進ンテ所謂關係ノ何者タルヤヲ討尋シ又此ノ如キ關係ノ屬スヘキ事物ノ何者タルヤヲ尋究セサル可ラス

此二問題タルヤ到底相分離ス可ラサル者ナリ雖トモ今先ツ第二問ヲ尋ネテ而シテ第一問ニ及ハントス

第二問中ニ於テモ事物全般ニ亘リテ其何タルヲ尋ヌルト個々ノ事物ニ就テ其各個ノ何物タルヲ求ムルトノ差アリト難トモ實在論ハ前者ヲ論究スルヲ以テ本旨トシ只其聯絡ノ密接ナルカ為メニ其論明自ラ後者ニ及ブニ至ル

[24]

之ヲ研究スルニ当リテ吾人ハ亦感覺ヲ以テ指南トセサルヲ得ス 先キニ云ヘルカ如ク事物ノ正確ヲ知ルノ唯一法ハ感覺ニアレバナリ 而シテ通常ノ見解ニヨルニ吾人ハ感覺ニヨリテ凡百ノ事物アルヲ知リ亦事物ニ諸般ノ性質アルコトヲ知ル 事物ノ事物タル所以ハ知覺シ得ヘキ性質ノミニアリトスルカ如キハ通常ノ見解ノ未ダ為サザル所ナリ

乃チ甘キ赤キ重キハ通常ノ見解ニヨレハ事物ノ性質ニシテ事物其物ニアラス 甘キ赤キ重キヲ除キテ事物ノ本体ナシトスルカ如キハ高尚ナル思想ノ初メテ發見スル所ナリ

故ニ事物ハ性質ヲ有スト云フハ通常ノ見解ヲ表スル者ニシテ乃チ事物ニハ各本体ト稱スヘキ者アリテ諸般ノ性質ハ只之ニ附屬スル者ナリト為ス者ナリ

此ノ如キ見解ハ偶性ノ變化ニヨリテ更ニ其根拠ヲ堅クスルニ至ル 青色ナル者變シテ赤色トナリ黝(ゆう:あおぐろい)色トナリ更ニ化シテ数多ノ色ヲ現スルアリ

諸色ハ即チ偶性ニシテ諸色ノ變化ニ亘リテ一定ナル者之ヲ事物ノ本体トナス故ニ事物ノ本体ハ諸變化ニ亘リテ變化セス 却テ諸變化ヲ結合シテ之カ附屬スヘキ中心タル者ナリト云フ 然レトモ此等ノ数句ハ只事物ノ本体ノ外容ヲ記シタルノミニシテ未タ其内容ノ何タルヲ説明スル能ハス

然レトモ實在論ノ求ムル所ハ事物ノ本体ノ内容ヲ尋ネテ其如何ニシテ諸般ノ偶性ノ變化ヲシテ生シ得ヘカラシムルヤヲ説明スルニアリ

[25]

感覺ハ吾人カ直接ニ實在ノ正確ナルコトヲ知ルノ唯一法ニシテ其吾人ニ附与スル所ハ只事物ノ性質ノ知識ニ止マリ決シテ其本体ノ知識ニアラスト雖トモ其知識ニヨリテ吾人ハ事物ニ本体アルコトヲ推測スル者ナリ

而シテ此ノ如ク推測スル所ノ本体ハ如何ナルヤヲ思考セント欲スルニ当リテハ亦感覺ト類似ノ作用ニヨリテ知り得ヘキ者トナシ其者タルヤ亦感覺ノ生スル所ノ者ト類似スト為スニ至ルハ蓋シ止ムヲ得サルコト云ハサルヲ得ス

是レヘルベルト氏ノ説ヲ立ツル所以ナリ 蓋シ万物ノ本体ハ單一不動ニシテ恒久不変ノ者ナリトハ古來學者ノ常ニ唱導スル所タリト雖トモ此等ノ外容ヲ記スルニ止マラスシテ其内容ヲ考定スルコトハ大抵之ヲ各個ノ想像ニ一任シテ嘗テ之ヲ説明シタルコトナシ

然レハヘルバルト氏ガ之ヲ断定シテ充全單一ノ性質ナリト云ヒ吾人ノ感覺ニヨリテハ之ヲ知ル能ハサルモ吾人ヨリ一層勝レタル生靈ニハ直接ニ覺知セラルベシト唱導シタルハ哲学ニ益スル所決シテ鮮少ナリト云フ可カラス

然レトモヘルバルト氏ハ此充全單一ナル性質ヲ以テ吾人々類ノ知識以外ノ者ト為セルカ故ニ吾人ハ只優等ナル一種ノ生靈ヲ想像シ吾人ノ感覺ニ類似シテ而モ遙ニ之ニ超勝セル妙作用ヲ以テ吾人カ形、色、等ノ性質ヲ知ルカ如クニ充全單一ノ性質ヲ直覺シ得ヘシト推想スルニ止マルノミ

語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ事物ノ本体本性ハ形、色、等ト類ヲ同ウスル者ナラント想見スルニ止マル  
ニ

[26]

然レトモ亦之ヲ難スル者アリ 曰ハク 設令單一ナルモ單一ナラサルモ可知ナルモ不可知ナル  
モ苟(いやし)クモ之ヲ性質ト云フ以上ハ必ス其従属スル所ノ主体ナカル可カラス 甘ヤ温ヤ円ヤ  
白ヤ一モ独立自存スル者ニアラサルナリ

其ノ甘キハ蜜ニ属シ其温キハ泉ニ属シ其円キハ月ニ属シ其白キハ雪ニ属ス 蜜、泉、月、雪ノ  
主体ナクシテ甘、温、円、白ノ性質アルコトナシ 然ラハ則チ充全單一ノ性質モ亦其属スヘキ主体  
ナクハアルベカラスト

此非難タルヤ一理ナキニアラサルカ如シト雖トモ未ダ以テ前説ヲ撃破スルニ足ラサルナリ  
蓋シヘルバルト氏ノ説ヲ立ツルヤ事物ノ本体或ハ本性ト云フヘキモノノ内容ヲ説明セント為シタル  
モノナリ 乃チ此説明ニシテ正ヲ得シカ最早事物ノ体性ヲ尽セリト為スモノナリ

然ルニ今之ヲ性質ナリト云フカ主体ナカル可カラスト云ハハ吾人ハ亦タ其主体ノ内容ノ何タルヤ  
ヲ討尋セサル可カラサルニ至ル

是レ事物ノ本体ノ上ニ尚ホ他ノ本体ヲ求ムルモノト云フヘキナリ 吾人ハ応ニ之レニ答ヘテ云ハ  
ン 性質ト云ヘル言辞ハ通常ノ場合ニ於テハ独立自存スルコト能ハサル者ニ用ウト雖トモ今ヘ氏  
ノ所謂充全單一ノ性質ハ既ニ独立自存スヘキ範囲内ニ於テ之ヲ説ケルモノニシテ性質ノ語ハ之  
ヲ特別ノ場合ニ転用シタルノミト 若シ之レニ反シテ充全單一ノ性質ヲ以テ常ノ如ク一種藐然(ばく  
ぜん;遠くして及ぶべからざる貌(大字典))タル性質トシテ主体ノ之ヲ採取スルニ当リテ真ノ実物ヲ  
生スルニ至ルト云フコトハ吾人ハ如何ニシテ藐然タル性質カ主体ニ従属スルニ至ルヤヲ尋ヌルコ  
トヲ要スヘシ

然レトモ之ヲ尋ヌルハ是レ造化ノ事業ヲ討タルモノニシテ哲学ノ為シ得ル所ニアラサルナリ

之レヲ要スルニ充全單一ノ性質ヲ以テ事物ノ本体本性ナリト云フハ既ニ完成セル実物ニ就キテ  
説ヲ為セルモノニシテ造化ノ事業ヲ説明セントスル者ニアラサルナリ

[27]

然レトモ吾人ハヘ氏ノ説ヲ以テ未タ完全ナリト為ス能ハサル者アリ 何ソヤ 他ナシ 充全單一ノ  
事情是ナリ

夫レ吾人カ哲学ノ目的ハ宇宙ノ万化ヲ説明セントスルニアリ 吾人カ事物ノ本体本性ヲ尋ヌルモ  
万有ニ変化アリ変化ニ規律アルヲ以テナリ

乃チ万化ニ亘リテ不動ナル者之ヲ事物ノ本体本性トナシ個々ノ事変ニ当リテ転遷無住ナル者之  
ヲ事物ノ形様ト為セルナリ 故ニ事物ノ本体ヲ説明シテ其正ヲ得ル者ハ其能ク形様ヲ具有スル所  
以ヲ解説セサルヘカラス

是レ單一ナル性質ノ為シ能ハサル所ナリ今之ヲ弁明セントスルニ先ツ複雑ナル事物ノ変化ニ就  
テ觀察セン 複雑ナル事物中ノ変化ハ三様ノ場合ノ考ウヘキアリ

第一ノ場合ハ(イ)(ロ)(ハ)ノ元素ノ結合ハ変化スルコトナク之ニ(ニ)ノ加ハハル時ハ甲トナリ  
(ホ)ノ加ハハルトキハ乙トナルカ如キ者ト云ヒ

第二ノ場合ハ(イ)(ロ)(ハ)ノ元素其結合ノ有様ヲ異ニシ或ハ(イ)(ロ)(ハ)ノ結合トナリ或ハ(ハ)  
(イ)(ロ)ノ結合トナル者ヲ云ヒ

第三ノ場合ハ(イ)(ロ)(ハ)ノ元素中各多少ノ変化(増減ヲ以テ考ヘテ可ナリ)アル者ヲ云フ  
此等ノ場合ニ於テハ(イ)(ロ)(ハ)ノ元素ハ常ニ本体トナリ或ハ他元素ノ之ト合離スルカ或ハ諸元素  
其ノ結合ノ有様ヲ異ニスルカ或ハ各元素ノ内部ニ変化アルニ従フテ複雑物ニ種々ノ形様ヲ生スル  
者ナルコト決シテ見難キコトニアラス 乃チ複雑物ニアリテハ各々変異ノ形様ト諸形様貫通ノ本体  
トヲ解説スルコト決シテ困難ノコトニアラサルナリ

然ルニ単一ナル性質ニ至リテハ吾人ハ最早以上ノ如キ分解ヲ用キテ変化ヲ説明スル能ハス  
単一ナル者ノ甲ヨリ乙ニ移ルコトアラシカ其全体ヲ挙ケテ転行セサルヲ得ス

即チ甲乙二者ノ間ニハ毫モ貫通ノ元素ナク甲ナル一旧物滅却シテ乙ナル一新物生起スル者ト云ハサルヲ得ズ 然レトモ旧物滅却シテ新物生起スルハ全ク独立ノ働キニシテ互ニ關係ナキモノナリ 何ントナレハ旧物ノ甲滅却シタル後ニ起ル新物ハ乙ナルモ丙ナルモ丁ナルモ不可ナケレバナリ 果シテ然ラハ新旧ノ二者ハ一本体ノ変化ニアラスシテ二本体ノ出沒相偶合シタル者ト云ハサルヲ得ズ

乃チ単一ナル性質ハ万物變化ノ説明スル能ハザルミナラス却テ之ヲ滅却スル者ト云ハサルヲ得ス

#### [28]

尚ホ之ニ答ウル者アリ 曰ハク 前段ノ所論ハ単一ナル性質ノ変化ハ其諸般ノ形様ヲ以テ各独立ノ本体ト為ササルヲ得ズ 從フテ諸形様ヲ貫通セル元素ヲ欠乏スルヲ以テ真正ノ変化ニアラサルコトヲ示スト雖トモ是レ未タ皮相ノ見解タルヲ免カレズ 単一ナル性質ハ其変化ニ当リテハ全体ヲ挙ゲテ転行セサルヲ得ズト云フハ誤レリ 看ヨ 彼感覺ニ就キテ見ヨ 一個ノ純粹ナル赤色ヨリ同シク純粹ナル一個ノ黄色ニ転眼スルニ当リテ吾人ハ只全ク相異ナレル二色ヲ感ズルノミト云フヘシ 然レトモ細ニ之ヲ省察スレハ其間ニ貫通ノ元素アルヲ知ル 色ト稱スル事實是ナリ

蓋(けだし)色ナル元素ハ赤ト黄トヲ離レテ別ニ存スルニアラス 亦赤ヨリ黄ニ移レルニモアラス然レトモ赤ト黄トノ感覺中ニ於テ感得シタルニアラサレハ決シテ色ト云ヘル抽象的思想ヲ生スルニ至ラサルヘシ 今単一ナル性質ノ変化中ニ於テ旧物滅シテ新物生スルノ時ニアリテモ其滅生ノ間ニ於テ二者貫通ノ本体ハ必ス存スルヤ疑フ可カラス 吾人カ之ヲ思考スル能ハサル猶ホ赤黄ノ感覺ノ外ニ単二色ノ感覺ヲ得ル能ハサルカ如キノミト

#### [29]

此説ノ無稽(でたらめ)ナルコト容易ニ開説シ得ヘシ 然レトモ之ヲ為スニ先チ一言スヘキコトアリ 論者ノ挙ケタル所ニヨルニ赤、黄ノ感覺中ニ色ト云ヘル貫通ノ一事アリ 然レトモ此ノ如キ貫通ノ事情ハ其範圍無涯ナル者ニアラス

他語以テ之ヲ言ヘバ吾人ハ赤、黄、等ノ感覺中ニハ貫通セル色ト云ヘル事情ヲ得ルト雖トモ赤ト黄トノ感覺ノ間ニハ最早此ノ如キ貫通ノ事情ヲ得ル能ハズ

然ラハ色ト云ヘルカ如キ貫通ノ事情ハ一定区域内ニ往來スル者ト云ハサルヲ得ス 此事タルヤ啻ニ感覺ノミ存スル者ニアラスシテ事物万般ノ変化ニ亘リテ存スル者ナリ 乃チ事物ノ変化スルヤ必ス一定ノ範圍内ニ変化スルヲ得ルモノニシテ無際無涯ノ変化ハ之アルコトナシ

所謂事物ノ変化ニ一定ノ規律アリト云フハ此範圍限界アルコトヲ指示スル者ナリ 此事タル変化ヲ論ズルノ一要点ナルヲ以テ色ノ例ニ仮リテ爰ニ之ヲ陳フルニ過キズ

#### [30]

扱(さて)事物ノ変化ト感覺ノ変化ハ果シテ同類ノ者ニシテ色ノ赤黄ニ貫通スルヲ提出シ来リテ単一性質ノ変化ニ貫通ノ元素アルコトヲ論シタルハ如何ナル誤謬ニ基ケルヤ

他ナシ 赤、黄、等ノ変化ハ精神作用ノ移動ニシテ之ヲ以テ喩説セントシタル変化ハ実物中ノ変化ナリ

赤ハ常ニ赤、黄ハ常ニ黄タルニ当リテ吾人ノ精神前ニハ赤ニ向ヒ次ニ黄ニ向ヒタル是レ論者ノ提出セシ所ノ変化ナリ

吾人説明ヲ求メタルハ実物ノ甲ヨリ乙ニ移リ乙ヨリ丙ニ移ル等ノ場合ニシテ甲ノ存スル時ハ乙丙ナク乙ノ存スル時ハ甲丙アルコトナクシテ一現在時ニアリテハ甲、乙、丙、丁、等ノ其一存スルミナル変化ニアリタリ

或ハ之ヲ称シテ同時貫通、異時貫通ノ事実ト云フヘク乃チ色ノ赤、黄、等ニ通ズルハ同一時ニ之アリ 本体ノ甲、乙、等ニ通ズルハ前後時ヲ異ニセザレハ之アル能ハザルヲ云フ

然ラハ則チ赤、黄、等ノ感覺ニ貫通ノ元素アルヲ以テ実物変化中ノ本体ノコトヲ例証セントスルハ其当ヲ失シタルヤ明ケシ

[31]

単一ナル性質ノ変化ノ事実ヲ説明スルコト能ハザルコト略之ヲ論定シ得タリ 然ラハ事物ノ本体ハ如何ニ思考スヘキヤ

此解釈ハ最早諸子ノ推想シ得ル所ナラン 然リト雖トモ今一箇ノ重要ナル義問ヲ検定シテ本解ニ論及セン ヘルバルト氏ハ事物ノ本体ヲ尋ネテ単一ナル性質ナリトナシ単一ナル性質ニハ各々自保ノ作用アリテ毫モ變転スルコトナシト為セリ

語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘバ事物ノ本体タル元素ハ其体変化アルコトナク只諸元素結合ノ不同ニヨリテ万種ノ変化ヲ現出スルニ至ルト云フ 是レ正ニ氏ノ理学者社会ニ声価ヲ博シタル所以ノ論說タリ

此說タル単ニ現象世界ヲ取りテ其根底ヲ探ラサル理科学ニアリテハ或ハ不可ナカラント雖トモ現象ナル者ハ抑如何ニシテ生起スル者ナルヤヲ尋ヌル哲学ニアリテハ大ニ然ラス ヘルバルト氏モ自ラ其心理学ニ於テハ亦別解ヲ施セリ

而シテ其說ク所ハ正ニ吾人ノ求ムル所ニ応合シテ全ク前說ヲ排撃スルニ至ル 蓋シ現象世界ハ変化極マリナキハ動かサ可カラサル事実ナリ 而シテ此ノ如キ変化ハ決シテ事物ノ本体然ルニアラザルモ然レトモ既ニ此現象アレハ亦其説明ヲ施ササル可ラズ 之ヲ施サント欲セバ吾人ハ精神(靈魂ト言フモ妨ケナシ)ノ本体ハ此現象ノ由テ生ズヘキ主体タルコトヲ知ル

他ノ事物ノ本体ノ自保ノ作用ハ吾人ノ決シテ知ル能ハサル所ナリ 然レトモ靈魂ノ自保作用ハ吾人ノ自ラ実験スル所ニシテ毫モ疑フヘキモノニアラス

而シテ其自保作用ノ最單純ナル者ヲ一箇ノ感覺ト為ス 然ルニ感覺ナル者ハ吾人ノ熟知スルカ如ク其類甚タ多クシテ外来万差ノ刺戟ニ応シテ一々其様ヲ異ニスル者ナリト云フモ不可ナルコトナシ

「エーテル」ノ顫(せん)動其刺戟タルトキハ之ニ応シテ一種ノ色感覺ヲ生シ空氣ノ振動其刺戟タルトキハ之ニ応シテ一種ノ音感覺ヲ生シ其他香氣ノ感覺温度ノ感覺柔軟ノ感覺等皆悉ク精神ノ自保作用ニ外ナラス

而シテ此等異様ノ自保作用ハ精神本体不變ニシテ生起シ得ヘキモノニアラス外来刺戟ノ性質ト形状トニ応シテ其性質ト形状トヲ異ニスル者ニシテ

外来ノ衝動ニ對スル精神ノ反動ト云フ可キノミ 然ラハ則チ精神ノ本体ハ一個ノ可變的實在ニシテ異様ノ刺戟ニ応シテ異様ノ性質ヲ有スル者ト云ハサル可カラサルナリ

更ニ形式ヲ用テ之ヲ説明センニ

(イ)ノ刺戟ニハ(イ)ノ自保作用アリ(ロ)ノ刺戟ニハ(ロ)ノ自保作用アリトセハ

(イ)(ロ)ノニ時ニアリテ精神ノ自体ハ異様ノ感動ヲ有シ異様ノ性質ヲ有ス

ト云ハサルヲ得ス 果シテ然ラハ吾人ハ直ニ之ヲ知覺スル能ハズト雖トモ今其直覺シ得ル者ヨリ推及シテ之ヲ論セハ万物ノ本体ハ精神ト同シク變化スル者ニシテヘ氏ノ說ケルカ如キ不變不動ノ元素ニアラサル者ナリト断言スヘキナリ

然ラハ則チ万有變化中ニ於テ毫モ常一不變ナル者ナキカ

曰ハク 然ラス 万物ノ本体ハ變化スト雖トモ其属性ハ一定ニシテ變異アルコトナシ 乃チ万物ノ本体ヨリ顯ハルル各々ノ自保作用ハ確一不動ニシテ變転スルコトナシ

形式ヲ以テ之ヲ表ハサバ

(イ)ノ刺戟ニ應スル自保作用ハ常ニ必ス(イ)ニシテ決シテ(ロ)或ハ(ハ)トナルコトナク

(ロ)ノ刺戟ニ應スル自保作用ハ常ニ必ス(ロ)ニシテ決シテ(イ)或ハ(ハ)トナルコトナシ

故ニ万物ハ或ハ此属性ヲ取り或ハ彼ノ属性ヲ取り其本体ハ変化断(た)エスト雖トモ一定ノ刺戟ニ応シテ常ニ必ス一定ノ自保作用アリテ其属性ハ決シテ変転スルコトナキ者ナリ

### 〔第三節〕 実有及実体

[32]

変化ノ説明ヲ求メント欲シテ事物ノ本体ヲ尋ネ単一不変ノ性質ニアリト云ヘル説ヲ取り之ヲ考定シ終ニ其ノ説ノ当ヲ得サルコトヲ論定スルニ及ヒタリ

故ニ吾人ハ更ニ方向ヲ転シテ他ニ事物ノ本体ノ何タルヲ尋究セサル可カラサルニ至ル  
通常ノ事物ニ就而其何タルヤヲ問フ者アラハ二種ノ応答ヲ為スコトヲ得ヘシ

人工ヲ以テ製作シタル物品ハ必ス其目的ヲ有スルカ故ニ吾人ハ此等ノ事物ノ説明ヲ与ルニ当リテハ其目的ヲ標挙シテ足レリトナシ而シテ其目的ヲ達スル諸種ノ形様ノ如キハ措テ論ゼサル所トス

然ルニ天然ノ事物ニ至リテハ其目的ノ知リ難キ者多キヲ以テ吾人ハ其事物ノ或ハ自カラ發達シ或ハ外圍ノ事情ニ応シテ發生スヘキ現象ノ種類ト順序トヲ列挙シテ以テ其何タルヤノ疑問ニ応答スルモノナリ

要スルニ此二種ノ場合ニ於テハ共ニ其進達ノ性質ト状様トヲ以テ天然物ノ本体ヲ顯ハス者トス之ニ反スル説明ノ法ニアリテハ事物ヲ構成セル諸元素ヲ挙テ以テ其本体トナシ而シテ諸元素ノ結合ヨリ起ル事物ノ動作ノ如キハ毫モ之ヲ省ミルコトナシ

然レトモ此方法タル複雑ナル事物ヲ解約シテ単一ナル元素ヲ求ムルノ場合ニアリテハ其用ヲ為スト雖トモ若シ最単一ナル事物即チ諸般元素ノ説明ヲ為サントスルニ当リテハ毫モ其効ナキニ至ル

例ヘハ水銀ハ何物ナリヤト問ハハ吾人ハ之ヲ解剖シテ他ノ元素ニ歸スル能ハス 將ニ其動作ニ就テ通常ノ温度ニアリテハ流動体トナリ熱度甚タ減スレハ固形体トナリ熱度甚タ熾ナルトキハ蒸気体トナル者ナリト答ヘサルヲ得ス

果シテ然ラバ事物ノ本体ハ一種ノ言説スヘカラサル一ニシテ或ル事情ニ遇ヘハ甲トナリ他ノ事情ニ遇ヘハ乙トナリ尚他ノ事情ニ遇ヘハ丙トナル者ナリト云ハサルヲ得ス

而シテ斯ノ如キ説明ヲ下ス時ニアリテハ若シ以上三種ノ事情ニシテ逆起スルコトアルトキハ丙ヨリ乙トナリ乙ヨリ甲トナリ決シテ子丑寅ト輾轉スル者ニアラサルコトヲ預定スル者タリ

然ラハ則チ吾人カ取テ以テ事實ノ本体本性ト為ス所ハ其変化ノ定規定則アルコトヲ指ス者ト云フヘキナリ 而シテ其変化ハ自發他誘等ノ別ナク常ニ一定ノ範圍内ニアルモノニシテ決シテ漫然乱化スルモノニアラズ

[33]

事物ノ本体ハ其進達ノ定規定則アルニアリト云ハハ吾人ハ之ヲ以テ知覺ノ物体ナリト云ハズシテ論理的ノ概念アリト云ハサルヲ得ス

果シテ然ラハ事物ノ何タルヲ説明セント欲セハ単ニ其現前ノ諸性質ヲ審定スルノミナラズ現前ノ諸性質ハ如何ナル既往ノ性質ヨリ起リ又将来如何ナル性質ヲ發スヘキヤヲ考査スルヲ要ス

然シテ此事タル論理ノ止ムヲ得サルニ出ツト雖モ實際ノ場合ニアツテハ事物ノ現前ノ性質ダモ查尽スルコトハ吾人ノ能シ得ル所ニアラス 況ンヤ其前後ノ關係ヲ尽スニ於テオヤ

吾人ハ只吾人研究ノ行程ニ於テ常ニ此ノ事ヲ以テ根基トシテ益進シテ事物ノ真底ヲ探リ其無限相續ノ間ニ於テ百般ノ事情ト千差ノ他物ト終極ノ目的トニ關係シテ一事物ノ變状ト發生トヲ審スヘキヲ知ル

[34]

事物ノ本体ノ充全ナル概念ヲ得ルコト寔(まこと)ニ難シ 然レトモ若シ一旦之ヲ得ルニ至ラハ其物ノ変化スル百般ノ形状ハ皆悉ク其本体ノ性質ヨリ生セサルヲ得サル者ナルコトヲ知ルニ至ルヘシ 然ルニ尚ホ説ヲ為ス者アリ

曰ク 仮令此ノ如キ充全ノ概念ヲ得ルニ至ルモ是只其物ノ本体ヲ充全ニ想像シ得タルニ過キス 未タ其物ノ実体ニ達セス 乃チ吾人ハ吾人ノ思想内ニ於テ事物ノ本体ハ斯々ナリト知り尽シ得タルモ未タ此思想ヲシテ実物界中ニ其位ヲ得セシムル能ハス 然ラハ則チ此ノ如キ觀念ハ其依テ属スヘキ実体実質ナカルヘカラス

故ニ吾人ハ必ズ純乎単一ナル一種ノ実体ナル者アリ 此物ニ限ラス彼物ニ係ハラズ宇内ノ万物ヲシテ皆同シク実有ナラシムル本真ノ一体ナカルヘカラスト論結スベシト

[35]

單純実体ノ説タル哲学史ヲ繙ク者ノ常ニ遭遇スル所ニシテ其説亦甚多様ナルヲ知ル所タリ 然レトモ今一々之ヲ論評スルノ暇ナシ 將ニ直ニ其説全体ノ取ルニ足ラサルコトヲ証明セン

蓋シ此説タル平常実験ノ事物間ニ現ハルル者ヲ取テ之ヲ形而上純正哲学上ノ問題ニ応用シタル者ト云フ可シ 其当ヲ得サルヤ殆ント言ヲ待タズ

固ヨリ吾人カ通常知覚スル所ノ諸物ニ於テハ種々ノ物質吾人ノ手エト吾人ノ意匠トニ応シテ数多ノ形状ヲ得ルアリ 或ハ天地ノ化育ニヨリテ雑多ノ現象ヲ呈スルアリ

然リ而シテ此ノ如キ時ニ當リテ吾人ハ屢未形ノ物質ヨリ定形ノ品物ノ生スルカ如ク思考スト雖モ是レ一個ノ謬見ト云フヘシ 此ノ如キ場合ニ於テ其原初ノ物質ハ只比較的ニ未形ナルノミニシテ純乎タル未形物ニアラス 木材ノ机案ニ於ケル木材ハ机案ニ比スルニ其定形ヲ有スルノ少キノミ

木材全ク未形ナルニアラス 之ヲ要スルニ新物ニ転シ新形ヲ得ル所ノ者ハ其元体各確定セル性質ヲ有シ之ニ由テ以テ外圍ノ事情ニ応動スルコトヲ得ル者ナリ 彼ノ古來屢引証サルル蠟ノ如キ其印象ヲ受持スルコトヲ得ルハ其体一種固有ノ性質アルニヨルモノナリ

然ラハ則チ事物ノ実体即チ自ラ一定ノ性質ナクシテ単ニ他ノ性質ヲ受持スヘキ元体ニ達セントスルハ大ニ惑ヘル者ト云ハサルヲ得ス 何ントナレハ若シ実体ニシテ全ク無性質ナラシカ

其甲事情ノ為ニ感動サルルノ理由ナク又甲事情ニノミ感動セラレテ乙事情ノ為ニ感動セラレサルノ理由ナケレハナリ

乃チ無性質ノ実体ハ一定ノ状態(イ)ヲ得ルニ至ル能ハズ

又此状態ノミヲ得テ他ノ状態(ロ)ヲ得サルノ理由ナケレハナリ

而シテ宇内ノ万有ニ一定ノ規律法則アル所以ハ一ニ実体ノ彼ノ形状ヲ受クルモ此ノ形状ヲ受ケズ 此ノ形状ヲ受クルモ彼ノ形状ヲ受クルモ 此ノ形状ヲ受クルモ彼ノ形状ヲ受ケサルニ由ル者ナリ

[36]

然ラハ則チ事物ノ実体トハ其物別ニ一体アリト云フコトヲ得サルナリ 一体アリト云フヲ得ズンハ則チ所謂ル実体ナル者ハ吾人カ思想内ニアル者ト実有界ニアル者トヲ判別スルノ表徴ニシテ吾人カ諸般ノ性質ヲ以テ此ハ是レ単ニ吾人ノ思想スルノミナラス實ニ存在スル者ナリト認定スルコトノ外アルコトナシ

然トモ此ノ如キ認定ハ吾人ノ思想ノミ能ク之ヲ為シ得ル者ニシテ之ヲ以テ一個ノ物体ナリトナサントスルハ其誤レルヤ明ナリ

況ンヤ諸般ノ性質モ亦吾人ノ思想ヨリ出ツル者ナレハ之ヲ以テ獨立ニ存在シ能ハストナシ思想上ノ認定ヲ待テ初メテ真個ノ実物タルコトヲ得ト云フニ於テオヤ

然リ而シテ実体ノ説ヲ為セル者ハ此ノ説明ヲダモ全評セスシテ諸物ヲシテ実有ナラシムル原理ト実体其物トヲ甄別(けんべつ)セントセリ 故ニ事物ノ其形ヲ變スルヲ見ルモ認定ノ一内容ヨリ他内容ニ移ルノミニアラズシテ其變移セル前後ノ二形ニ互リテ継存シ二形ヲ以テ其外形トナシ二形ノ

前後相續スル所以ハ全ク其ノ性質ヨリ起ルヘキ実体アリトナセルナリ

然レトモ此ノ如キ思考ハ全ク純一未形ノ実体ト云フ可カラス 否全ク之ニ矛盾スル者ト云ハサルヲ得ズ

[37]

此ニ由テ之ヲ觀レハ純虚(虚ではなく乎か。筆録者の間違いと思われる。)実体ノ説タル吾人ハ之ヲ以テ一個ノ謬見ト為ササルヲ得ザルナリ

蓋吾人ハ吾人ノ嘗テ發セル問題ヲ省察スヘシ 吾人ハ事物ナル者アリト假定シテ其事物タル所以ヲ研究セント為シタルナリ 而シテ事物ノ事物タル所以ハ其能ク變化スルニアリトス 然ラハ則チ吾人ノ討究スヘキ問題ハ事物ノ變化スヘキ根基ハ那邊ニアルヤヲ尋ヌルニ過キサリシナリ 是レ決シテ一個ノ実体ヲ立テタルニヨリテ説明シ得ラルル者ニアラス

要スルニ吾人ハ事物ノ能ク變化スルヲ以テ其实有ナルコトヲ知ル者ナリ 故ニ実有トハ事物ヲ形容スルノ言思ニシテ決シテ其体アリト云フニアラス 吾人ノ將ニ推究スヘキハ実有ノ形状即チ事物變化ノ規律ヲ求ムルニアリトス

事物ノ実有ナル形状即チ變化ノ規律ヲ以テ事物ノ事物タル所以ナリト云ハハ如何ニシテ吾人ハ此ノ如キ規律ヲ認定シ以テ実有ナリトスルニ至ルヤ

凡ソ規律ナル者ハ一定ノ事情ヨリ一定ノ結果ヲ生スルコトヲ云フニアラスヤ 然レトモ此ノ如キ規律ハ常ニ全般ノ事實ニ就テ云フ者ニシテ其行ハルル個々ノ場合ト数多事情ノ一々ノ価値トハ決シテ規律中ニ現存スル者ニアラス

仮令現存ストスルモ只斯クアリ得ヘシト云ヘル考ノミニテ其事實ノ存在スルニアラサルナリ 果シテ然ラハ如何ニ思考スルモ吾人ハ之ヲ認定シテ実有ノ事物ナリト為ス能ハサルヘシ

是レ通常吾人カ思考スル所ノ規律ノ性質ナリ 然レトモ今吾人ガ説キテ以テ事物其物ナリト為ス所ノ規律ハ此ノ如キ意義ノ者ヲ云フニアラス

所謂ノ規律ハ数多ノ場合ヲ含蓄シ之ニ概通スル規則ニアラスシテ此ノ如キ規律ノ個々ノ場合ニ応合セル者ヲ指ス者ナリ 乃チ吾人ノ云フ所ハ概通ノ規律ニアラズシテ個々ノ規律ニアリ

乞フ少シク之ヲ説明セン

[38]

事物ノ実体ト稱スヘキ者真ニ之アリセハ彼ノ蠟ノ如ク一種ノ定性ヲ具セサル可ラズ 若シ一モ定性ト云フヘキ者ナク只諸他ノ性質ヲ受納スルノミナリト云ハハ其何故ニ甲ノ性質ヲ受納シ乙ノ性質ヲ排除スルノ理由ナク随テ宇宙間ノ變化ニ井然タル秩序ノ存スルコトヲ説明シ能ハサラシム

故ニ此ノ如キ実体ハ全ク価値ナキモノナリト云ハサル可カラス 果シテ然ラハ実体ナル者ハ毫モ之ナキヤ 曰ク 否单独孤立未形無性ノ実体ハ之ナシト雖トモ元始ヨリ確然極定セル形性ト合結シテ嘗テ離レサル所ノ実体ハ之アルナリ 乃チ吾人カ事物ヲ認メテ実ナリト為ス時ニ知ラルルモノナリ

是レ一物ノ變異スルニ当リテ或ル一種ノ形ト性トヲ棄テテ他ノ一種ノ形ト性トヲ撰取スルノ根底タルモノニシテ實ニ變化ヲ引起スルノ原基ナリ

[39]

此ニ由テ之ヲ觀レハ单独孤立ノ実体ト云ヘル思想ハ哲学界中古来ノ一大謬説ナリト見サルヲ得ス 尚一層此謬説ノ謬点ヲ顯著ナラシメンカ為ニ一例論ヲ掲陳セン

色素ナル者アリ無色(或ハ白色)ノ元素ト結合スルトキハ其混合体ヲシテ一定ノ色ヲ有セシム

一器ノ水ニ若干量ノ紅粉ヲ投セバ器水赤色ヲ帶ス 是レ或ハ実体ノ諸性ニ附着シテ以テ之等ヲ実有ナラシムルニ喩フヘキ乎

曰ク 否 彼ノ色素ノ混合体ヲ染色スルカ如キハ一外觀ニ過キス其内状ヲ檢セハ水分子ハ決シ

テ変色スルコトナク色素ハ決シテ其元体ヲ没シテ水分子ニ化着シタルニアラス 水分子ハ依然トシ水分子ニシテ原色ヲ保有シ色素ハ依然タル色素ニシテ其原体ヲ失ハス 然ルニ今之ヲ以テ喩解セント欲スル実体ノ説ハ諸性ト実体ト相依リテ唯一体ヲ為シ諸性之ニ依リテ始メテ実有トナルモノニシテ全ク論統ヲ異ニスル者タルナリ

語ヲ換ヘテ之ヲ云ハハ色素ト水分子トハ二者並立共存ノ物体ニシテ実体ト諸性トノ恰モ主伴ノ關係アルカ如キニアラサルナリ

[40]

事物ノ実体ヲ以テ一種ノ独立ナルモノトナセル考ハ終ニ已上數段ニ於テ論スル所ノ論極ニ到達セリ 轉シテ事物ノ真狀ヲ考察スレハソノ実有ナル所以ハ実体ト稱スルー物アルカ為ニアラザルヲ知ル

実有トハ事物存在ノ吾人ノ認知内ニ入り来ル形状ヲ陳ブルニ過ギズ 乃チ事物ノ遷化流行スル間ニ於テ齊整規律アリ 首尾契合シテ統紀ヲ乱サザルヲ名ケテ実有ナリト稱スルナリ

強テ之ヲ名ケテ実体ト云ハハ実体トハ事物變化ノ理法也ト云ハサルヲ得ズ

然レトモ凡テ理法ト稱スル者ハ數多ノ事例ニ普閱遍通スル規則ヲ指スヲ以テ常トスルカ故ニ今事物ノ実体ヲ理法ナリト云フモ亦自ラ同一ノ考ヲ生スベシ

然ルニ理法ナルモノハ強テ普閱遍通ヲ要トスルニアラズ一箇例ニ就テ之ヲ云フモ理法タルノ所以ヲ失ハサルナリ 人ハ死スル者ナリト云フ理法ハ人類全班ニ関シ通スルコトナリト雖トモ今一箇例ニ取りテ余ハ死スル者ナリト云フモ人ハ死スル者ト云フ理法ノ理法タル要点ハ毫モ欠損スルコトナキナリ 當此ニ止マラズ通常説ク所ノ普閱遍通ノ理法ハ個々ノ事例アリテ後生スル者ニシテ其前ニアルモノニアラス

亦個々ノ事例ニ於テ真ニ存スルノミニシテ其外ニ存スルモノニアラス 故ニ今茲ニ事物ノ実体ヲ理法ト云フハ個々特殊ノ理法ヲ指スモノト知ル可シ

語ヲ易ヘテ之ヲ云ハハ真ニ存在スルモノハ個々特殊ノ理法ニシテ普閱遍通ノ理法ハ畢竟吾人ノ思想上ノモノ即チ実存セサル者ナリ

然ルヲ古來ノ大家ニ在リテモ屢々此点ヲ誤リ普閱理法ヲ以テ獨立実存スル者ト為セシノミナラス又個々特殊ノ事物ハ普閱理法ノ摸像ニ過ギズト云ヘルモノアリ 理想論實體論ノ分カルル此点ニアリ

讀者此節ノ所説ヲ追跡考究セバ理想ハ実体ヲ離レテ存スル者ニアラス 當ニ実体内ニ流行活動スルモノナルコトヲ瞭知スルニ至ルヘシ

蓋シ吾人ハ実体ノ何タルヲ推究セント欲セハ事物ノ存在ト運行トヲ稽查シテ其適當ニシテ錯乱ナキ所ニ理法ノ行ハルルコトヲ發見セサル可カラズ

#### 〔第四節〕 變轉ニ化

[41]

凡百ノ事物中ニ於テ統紀アリテ乱レサル理法ノ流行スルモノ即チ事物ノ実体ナルコトハ前章ノ結論ナリ 而シテ理法ノ流行トハ万物ノ動轉中ニ於テ規律ノ存スルコトヲ云フ者ナリ

然ラハ即チ吾人ノ茲ニ討尋スヘキハ所謂動轉ノ何タルヲ求ムルニアリ 變轉ニ化ハ此動轉ニ名クルノ辭ナリ 通常變化トハ一物ノ其形相ヲ變ヘテ現ハルルモノヲ云ヒ轉化トハ一物消却シテ他物ト現出スルヲ云フ

[42]

既ニ述タル如ク變化トハ一物其形相ヲ變改シテ現ハルルモノヲ云フヲ以テ通常ノ見解ハ一物ノ

上ニ形相ト体性ヲ判別シ形相ノミ変シテ体性ハ変セズト思考ス 然レトモ吾人ハ嘗テ変化ヲ論ジテ通常ノ見解ノ誤謬ヲ摘指シタリ(本論三十七頁)然ラハ事物ノ変化中ニアリテ実体ハ不斷繼續ストハ説クヘカラス

更ニ一例ヲ挙クルニ卵子變化シテ雛鳥トナルヲ見ル可シ 卵子ノ卵子トシテ実ナル間ハ雛鳥実存セズ 既ニ雛鳥実現セハ卵子ハ最早実在セズ 然ラハ新体ノ実ナルニハ旧体ノ実ナルヲ排除シテ相容レサルモノナリ

他語ヲ以テ云ヘハ一実体消却シテ他実体現出スルモノナリ 此動ハ是レ純然タル轉化ト云ハサルヲ得ズ 因ニ記スベシ轉化ハ実事實物界ノ特性ニシテ其思想界ニ異ナル要点ナルコトヲ 思想界ニアリテ一思念ヨリ他ノ思念ノ生スルコトヲ説クモ其両思念共立並存スルコトヲ得ルモノニシテ人類ハ結社動物ナリトノ思念ヨリ故ニ人類ハ政治法律ヲ要ストノ思念ヲ生スルカ如キ結社動物タルト政治法律ヲ要ストノ思念ハ共立並存スルカ如シ 然シテ実物界中ニ在テ卵子ヨリ雛鶏ヲ生スルト云フニ当リテ卵子雛鶏ノ両立セサル前ニ述フルカ如シ

[43]

扱(さて)此ノ如キ轉化ハ其実如何ナルコトナルヤ 其階次ヲ分解スルモ更ニ他ノ轉化ニ歸セサルヲ得ズ 強テ之ヲ積シテ轉化ハ實在ト無在ト一致ナリト云フモ所謂一致ノ何タルヲ説明セハ即チ二事契合ノ一致ニアラズシテ一事物ヨリ他事物ヘ轉移スルノ一致ナリト云ハサルヲ得サルヲ以テ解釈中亦解釈セント欲スル轉化ノ要点ヲ包含スルニ至ル

蓋轉化ノ何タルハ吾人ノ構想シ得ル所ニアラズ只實際ヲ觀察シテ其深相ヲ了知スヘキノミ

[44]

然ルニ反論ヲ為スモノハ曰ク事物ノ實ニ存在スルハ均同ノ理法(均同ノ理法トハ論理学上ノ一大理法ニシテ各事物ハ各事物タルノ自性ヲ維持シテ相違セサルヲ陳スルモノナリ)ニヨリテ然リ然ラハ苟モ実存スル事物ハ毫モ其自性ヲ變改スルコトナカルヘク随テ万物ニ轉化アリトスルハ謬迷ナリト 是レ一応駁弁セサル可カラス

抑均同ノ理法ハ事物ノ變不變ニ關スル者ニアラズ 事物ノ不變ナルトキニハ勿論其變化スルトキニアリテモ均同ノ理法ハ毫モ欠損アルコトナシ 前例ニ就テ論セハ卵子ハ卵子タル間乃チ其實存スル間ハ自性ヲ保持シテ相違セサルナリ 雛鳥ハ雛鳥タル間乃チ其實存スル間ハ自性ヲ保持シテ相違セサルナリ

[45]

果シテ然ラハ事物ノ變轉ハ其外形ノ移易ノミニアラズシテ其体性ニ徹到スルモノ即チ不動凝然タル同一本体ノ變易スルニアラズト断言スベキナリ 然リ而シテ茲ニ吾人ノ注意スベキ陥穽アリ

事物ノ變化ニ於テ不動ノ骨髓ナシトセハ其動轉濫起濫伏シテ底止スル所ナキカ

決シテ然ラス嘗テ屢提説シタル如ク宇宙ノ萬化ハ井然タル秩序アリ 画然タル区界アルモノナリ 是レ轉化ノ細解ヲ要スル所以ナリ

[46]

アリストートル氏ハ万物ノ動轉ヲ解釋スルニ顯在(或ハ現存)ト隱在(或ハ伏存)ノ二者ヲ以テセリ 乃チ一物ノ顯スルヤ他物ヲ生起スルヘキ性能ヲ具有ス 即チ他物隱在ス

例ヘハ甲ノ顯在ハ乙ノ隱在ニシテ丙ノ顯在ハ丁ノ隱在タリ

故ニ甲ハ乙ニ轉スルモ丁ニ轉スル能ハス 丙ハ丁ニ轉スルモ乙ニ轉スル能ハス

之ヲ逆推スレハ乙ノ顯在ハ嘗テ甲ノ顯在セシヲ証シ丁ノ顯在ハ丙ノ嘗テ顯在セシヲ証ス

是レ轉化ニ限界アル所以ニシテ一物ノ存在スルヤ必ス其然ルヘキ自由アリシヲ証シ又同時ニ他物ノ現出スヘキヲ表スルナリトス 是レアリストートル氏ノ顯隱二在ヲ説ク所以ナリ

然レトモ此説未ダ充全ト云フ可カラス 蓋吾人ハ二種ノ事件ヲ尋究セズンバ此説ヲ活用スル能ハサルナリ

(一)各々ノ顕在ニハ如何ナル隱在ノ具スルヤヲ考究シ

(二)諸般ノ隱在ヲシテ顕在ヲタラシムル助因ハ如何ナル者ナルヤヲ考究スルコト是ナリ

此二件中ノ前者ハ千百歳(二千百歳の誤りか)後ノ今日ニアリテモ未ダ釈然タル明解ヲ得サル只後者ニ関シテハアリストートル氏既ニ例説ヲ施シ置ケリ

乃チ木石材ヲ以テ顕在トスルニ家屋ハ隱在タリ 人体ヲ以テ顕在トスルニ靈魂ハ隱在タリ

二例中木石ノ具スル隱在ヲシテ顕在ニ転セシムル者ハ人工ナリ 人体ノ具スル隱在ヲシテ顕在ヲタラシムル者ハ人体其物ナリ

然ラハ隱在ノ顕在ニ轉移スルハ外部ヨリ来レル刺衝ニヨルト内部ヨリ起レル啓発トノ二様アル者ト知ルヘキナリ第一様ノ論究ハ後段ニ譲リ茲ニハ第二様ニ就テ考究セン

[47]

内起啓発ノ摸範ハ吾人ノ思想ニアリ 乃チ思想ニ於テ理由備具スレハ結果ニ転行ス 然レトモ思想ニアリテモ理由ハ忽チ結果ヲ生スルニ至ラズ 若シ理由直ニ結果ヲ生セハ真理ハ探究セシテ自ラ明瞭ナラン 然ラハ則チ事物ノ動転ヲ単ニ思想論理ノ必然性ノミヲ以テ推測断定スヘカラサルナリ 当ニ事物ハ何故ニ此必然性ニ順応スルヤヲ討究スヘキナリ

蓋シ吾人ノ思想上ノ必然性ハ事物ノ実体実性アリテ之ヲ生シタル者ニシテ此ハ彼ニ由テ起ルレ彼ハ此ニ由テ起ルニアラサルナリ 畢竟スルニ事物ノ轉化ハ事物ノ体性ヨリ起ルモノト為ササル可カラス 果シテ然ラハ吾人ハ之カ明解ヲ生スル能ハサルトモ到底事物ノ体性ハ其後体(即チ結果)ヲ引起スルニアリトセサルヲ得ス 斯クセハ万有變化ノ説明モ得テ施サルルニ至ルナリ

[48]

事物動転ノ中ニ於テ内起啓発ニ属スルモノハ以上論スル所ノ如シトセハ之ヲ名ケテ變化ト云フモ轉化ト稱スルモ共ニ其當ヲ得サル者ナルコト知ル可シ

何ントナレハ變化ハ体性ノ繼續ヲ表スト雖トモ其前物消却セスンハ後物實在スルヲ得サレハナリ

又轉化ハ都滅新出ヲ標スト雖トモ其前物都滅シテ後物新出スルニアラズ 前物ノ前物タル後物ヲ生スルニアリト云フヲ以テ其間ニ一條ノ繼續ヲ有スレハナリ

[49]

内起啓発ノ動転ハ此ノ如ク説明シタリト雖トモ実存ノ諸物中純然タル啓発ハ殆ント希ナリ 大底外来ノ刺衝ニヨリテ動転スル者ナリ 以下此点ニ向テ事物相互ニ統制影響スル模様ヲ考究セン

一物(甲)ノ他物(乙)ノ刺衝ニヨリテ變化スルトキニアリテハ(甲)ハ(乙)アルカ為ニ一定ノ變化ヲ為ス者ニシテ(丙)(丁)等ノアルニ当リテハ又異様ノ變化ヲ呈スヘシ

然ラハ則チ(甲)ガ(乙)ノ存スルニ当リテハ其存セサルトキ或ハ他物ノ存スルトキトハ異ナリタル状態ニアリト云ハサル可カラス

語ヲ換ヘテ之ヲ言ハバ(乙)ノ為ニ(甲)ノ變化スルトキニ際シテハ(甲)ハ(乙)ノ存在ヲ覺知スルコトヲ得ルト云フベシ

更ニ換言セハ一物ノ他物ノ刺衝ニヨリテ動転スルトキニ当リテハ一物ハ他物アルコトヲ認知スル者ナリト云ハサルヲ得ズ

果シテ然ラハ是レ如何ニシテ出来得ヘキヤ 他ナシ 一物ニ自動的啓発ノ性ヲ存スルニ由ルモノナリ 然ラハ則チ一物ノ外来刺衝ニヨリテ變化スルトキニアリテモ其内起啓発トキト同一様ノ動転ヲ為スモノト知ル可キナリ

[50]

以上論スル所ニヨリテ之ヲ觀レハ事物ノ變化ハ同一性ナルモノアリテ諸相ヲ貫通シテ繼續スルニアリト云フ能ハス 乃チ一事物ノ前後相異レル状態ハ同一物ノ形相ナリトハ云フ可カラサルナリ 故ニ吾人ハ寧ロ轉化ヲ以テ宇宙万化ノ説明ヲ得タルニ幾(ちか)キ者ト為シ只其轉化ハ濫起濫滅スルモノニアラス 一定ノ限界内ニ於テ井然秩序ヲ追フテ動轉スルコトヲ忘ル可カラス

而シテ轉化ノ二種ニ就テハ其内起啓発ハ前体ノ顕在ハ後体ノ隱在ヲ具スト云フト雖トモ其隱在ナル者如何ニシテ顕在スルヤニ至リテハ是レ隱在ノ隱在タル性質ニ由ルト云フノ外知ル能ハス

又外来ノ刺衝ニヨレル轉化ニアリテハ一物(甲)ノ他物(乙)ノ存在ヲ覺知スト云フト雖トモ其如何ニシテ覺知スルヤニ至リテハ只然ラサルヲ得サルカ故ナリトスルノ外ナキナリ

## 〔第五節〕 物理的動作ノ性質

[51]

凡ソ物体ノ動作ハ原因ニヨリテ結果ヲ生起スルニアリ 而シテ所謂原因ハ常ニ数多ノ元素ヨリ成ル 然ルニ常人ハ一結果ノ性質ヲ以テ全ク或ルー元素ノ決定スル所トナシ他ノ諸元素ハ単ニ受動的状態ニアリテ一元素ノ衝動ヲ受納スルニ止マルトナス

例ヘハ水ヲ熱シテ水蒸氣ト為ストキ水蒸氣ノ生スルハ全ク熱ノ加ハルヲ以テ原因ト為シ水ハ只熱ヲ受納スルニ止マリテ毫モ自ラ働ヲ呈スルアラズト為スノ類是ナリ

然レトモ精密ニ事實ヲ察スレハ一元素ノミ其作用ヲ呈シ他元素ハ単ニ受動スルノミナリト云フト雖トモ所謂受動ハ全ク自ラノ働ナクシテ出来得ヘキコトニアラズ

蓋シ受動ハ然スルニ適シタル一定ノ性質アリテ始メテ生起シ得ルコトナリ 前例ニ就テ之ヲ見ルニ水ニ一定ノ性質アルカ故ニ熱ト共働シテ蒸氣ヲ生スト雖トモ岩石ヲ取テ之ヲ熱スルモ決シテ蒸氣ヲ得ル能ハサルナリ

換言セバ水ハ熱ト共ニ蒸氣發生ノ因情タルモノナリ

尚他例ヲ挙グレハ中毒ニ由テ人ノ死スルヤ死亡ノ原因ハ服毒ノ一事ニアリト云フト雖トモ精密ニ之ヲ論セハ身体ノ状態ト服毒ト相依テ死亡ヲ来シタルモノニシテ死亡ノ因情ハ二件ヲ併セテ始メテ備ハルモノタルナリ

要スルニ一結果ノ生スル必ス数多ノ因情相待テ而シテ後始メテ之アルモノト云ハサル可カラス

是レ理科学ニ於テハ多元素ノ相互作用ト云フコトヲ唱導スル所以ナリ

ヘルバルトモ形而上哲学ノ原理ニ於テハ一動作ノ生スル必ス数多ノ原因ニ由ルコトヲ説ケリ 實ニ確説ト云フヘキナリ 然レトモ以上説述スル所ハ未ダ以テ動作ノ説明ヲ尽セリト云フ可カラス

乞フ 更ニ一歩ヲ進メテ之ヲ精究セン

今彈藥ノ暴發ナル一現象アリトセンニ先ツ彈藥ト熱体ト二個ノ事物アリ 而シテ此二物ノ互ニ相接近スルハ之ヲ事情ト称ス

又彈藥ノ具有スル性質タル壓縮セラレ居ル膨脹性ト今新ニ起リタル受熱トハ之ヲ暴發ノ理由ト名ク

然レハ二個ノ事物(即チ原因)ト接近ノ關係(即チ事情)ト圧搾ヲ受タル膨脹性及藥質ノ受熱(即チ理由)トノ三者備具シテ而シテ始メテ暴發ト云ヘル一結果ヲ生スルモノト云フ可キナリ

語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ一結果ノ生スルニハ必ス先ツ数多ノ原因タル者アリ 其原因タル者一定ノ關係ヲ得レハ則チ爰ニ理由ト成リ既ニ理由アレハ茲ニ結果アリ 然リ而シテ一結果ノ原因タルヘキモノ数者ノ中ニ於テハ或ハ結果ニ大ナル影響ヲ及ボスモノアリ 或ハ小ナル影響ヲ及ボス者アリ 或ハ其具備スル前ニアルモノアリ後ニアルモノアリ(彼ノ激因ト称セラルルモノハ数多ノ原因中最後ニ現ハルルモノナリ)

一々特殊ノ因果ニ就テ究察セハ甚ダ有益ノ事ナレトモ純正哲学上ヨリ見レハ皆同規同類ノモノニシテ更ニ分別細論スルヲ須ヒズ

[52]

既ニ原因ノ数多ナルコトヲ知リタレトモ数多原因ハ自然ニ結果ヲ生スルモノニアラス 必スヤ事情ヲ待テ結果ニ至ルモノナリ 事情トハ他ナシ 一定ノ關係是ナリ 即チ数多ノ原因相互ニ一定ノ關係ヲ得ルヲ以テ結果ハ生スルコトヲ得ルナリ ヘルバルトハ之ヲ説テ俱在(数多ノ物同一ノ時間ニ並ヒ存在スルヲ云フ)ト云ヘリ

然レトモ精密ニ之ヲ云ヘハ所謂俱在ハ事物ノ空間中ニ於テ合一スルニアリ 即チ接合ナリト云フベシ 然ルニ此説タルヤ只事物相互動作ノ外状ヲ指摘シタルノミニシテ未ダ以テ其内実ヲ説明シタルモノト云フヘカラス 何ントナレハ吾人ハ事物ノ宇宙中ニ於テ数多同一点ニアリトスルモ尚ホ其相互ニ獨立シテ毫モ交互動作ヲ為ササルベシト思考シ得レバナリ

蓋シ事物相互動作ノ實際ハ其外状ヨリ須要ナルモノニシテ哲学ノ最モ考究ヲ要スル所タリ 然ラハ事物相互作用ノ外状ハ仮ニ俱在ニアリトスルモ吾人ハ俱在ガ如何ニシテ各事物ノ獨立ヲ破攪シテ其相互動作ニ至ラシムルヤヲ尋究スヘキナリ

[53]

動作ノ要義ヲ説明セント欲シタルモノ古来其説甚タ多シ 一種ノ説ハ之ヲ影響ノ轉移ニアリト云ヒ一個ノ自動的物体ヨリ影響ヲ發シテ他ノ受動的物体ニ及ボスニアリト云フ

是レ最モ通例ノ説ナリ 然レトモ此説ノ完全ナラサルコト容易ニ見得ヘシ 蓋シ吾人ハ影響ノ何タルヤヲ尋ヌベシ

仮ニ之ヲ以テ一ノ実物ナリトセンカ 此実物(丙)ノ一物体(甲)ヨリ發生分離シ又再ヒ他ノ物体(乙)ニ到達附着スルノ理由ヲ問ハサルヘカラス 此等ノ理由ハ取りモ直サス物体的動作ニシテ吾人カ現ニ説明ヲ求メ居ルモノタルナリ

然ラハ一動作ヲ説明セント欲シテ既ニ二動作ヲ假定スルモノナリ

更ニ实例ニ就テ之ヲ説カンニ茲ニ一個ノ湿体(甲)ヨリ自カラ乾ケルカ為ニ他ノ一無湿物体(乙)ヲシテ湿体タラシメタルトセハ(甲)(乙)二体間ニ轉移セルモノハ若干ノ水量(丙)タルヤ明ケシ

而シ水量(丙)ノ轉移ハ二物体ニ変化アラシメタル乎 然ラサル乎

若シ無變化ト云ハハ吾人ノ説明ヲ企ツル所ニアラズ

若シ變化ヲ生シタリトセンカ (甲)体ハ水量ノ去リタルカ為ニ幾何ノ變化ヲ受ケ(乙)体ハ水量ノ加リタルカ為ニ幾何ノ變化ヲ生シタルベシ

湿ヘル物体ハ屢膨脹シ且ツ剛強トナリ乾ケル物体ハ屢縮小シ且ツ脆弱トナルヲ以テ考フベシ

是レ水分子ノ物体分子間ニ侵入スルト退去スルトニヨリテ起ルモノナリ

然ルニ茲ニ水分子ノ一物体ヲ去ルニ際シテ何故ニ物体ノ分子ヲ近接變性セシムルヤ

又其他体ニ到達スルニ及ンデ何故ニ其物体分子ヲ隔離變性セシムルヤ

蓋シ水分子ガ前物体ニモ一種ノ影響ヲ与ヘ後物体ニモ亦一種ノ影響ヲ与フルニヨルト云ハサルヘカラス

果シテ然ラハ一物体ノ他物体ニ及ボス影響(水分子)ヲ説明セント欲シテ却テ二種ノ影響ヲ要スルモノナリ 若シ此等ノ影響ヲ尋討セバ更ニ多数ノ影響ヲ要スベシ 是レ毫モ説明トスルニ足ラサルナリ 吾人ハ轉移スル影響ヲ一実物(即チ水)ト假定シタリヨシ之ヲ実物ニアラサル一ノ靈体トスルモ毫モ説相ヲ變セザルコト推シテ知ル可シ

[54]

或ハ云ハン 所謂影響ハ実物ニモ靈体ニモアラス 一個ノ勢力、動作、或ハ相状ナル可シト

斯ク云ハハ其轉移ノ後如何ニシテ其到達セル所ノ物体ヲ變化スルヤノ問難ヲ避クルコトヲ得ヘ

シ 然レトモ所謂勢力ハ物体ニ属スル勢力ナルヘク所謂動作ハ物体ノ動作タルヘク所謂相状ハ物体ノ相状タルヘシ

然ラハ則チ物体ノ離レテ勢力、動作、相状ノアルヘキニアラズ 勢力、動作、相状ハ常ニ必ス物体ニ附属スヘシ 然ルヲ一物体ヲ離レ去リテ他物体ニ到リ着スト云フ

豈解シ得ヘカラサル説ナラスヤ 之ニ加ウルニ勢力、相状等ノ轉移ノ説ノ難甚タ多シ

設令(丙)ナル者(甲)体ヨリ分離シ得ルトスルモ其如何ニシテ(乙)体ニ向フヤ 是(丙)ノ離去スルニ当リテ(甲)体ノ(丙)ニ及ボセル影響ナリトセハ吾人ハ(甲)(乙)間影響ノ轉移ヲ説明セント欲シテ(甲)(丙)間影響轉移ヲ仮設スルモノナリ

又(丙)ハ(甲)ヲ離レタル後ハ(乙)(丁)(戊)等ノ何レニモ向ヒ得ヘシ 然ルニ彼時ハ(乙)ニ向ヒ此時ハ(丁)ニ向フハ何故ゾヤ

此問ニ答ヘント欲セハ吾人ハ(甲)ノ影響(丙)ヲ(乙)ニ及ボサントスルトキニハ既ニ(乙)ノ(甲)ニ影響スルアリ 故ニ(丙)ハ(丁)(戊)等ニ向ハズシテ(乙)ニ向フモノトナササルヲ得ス

然ラハ一動作ヲ説明セント欲シテ其前ニ動作ヲ要スル者タルナリ 且又(丙)ノ(甲)ヲ離レタル後(乙)ニ着スルハ何故ゾヤ 何故ニ無限ニ運行シ去ラサルヤ 蓋シ(乙)其影響ヲ(丙)ニ及ボシテ恰モ其運行ヲ阻遏スルニ由ルト云ハサル可カラス ヨシ又阻遏シ得タルモ之ヲ以テ其勢力、相状ト為スヲ得ルハ如何 尚説明ヲ要スルモノナリ

[55]

影響轉移ノ説ノ難此ノ如シ 然レトモ古来此説ノ為ニ起レル論断ハ数多ノ謬説ヲ生シタリ 彼ノ因果均同ノ説ハ其最顯著ナルモノナリ

蓋シ(丙)ノ(甲)ヲ離レテ(乙)ニ附着スルニ至ルニハ(甲)ノ(丙)ヲ保有シタリシト同様ニ(乙)ハ(丙)ヲ受有セサル可カラス 故ニ(甲)(乙)均同ノ性質ヲ有スベシト云フニアリ

然レトモ吾人ハ先ニ論セシ如ク一結果ヲ生スルニハ其数多ノ原因各其特性ニ応シテ相当ノ影響ヲ生スル者タリ 同一ノ打撃ニヨルモ甲物ハ其形ヲ変シ乙物ハ分裂シ丙物ハ継続セル顛動(即チ熱度)ヲ生シ丁物ハ爆發ス

豈因果常ニ均同ナリト云フ可ケンヤ 之ヲ要スルニ事物ノ動作スルニ当リテハ各事物(自動、受動)ノ性質ト其相互ノ關係トハ相依リテ理由ヲ充備スルモノト云ハサル可カラス

然レトモ理由充備スレハ結果明瞭ナリト云フ可カラス 是レ吾人ノ思想ノ希望スル所ナレトモ実果ノ点ニ於テハ之ヲ実観ニ任セサル可カラス 何トナレバ宇宙ノ万化ハ遍通ノ有規聯絡ニ属スルヤ或ハ一個ノ大意匠ニ属スルヤ未ダ俄ニ決スヘカラス

隨テ吾人ハ分解的ニ事物ノ変化ヲ説破シ尽ス能ハス 又総合的ニ其開發ヲ觀察セサル可カラサレハナリ

只吾人ハ仮設上ニ於テ万化ノ有規聯絡アルコトヲ説キ以テ智力的研究ヲ追従スヘキノミ 即チ事物ノ動作スルニ当リテハ各物ノ性質ト其關係ハ論式ノ前提ニシテ其結果ハ論式ノ断定トナスヘキナリ

然レトモ論式ハ常ニ大小ノ前提ニ於テ大前提ハ普遍ノ規則ヲ表ス 而シテ一前提ノ原ハ他ノ大前提ニヨリ其大前提ハ尚其上ノ大前提ヲ要シ最大前提ニ至レハ論式ノ以外ニ出テ他ニ其根底ヲ要スヘシ 故ニ実観以テ実果ヲ尋ヌルハ決シテ忘ル可カラサル要件ナリ 是レ理科学ノ特ニ実証ヲ重ンズル所以ナリ

果シテ然ラハ単ニ論理的必然ヲ拡張シテ事物ノ動作ニ於テ因果ノ均同ヲ説クカ如キハ其當ヲ得タルモノニアラサルナリ

見ルベシ (甲)ト(甲)トヲ合スレハ論理上ニ甲ヲ生スルノミ 而シテ二甲ノ相互ニ動作スルヤ否ヤ未ダ明瞭ナラサルコトヲ 吾人ハ其互動ナシト推測スルヲ可トスヘキカ如シ

而シテ因果均同説ハ其反対ニ出ツルモノナリ 之ヲ要スルニ事物ニ同性アルコトハ其相互動作

アルニ由テ知ル可キモ同性アルカ為メニ相互動作アルヘシトハ論決スヘカラサルナリ

蓋シ事物ノ彼ハ此ニ動作シ此ハ彼ニ動作スル以上ハ二者共ニ本体(サブスタンス)トナルヘキ点ニ於テ均同ナルモノナリ

因果均同ノ説ニシテ既ニ此ノ如キ解釈ニ帰セサル可カラズトセハ尚ホ注意スヘキ条件(この語句が何故ここにあるか不明。誤記か。)現時ノ科学ニ於テ宇宙間ノ諸象ヲ帰一シテ空間中ノ運動ナリト為スカ如キハ其一ナリ

光熱電気等其觀相ヲ異ニスト雖トモ要スルニ皆運動ニ外ナラスト為スハ全ク動作ノ因果ヲ均同ナリトスルノ説ニ基ケルモノナリ 然レトモ今ヤ既ニ其基説ニ変アリ 其ヨリ生シタル釋説其儘存シ得ヘキニアラス 如何ニ訂正スヘキヤ

是レ吾人ノ茲ニ説述シ得ル所ニアラス 然レトモ万性羅列異質衆(さん)然タル宇宙ヲ化シテ孤蓼寂然タル一運動ニ帰着セシムルハ吾人ノ為ス所ニアラサルナリ 尚因果均同説ヨリ起リタル重大ノ一謬説ハ同類互ニ相認知スルヲ得ト云ヘルモノニシテ特身心ノ關係ヲ論議スルモノ是ナリ

此説ノ細論モ亦吾人ノ茲ニ尽シ得ル所ニアラサレトモ彼ノ極端ニ走リテ吾人ノ眼根太陽ノ性質タルニアラズンバ陽体放射ノ光線決シテ見知シ得ラレサルベシト云フ如キハ最モ誤想ノ甚シキ者ト云ハサル可カラス

#### [56]

吾人ハ事物動作ノ説明ヲ求メント欲シテ稍(ようやく)徑路ニ進入シタリ 更ニ歸リテ追討セン 影響轉移説ノ誤謬ハ之ヲ指摘シタリ 此通説ニ異ナリテ動作ノ説明ヲ企テタルハ機會論ナリトス 其説ニ曰ク

(甲)(乙)二体間ノ關係ハ兩者變化ノ機會ナリ

(甲)ノ(イ)ト變シ(乙)ノ(ロ)ト化スルニ當リテ(甲)(乙)各独立ニ變轉シテ毫モ交互動作アルコトナシト

此説タル理科学ニ於テ万化ノ前後順序ヲ觀察シテ其次第ヲ記述スル者ニアリテハ益アルベシト雖トモ哲学上更ニ価値ナキモノナリ

何ントナレハ(甲)ノ(イ)ト化シ(乙)ノ(ロ)ト變スルヤ各独立ニ開發スルモノナレハ機會(丙)ハ毫モ用ナキ者ナリ

若シ機會ニ用アリトセハ(丙)ハ(甲)ニ動作シ又乙ニ動作スル者ナリトセサル可カラズ 然ラハ機會ノ用ヲ説クニ當リテ動作ヲ假定スルモノナリ 是本説ニ矛盾スルナリ

或ハ吾人ノ説明シ得ヘキハ機會ニ限り機會ノ用アルハ規律ノ存スルニヨルト云フ者アレトモ規則ハ決シテ現實ノ者ニアラス

其現實ナルハ事物動作ノ現實ナルニヨル故ニ規律ヲ以テ現實ヲ生セントスルモ規律ハ現實ノ動作ヲ待テ確實ナル者タルヲ以テ吾人ハ將ニ説明セント欲スル所ヲ既ニ仮設スルモノナリ

#### [57]

機會論ニ類似セルモノニライプニッツ氏ノ預定和合説アリ

曰ク 宇宙ノ万物ハ無数ノ原子ヨリ成ル原子ハ各々獨存隔立シテ相互ニ動作スルコトナリ 只預定和合ニヨリテ各々自然ニ開發ス 蓋シ太初天神万様ノ宇宙ヲ想像シ其最善ナルモノヲ拵ンデ終ニ現實タランメタリト 是レラ氏立説ノ要点ナリ

此説ノ及ブ所ニヨレハ宇宙ノ万化ハ太初ヨリ太終ニ至ルマテトシテ預定セサルナリ(預定セサルモノナキナリノ誤記であらう。) 一滴ノ降雨モ一塵ノ飛揚モ皆悉ク千古ニ確定シテ毫モ刻々時々特発ノ現象ニアラス 故ニ風波船舶を進ムルニアラス 船舶の進行却テ亦風雨ヲ生スル事情タリト云フ

果シテ然ラバ宇宙ハ意義ナキ価値ナキ事變ノ継起ニ外ナラサルベシ 意義ナキ価値ナキ事變ノ継起ハ其想像ニ属スルト現實ニ存スルト更ニ損益ナキモノナリ

之ヲ故ニ現實ナラシメタル天神ハ其愚誠ニ笑フベシ 是レ豈天神ノ真面目ナランヤ 況ンヤ

ラ氏ハ宇宙ノ進化ヲ説キ天樂教ヲ主張セント欲ス 亦難カラスヤ 実ニ預定和合ノ説タル定道論ニ異ナラサルナリ

而シテ定道論ノ説タル科学ノ屢之レ向達スルモノナリト雖トモ科学者ト(トハ 加。)特ニ実験実観ヲ重ンジテ以テ其偏向ヲ訂シ宇宙間ノ事変ニ於テ々々現実タルノ価値ヲ採取スルモノナリ

然レトモ定道論ヲ避ケテ現実ヲ有価ナリトナスハ畢竟理論的必然ニヨラズシテ寧ロ實際的感情ニ托スルモノナルナリ

故ニ吾人ハ更ニ理論的説明ノ論拠ヲ取リテラ氏ノ説ヲ討究セン

ラ氏ノ原子ハ個々独立シテ自然ニ開発スル者ナリ 然ラハ吾人力相互動作ト認知スル所ハ如何ニ解釈スヘキカ

ラ氏ハ二個ノ時計ヲ用テ之ヲ喩説セントスルモノノ如シ 乃チ二個同一様ノ時計ヲ取り共ニ其機ヲ運転セシムレハ二者独立シ運転スト難トモ兩者同様ニ時刻ヲ報スベシト為ス 然レトモ二器ノ同様ノ運動ヲ為スヤ 単ニ機械師ノ之ヲ装置シタルノミニアラス 各時器ノ機関ノ存スルニ由ル

是レ時計ノ原子ニ比較シ得可カラサル所ナリ 何ントナレハ時計ノ機関ハ別々ナリト雖トモ共(ともに)同一ノ物質ヨリ成リ又同一様ノ原理ニ随フテ運転スルモノナレハナリ

乃チ時計ハ互ニ相動作セスト雖トモ二器ノ機関ハ共ニ其諸部分相動作スレハナリ 然レトモラ氏ハ云ハン 此ノ如キ動作モ其實預定ニヨリテ自然ニ起ルモノナリト

果シテ然ラハラ氏ノ喩説毫モ其解説ニ益スル所ナシト云ハサル可カラス

更ニ進ンデラ氏ノ説ヲ検スヘキハ万化ノ有規聯絡ノ説明ニアリ ラ氏ノ説ニ於テハ現実ノ宇宙ハ最善最美ノモノナリト為スカ故ニ有規聯絡ハ則チ其善美タルノ一性質トナスヘキカ

然レトモ単ニ之ヲ見レハ有規ノ無規ニ勝ルノ理由甚タ知り難シ 且ツラ氏ハ万様ノ変化ヲ以テ皆悉ク預定ニ出テ同一ノ変化ハ再起セスト為セルカ故ニ普遍ノ理法ハ氏ノ説ノ容レサル所タルカ如シ

果シテ氏ノ説ニ於テ有規聯絡ヲ保存セント欲セハ之ヲ以テ宇宙ノ完全ナル所以ノ一徳トナスカ 然ラサレハ預定ノ説ヲ棄テテ事物現実動作ヲ取ラサル可カラス

[58]

ラ氏ノ説ハ蓋シ有規聯絡ヲ如何ニスヘキ乎ヲ明言セサルモノト云ハサル可カラス 茲ニ吾人ハ通常ノ見解ニヨリ吾人力嘗テ論述スル所ニ由テ之ヲ説カンニ

一物(甲)ノ(イ)ニ転スルヤ同時ニ他物(乙)ノ(ロ)ニ転スルノ必要アリトスヘシ 然ルトキハ此必要(他諸物全体ノ現状ニ帰着スト)ト(甲)ノ(イ)ニ転スルノ二件ハ(乙)ニ動作ヲ及ホスモノト云フ可シ

而シ(乙)ノ(ロ)ニ転シテ(ハ)(ニ)(ホ)等ニ転セサルハ(甲)(乙)(丙)(丁)等ノ諸物体相依テ一聯ノ關係ヲ有スルニ由ルモノト云フヘシ

果シテ然ラハ(イ)ノ生スルヤ他ノ事情ノ生セサル以上ハ必ス(ロ)ノ生スルヲ見ルヘシ

是レ宇宙ニ漸次ノ転化アリ 動化的ノ因果アリ 随テ有規聯絡アル所以ナリ

## 〔第六節〕 万物一体

[59]

前章論スル所ニ由テ見レバ吾人ハ事物ノ動作ヲ説明スルニ万象ノ自己開発ヲ以テシ随テ終始徹到セル定道論ヲ取ルカ然カラサレハ影響轉移ノ説ヲ採リテ事物ニ自発的作用アリト為ササル可カラス

而シテ吾人ハ先ニ云ヘルカ如ク感情的ニ於テ定道論ヲ採ル能ハサルモノナリ 故ニ是ヨリ影響轉移説ニ付一層詳密ナル推測ヲ施シテ満足セント欲ス

吾人ハ前数章ノ論ヲ為スニ常ニ事物ノ多数ナルコトヲ憶測シ置キタリ 故ニ数多離存独立ノ物体ガ如何ニシテ相互ニ關係ヲ有スルニ至ルヤヲ尋ネント欲シ甚だ夥多(かた)ノ難論ニ遭遇セリ

今ヤ此憶測ヲ撤去シテ万物一体ノ説ヲ採テ少シク考案ヲ費スヘキノ位置ニ到達セリ

蓋シ百般ノ事物ニ相互動作アリトセバ万物ハ一実体ノ部分ナラサル可カラズ 然レハ吾人ノ説ハ多元論ヲ捨テテ一元素論ニ帰セサル可カラス 然カスレバ影響轉移ハ變シテ一体啓発トナルヘシ

抑影響轉移説ノ難点ハ事物ノ變化ニ於テ(甲)物何故ニ(乙)物ニ影響ヲ及ボスヤニアリシナリ

今若シ万物ハ一実体ノ諸部分ナリトセハ一物ノ變動他物ニ影響セサルアレハ(セサルヘカラサレハの誤記か。星注)其何故ナルヤヲ尋ネサル可カラサルニ至ル

茲ニ一箇ノ空氣ヲ含メル袋囊アリトセンカ其一部ヲ圧セハ必ス他部ノ隆起ヲ来スベシ 是レ空氣ノ一部分ニ独立ノ性質アリテ自ラ陥入シ他部ニ亦独立ノ性質アリテ自ラ隆起スルニアラス

囊中ノ空氣ハ皆相依リテ一団ヲ為スモノナリ 若シ一団ヲ為サス隔所ニ散在セル空氣ナリセハ決シテ一方ノ為ニ他方ノ變化ヲ生スルコトナキナリ

今夫万物一体ニシテ常ニ其自体ヲ保持スルカユヘニ一物ノ變動ハ必ス他物ニ影響ヲ及ボサルヲ得ス

更ニ詳ニ追鑿スルニ囊中空氣ノ一部ノ圧搾ヲ受タル為ニ隆起ヲ生スルハ或ハ一部ニ於テスルアル数部ニ於テスルアルヘク又時ニハ圧搾ヲ受ケタル外ノ諸部分全体ニ於テスルコトアルヘシ

万物一体中ノ模様モ亦之ヲ以テ推考シ得ベシ 乞フ 図式ヲ以テ之ヲ開示セン

$$\begin{array}{ll} \text{天} = (\text{甲} + \text{乙} + \text{余}) & \text{天} = (\text{イ} + \text{ロ} + \text{余}) \\ \text{天} = (\text{甲} + \text{乙} + \text{遺} + \text{残}) & \text{天} = (\text{甲} + \text{ロ} + \text{補}) \end{array}$$

式中(天)ヲ以テ万物一体トスレハ(甲)ト(乙)トハ二箇ノ物体ナリ

(余)万物中(甲)(乙)ヲ除キタル余ノ諸物ナリ

(+)ハ諸物間ニ存スル關係ナリ

(=)ハ同一ナリト表スル符合ナリ

故ニ  $\text{天} = (\text{甲} + \text{乙} + \text{余})$  ハ(甲)(乙)等ノ万物ハ其相狀別立スルカ如キモ其(天)ノ一体ナリト云フコトヲ表ス

然ルニ万物中(甲)變シテ(イ)トナレハ(乙)亦變シテ(ロ)トナラズンバー一体ヲ保持スル能ハス

故ニ天ハ一体ノ万物ニシテ(イ)(ロ)(余)ヲ含有スルニ至ル是レ第二式ナリ

若シ(甲)(乙)ニアラザルモノノ變化モ亦一物變スレハ之ニ応シテ必ス他物變化アルベシ

是レ第三式ニ於テ(余)ト前ニ現ハセルモノノ中ニ物變化アリタルユヘ(残)(遺)ノ二トシテ之ヲ表スルモノナリ

若シ亦(甲)ハ不變ニシテ(乙)ノミ(ロ)ト變セバ必ス(余)ノ中ノ一物ニ變化アルヘキナリ

故ニ(余)ハ變シテ(補)トナルベシ

以上ハ二物相互ノ動作ニヨリテ變化ヲ説明シタルモノナレトモ或ハ二物相互ニ限ラス三物四物乃至無数ノ諸物間ノ動作ニヨリテ變化アリトセハ  $\text{天} = (\text{イ} + \text{ロ} + \text{ハ} + \text{ニ} + \text{欠})$  ノ如キ式モアルベシ 枚挙ニ邊アラズ

(式中甲、乙、イ、ロ、ハ等ハ一物ノ符号トシ余、遺、残、欠、補ハ多数物ノ符号トナシタルノミニテ別義アルニアラス)

然ラハ則チ万物ノ變化ハ一体ノ諸部分互ニ相關係ヲ有スル間ニ起ルヲ以テ一物ノ變動ハ常ニ他物ノ變動ト相応シ随テ一物他物互ニ相動作スルノ觀ヲ呈スルニ至ルト雖トモ万差ノ諸物ハ常ニ相依テ一体ヲ保存シ一物ノ原性ニ順シテ或ハ彼ノ變化アリ或ハ此ノ變化ヲ生スルニ至ルモノト知ル可シ

[60]

吾人ハ此ノ如ク万物一体ノ説ヲ宣述セリ 然ルニ万ナルモノ如何ニシテ一ナルヤ 一ナルモノ如何ニシテ万ナルヤ

古来議論ノ甚シキ所ニシテ実一ナルモノハ到底一ナルヘク万ナルモノハ到底万ナルヘク若シ万一均同ナリト云ハハ論理ノ規則壊乱スベシトハ誠ニ至当ノ論ナルカ如シ

哲学ノ歴史中ニ於テ既ニ此等ノ点ヨリシテ背反ノ論法ナルモノヲ宣揚セルモノアリ 蓋シ此点ニ関シテ吾人ノ思想ノ明解シ能ハサルモノアリテ存スルナリ

是レ曩(さき)ニ転化ノ解ヲ求ムル段ニ於テ實在ト無在ノ結合ナリト云ヘルト同規ノ論説ナリ 実ニ實在ナルモノハ無在ニアラス無在ナルモノハ實在ニアラス 如何ニ繹思スルモ同一事ニ實在無在ヲ兼具スルトハ吾人ノ思議ニ堪ヘサル所ナリ

然レトモ實在無在ノ合一ナクンバ転化ト云フコトハ存シ能ハサルナリ

或ハ時ノ思想ヲ輸来シテ前時ニハ實在ニシテ後時ニ無在トナリ前時ニ無在ノモノ後時ニ實在ナル 是レ転化ナリト云フモノアレトモ是未タ難点ヲ刈除スル能ハス

吾人ハ一物ニ就テ實在如何ニシテ無在ニナルヤ又無在如何ニシテ實在トナルヤヲ尋ヌルモノナリ 時ノ前後ハ吾人ノ関セサル所實在無在轉換ノ瞬間ニ於テ吾人ハ明解ヲ求ムルモノナリ

此難点解釈サレズ 吾人ハ強テ實在無在ノ合一ト為シテ不思議ヲ存シ置タリ

今亦然リ 万トトハ到底合一セズ 強テ之ヲ解シテ一ハ無碍ノ上ニ於テ之ヲ説キ万ハ有碍ノ上ニ於テ之ヲ論シ有無碍ヲ合シテ之ヲ命シテ万物一体ト為スト云フ

[61]

然ルニ隔離独立ノ諸物ヲ論シテ一体ナリト決シタル以上ハ尚ホ一箇ノ検定ヲ要スル一点アリ

事物ノ関係ノ何タル是ナリ 吾人ハ曩(さき)ニ事物ノ實在ハ相互ノ関係ニアリト為シ其関係ノ何タルヤハ未ダ精究セザリシナリ

蓋シ事物ニシテ各々独立ノ別体ナリトセハ所謂関係ナルモノハ事物ト事物トノ中間ニ存シテ彼此ノ聯絡ヲ立ツルモノナルベシ

果シテ然ラハ夫ハ実体アルヤ否ヤ 若シ実体アリトセハ事物ノ実体ト同時ニ存センヤ 將タ先ツ事物アリテ而シテ後関係ナルモノ出来セシヤ 又既ニ出来セル上ニ於テ関係其物ト事物トハ如何ナル関係ヲ有スルヤ等ノ諸問ヲ討究セサル可カラサリシナリ

然ルニ今万物ヲ一体ニ帰シ一体ノ諸部分ヲ以テ万物トナセリ

此ニ於テ関係ニ実体アレハ必ス事物ト同時ニ存スルコト疑ヒナキヲ知ル

何ントナレハ一体アリテ而シテ后生スルモノハ一体ノ内ニ入ルノ理ナク一体ノ外ニアルモノハ一体ヲ破ルヲ以テナリ

既ニ事物ト同時ニ存シ一体ノ外ニナシトセハ関係ハ事物ト事物トノ間ニアリト云フ可カラス 各事物ノ内部ニアリトセサル可カラス

各事物ノ内部ニアリテ事物ト事物トノ関係ナリト云ハハ抑如何ナルモノナルヤ 他ナシ 事物ノ交互動作是ナリ 然ラハ則チ事物ノ實在ハ万物一体ノ事物ト事物カ互ニ相動作スルニアリト吾人ハ断定スルモノナリ

終結

[62]

吾人ハ事物ノ實在ヲ尋ネテ其相互ノ関係ニアルコトヲ論定シ更ニ進ンテ所謂関係ハ事物相互ノ動作ノ外ニ求ムヘカラサルコトヲ考究シ且ツ此ノ如キ動作ハ万物ノ一体ナルヨリ起リ而シテ其動作

ノ異様ナルハ一体ノ原性ヨリ起ルモノナルコトヲ解説セリ

[63]

人或ハ問ハン事物ノ諸般ノ動作ハ一体ノ原性ヨリ起ルトセハ既ニ原性アル以上ハ動作ノ前後相繫絡シ因果順行スルハ蓋シ当然ノコトナル可シ 然レトモ所謂原性ハ抑如何ニシテ之レ有ルヤ動作ノ起ルヘキ原始ハ如何ニ了解スヘキヤト

此問題タルヤ既ニアリストートル以来ノ疑問ニシテ哲学ノ大ヒニカヲ浪費シタル所ナリ 蓋シ吾人ハ屢実物世界ノ以外ニ出テテ事理ヲ觀察セント欲スルノ誤謬ニ陥ルモノナリ

運動ノ起原ヲ求メテ無動界ニ入ラント欲シ否ナ直ニ無動界ナルモノアリト假定シテ之ヨリ運動ヲ開發シ来ラント欲スルカ如キハ則チ是ナリ

是レ吾人ノ思考ニ於テ通常結果ヲ觀シテ其因ヲ求ムルノ法ヲ拡張スルモノニ過キズト雖トモ然レトモ吾人ノ此論法ヲ及ボシテ不可ナキハ実物世界ニ限り無実ノ世界ニ之ヲ及ボスノ不可ナルコトヲ弁知セサルニ基クモノナリ

蓋シ吾人ハ実物世界ノ順次ヲ追索シテ其原始ニ達スルコトモアラン 然レトモ之ヲ為シ得タルトモ吾人ハ毫モ問題ノ解釈ニ益スル所ナキナリ 何ントナレハ仮令原始ニ於テ之ヲ見ルモ実物世界ニ(「ハ」か。)到底実物世界ニシテ無実世界ニアラス

既ニ実物世界ナルカユヘニ亦運動アリ 決シテ無動ノ域ニアラサレハナリ 夫レ宇宙ハ実在世界ナリ 而シテ吾人ハ此界内ニアリ 此界内ニアリテ動作シ而シテ思考アリ 然ルニ思考ニ虚実アルカ故ニ終ニ虚中実ヲ開發セントス 果シテ之ヲ為スヘキカ 吾人ハ数多ノ問題ヲ提起スベシ

日ハク 世界ハ何故ニ存スルヤ存セサルモ可ナルニアラスヤ

日ハク 何故世界現状ヲ有スル乎異相タルモ不可ナキニアラズヤ

日ハク 世界ニ何故ニ運動変化アルヤ何故ニ寂靜不変ナラサルヤ

日ハク 運動変化ハ何故ニ甲類ナルヤ乙類モ亦可ナラズヤ

此等ノ疑問ハ哲学者ノ関スヘキ所ニアラス

哲学ハ実有ノ世界ニ就キ實際ノ事實ヲ觀シテ其説明ヲ与フルモノナリ 哲学者ハ世界ト事実トヲ創造スヘキモノニアラズ 当ニ之ヲ研究スヘキノミ 故ニ哲学ハ純正實在ヲ創造シ能ハサリシナリ 經驗以外ノ知識ハ哲学ノ認可スヘキ所ニアラザルナリ

實在世界ノ外ニ出テテ仮想世界ノ事ヲ論セント欲スルカ如キハ毫モ根拠ナキモノタルナリ

彼ノ思想ノ必然ト稱スルモノノ如キハ最モ注意ヲ要スルモノナリ 思想ノ必然ハ現實ノ世界ノ原性ヨリ生スルモノ否原性ニ具備スルモノニシテ現實世界ノ事物ニ於テハ決シテ之ニ違フナク現實世界ノ思想ナルカユヘニ此必然アリト難トモ此必然アルカ為メニ現實ナラザル世界ニ断定ヲ下サントスルハ蓋シ道理ヲ弁セサルモノト云ハサルヲ得ス

理想ノ開展ヲ以テ万物ヲ化生スト云フガ如キハ無稽ノ甚シキモノナリ

[64]

思想必然ノ法則ヲ以テ実界ヲ形成セント欲スルノ誤レルコト前段ニ述ルカ如シ 然レトモ顧ミテ吾人ガ論定シタル万物一体ノ理ヲ考察スレハ吾人ハ左ノ二式ヲ得ルモノノ如シ

$$\text{天} = (\text{甲} + \text{乙} + \text{丙}) \quad (\text{甲} + \text{乙} + \text{丙}) = \text{天}$$

第一式ハ(天)ヲ以テ万物ノ基範トシ(天)アルカユヘニ(甲)(乙)(丙)現出スルコトヲ得ルト為スモノニシテ一体カ凝然其自性ヲ保持シテ不変ナルカユヘニ万物其間ニ無数ノ轉變化生スルコトヲ得トスルモノナリ

第二式ハ(天)ヲ以テ(甲)(乙)(丙)ノ現状ニヨリテ生セラルルノ結果ト見ルモノニシテ(天)ハ万物ヲ除テ独存独起スルモノニアラス(甲)(乙)(丙)ノ現實物ヲ檢シテ始メテ之アルモノナリト為スモノナリ

此二種ノ見解ハ相依テ万物一体ノ説ヲ表示スルモノニシテ互ニ相離ルヘカラサルモノナレトモ仮ニ別々ニ之ヲ名ケハ一ハ理想論ト云フヘク一ハ實體論ト云フヘシ

理想論ハ一種ノ理想即チ基範ニ順シテ万物変現スト為スモノナリ 然レトモ所謂理想ナルモノハ虚影抽象的ノ者ニアラス 必ス現実具体的ノ者タルナリ

換言セハ所謂理想ナルモノ現実ノ世界万物ノ基範タルノミナラズ既ニ基範ト云フカユヘニ無実ノ世界モ亦此基範ニ順セサルヘカラスト云フハ不可ナリ

所謂理想ハ現実ノ事物ノ外ニアルモノニアラス 即チ実体ヲ離レサル理想ナリ 然レトモ理想ノ理想タル所以ハ万物ノ開發全ク之ニ順シテ起リ否之ニ依リテ現スルニアリ

即チ万物開發ノ方向順次ハ全ク理想自体ノ性能ヨリ出ツルモノニシテ更ニ外他ノモノニ左右セラレテ然ルニアラサルナリ

之ニ依リテ理想顯現ノ前状ハ其後状ヲ生スルノ所以ヲ具シ各々ノ状態ニ於テ理想實現シテ以テ万物ヲ統制スルモノナリ

而シ其間ニ於テ(甲)ノ(イ)ニ変スルニ当リテ(乙)ノ(ロ)ニ変スルモノナレハ後時ニ至リテハ亦(甲)ノ(イ)ニ変スルコトアレハ必ス(乙)ノ(ロ)ニ変スルヲ見ルヘシ

此理前章ニ論明スルカ如ク一体ノ事物ノ相互動作ニヨルモノニシテ宇宙間ニ器械的系統ノ必然アリ

前時ノ実物実事ガ一定不変理法ニ順シテ後時ノ実物実事ヲ生シ各時ノ実物実事ニ理想ノ全体顯現スルモノナリト為サシムル所以ノ根底ナリ

#### [65]

理想ハ各時ノ状態ニ於テ円ニ顯現スト雖トモ理想ハ之ニ尽クルモノニアラス 其過去ノ状態ヲ經過シタルモ未来ノ状態ヲ生記(生起の誤記か。)スルモ亦理想ノ功能ナリ

之ヲ觀想スルハ無限ノ時ニ於テ無限ノ実界ニ処セスンバ得ヘカラサル所ナリ

単ニ吾人ノ思考ヲ以テ之ヲ尽サントスルハ甚シキ誤ナリ 是レ実体論ノ明ニ認知スル所ナリ

蓋シ実体論ハ各々ノ時ニ於テ存スルノ状態ヲ以テ一定ノ理法ニ順シテ過去諸力ノ動作セルノ結果ニシテ到底動カスヘカラサルモノナリト為ス

只通常実体論ハ一元論ヲ取ラス 多元論ヲ用ユト雖トモ其誤ナルコト前ニ詳論スル所ヲ見テ知ル可シ

果シテ一元論ヲ取ラン乎 事物ノ変化ハ万物相依レル一体ノ性質ヨリ生ズト為ササル可カラス

然レハ理想論モ実体論モ甚シキ徑庭ナキ知ル可シ 只理想論ハ其原理ヲ以テ活動的理想トナシ実体論ハ客觀ノ実物界中ニ其原理ヲ求メ実体具備ノ法則ナリト為スノ異アルノミ

然レトモ実体論者モ其經驗ノ確定セル者ニアリテハ以テ未来ヲ推測スルニ足ルトナシ只其經驗ノ本根ハ実体ヲ措テ他アラサルコトヲ確説スルモノナリ

然レトモ実体論者モ各々繼起ノ状態ノミヲ以テ実体界ノ全豹ナリトナサス 又各々ノ状態ヲ以テ一定ノ目的ニ達スル手段一種ノ意義ヲ表スル装置ナリト為スモノナリ 然ラハ又靈性ノ存在ヲ拒否スルモノニアラサルナリ

#### [66]

吾人ハ嘗テ事物ノ何タルヲ尋ネテ種々ノ考説ヲ檢シタリ 然レトモ未ダ一ノ結論ヲ得サルカ如シ 乞フ前章所々ニ論スル所ヲ採来シテ此判断ヲ挙表セン 蓋シ事物ハ其体不変不動ノモノニアラズ常ニ輾轉流行スルモノニシテ一本體ノ相状ナリトハ曩(さき)ニ論述セシ所ナリ 然ルニ此轉變流化ノ間ニ於テ事物各其自体ヲ保持スルコトモ亦説明セシ所ナリ 更ニ進ンデ吾人ハ万物ノ一体ナルコトヲ論決セリ

然ルニ所謂ル自体ヲ保持スルハ知覺ヲ存スルノ外アル可カラズ 一体ヲ保持スルハ自ラ之ヲ現前セサル可カラス 是レ蓋シ靈性ノ功能ナリ 故ニ事物ハ靈性的実体ニアラズンハ決シテ事物タル能ハサルナリ 靈性的実体ナルカユヘニ能ク其自体ヲ保持シ能ク相状ノ本體タルコトヲ得ルナリ

而シテ此ノ如キハ是万物包含ノ一体ト各々顯現ノ実体共ニ然ルモノト知ル可キナリ

純正哲学(理論)畢